
大里郡寄居町

中 平 遺 跡

(仮称) 寄居P A スマート I C 整備事業埋蔵文化財発掘業務委託
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 7

寄 居 町

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県北西部に位置する寄居町は、荒川の清流が秩父の山間から関東平野に流れ出す扇状地の要に発達した、山美しく水清らかな町です。中世には鉢形城などの城郭が数多く築かれ、今日では、国道140号と254号、JR八高線・東武東上線・秩父鉄道が結節する「人が寄る町」・「人が集う町」です。

寄居パーキングエリアスマートインターチェンジ（仮称）は、寄居町と深谷市・美里町の一市二町と東日本高速道路株式会社により、地域経済の活性化と雇用強化、交通便利性の向上と交通分散による渋滞緩和、災害に強い地域づくりの支援を目的として整備が進められています。

さて、寄居町と深谷市・美里町の境に位置する本地域には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。（仮称）寄居パーキングエリアスマートインターチェンジ整備事業内には中平遺跡が存在していることから、協議の結果、記録保存を行うこととなりました。発掘調査は寄居町の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、松久丘陵から分離した諏訪山先端の南面する緩斜面から、約1200～1100年前の平安時代を中心とした集落跡が発見されました。数多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が、方向を揃えて整然と建ち並んでおり、三面に庇をもつ大型建物跡も発見されました。また、須恵器・土師器に加えて灰釉陶器や鉄製品が数多く出土しました。炉跡や鋳型・^{いれた}埴^{るつぼ}などから、金属生産を行っていたと推定され、この地域の生活・文化・社会を知るうえで、たいへん貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、寄居町、寄居町教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成29年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 塩 野 谷 孝 志

例 言

1. 本書は、大里郡寄居町に所在する中平遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。

2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

中平遺跡 (No.62-196)

埼玉県大里郡寄居町大字用土字中平5840-44
他

平成27年11月10日付け教生文第2-39号

3. 発掘調査は、(仮称)寄居PAスマートIC整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育委員会と寄居町教育委員会が調整し、寄居町の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業

「(仮称)寄居PAスマートIC整備事業埋蔵文化財発掘業務委託 (中平遺跡第1次)」

整理報告書作成事業

「(仮称)寄居PAスマートIC整備事業埋蔵文化財発掘業務委託 (整理) (中平遺跡第1次)」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成27年11月2日から平成28年3月25日まで、西井幸雄・山本靖が担当し実施

した。

整理報告書作成事業は、平成28年6月1日から平成29年1月31日まで、山本が担当して実施し、平成29年3月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第431集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量及び遺構・地形測量は株式会社ヤマト測建、空中写真撮影は株式会社東京航業研究所に委託した。

7. 出土炭化材の樹種同定は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

8. 発掘調査における写真撮影は西井・山本が行い、出土遺物の写真撮影は山本が行った。

9. 出土品の整理・図版作成は山本が行い、西井の協力を得た。

10. 本書の執筆は、I-1を寄居町教育委員会、IV-6を西井、その他を山本が行った。

11. 本書の編集は山本が行った。

12. 本書にかかる諸資料は平成29年4月以降、寄居町教育委員会が管理・保管する。

13. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。(敬称略)

寄居町 寄居町教育委員会 深谷市教育委員会

凡 例

1. 中平遺跡におけるX・Yの数値は、世界測地系国土地標準平面直角座標第IX系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

U-19グリッド北西杭の座標は、X=19340.00m、Y=-57300.00m、北緯36°10′21.42″、東経139°11′46.93″である。（小数点以下第3位切捨て）

2. 調査で使用したグリッドは、国土地標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばU-19グリッド等と呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡
SE…井戸跡 SK…土坑 SD…溝跡
Pit・P…小穴・柱穴

5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

全測図 1:400
遺構図 1:60
遺構図（溝跡） 1:200・1:80
遺構拡大図 1:30
土師器・須恵器・拓影図等 1:4
砥石など 1:3
鉄製品・紡錘車・土鍾・玉類 1:2

6. 遺構図・遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。



須恵器…断面黒塗り 施釉範囲…15%網掛け
油煙・煤等の付着…30%網掛け
鉄製産関連遺物金属付着物…30%網掛け
鉄製産関連遺物被熱・還元…20%網掛け
鉄製産関連遺物粘土付着…15%網掛け

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。

8. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・器種は、土師器・須恵器・ロクロ土師器・灰釉陶器・陶器と表記した。
・口径・器高・底径はcm、重さはg単位である。
・（ ）内の数値は復元推定値、[]内の数値は現存値、他は計測値を示す。
・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。
A-雲母 B-片岩 C-角閃石 D-長石
E-石英 F-軽石 G-砂粒子 H-赤色粒子 I-白色粒子 J-白色針状物質
K-黒色粒子 L-その他

・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・焼成は、良好・普通・不良の3段階で示した。
・色調は、『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。

・備考には、出土位置・注記No・煤の付着・推定される須恵器産地・調整や整形の特徴などを記した。

・観察表に記載しなかった遺物は、文末に出土位置・注記No・図版番号を記した。

9. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図（寄居・高崎、寄居町・深谷市の都市計画図を編集して使用した）。

目 次

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	1. 住居跡	11
1. 発掘調査に至る経過	1	2. 掘立柱建物跡	89
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	3. 井戸跡	117
(1) 発掘調査	2	4. 溝跡	118
(2) 整理・報告書の作成	2	5. 土城	123
3. 発掘調査・報告書作成の組織	3	6. 石器集中	135
II 遺跡の立地と環境	4	7. その他の遺構と遺物	139
1. 地理的環境	4	V 自然科学分析	142
2. 歴史的環境	5	1. 樹種同定	142
III 遺跡の概要	7	VI 調査のまとめ	145
IV 遺構と遺物	11	写真図版	

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	4	第17図 第8号住居跡出土遺物	22
第2図 周辺の遺跡	6	第18図 第9号住居跡・出土遺物(1)	24
第3図 中平遺跡基本土層	7	第19図 第9号住居跡出土遺物(2)	25
第4図 中平遺跡全体図(1)	8	第20図 第10・11号住居跡・第38号土城	27
第5図 中平遺跡全体図(2)	9	第21図 第10号住居跡出土遺物(1)	28
第6図 中平遺跡位置図	10	第22図 第10号住居跡出土遺物(2)	29
第7図 第1・6号住居跡・第21号土城	12	第23図 第10・11号住居跡出土遺物	30
第8図 第1・6号住居跡出土遺物	13	第24図 第12号住居跡	32
第9図 第2号住居跡・出土遺物	14	第25図 第12号住居跡炭化材・遺物出土状況	33
第10図 第3・4号住居跡	15		
第11図 第3号住居跡出土遺物	16	第26図 第12号住居跡出土遺物(1)	34
第12図 第4号住居跡出土遺物	17	第27図 第12号住居跡出土遺物(2)	35
第13図 第5号住居跡	18	第28図 第13号住居跡	36
第14図 第5号住居跡出土遺物	19	第29図 第13号住居跡出土遺物	37
第15図 第7号住居跡・出土遺物	20	第30図 第14・15号住居跡(1)・第69号土城	39
第16図 第8号住居跡		第31図 第14・15号住居跡(2)	40
・第23・28・43・44号土城	21	第32図 第14号住居跡出土遺物(1)	41

第33图	第14号住居跡出土遺物 (2)	42	第69图	第37・38号住居跡	86
第34图	第15号住居跡出土遺物	44	第70图	第37・38号住居跡出土遺物 (1)	87
第35图	第16号住居跡	46	第71图	第37・38号住居跡出土遺物 (2)	88
第36图	第16号住居跡出土遺物	47	第72图	第1号掘立柱建物跡・出土遺物	90
第37图	第17号住居跡	49	第73图	第2号掘立柱建物跡・出土遺物	92
第38图	第17号住居跡出土遺物 (1)	50	第74图	第3号掘立柱建物跡	93
第39图	第17号住居跡出土遺物 (2)	51	第75图	第4号掘立柱建物跡 (1)	94
第40图	第18号住居跡・第87号土城	52	第76图	第4号掘立柱建物跡 (2)	95
第41图	第18号住居跡出土遺物	53	第77图	第4号掘立柱建物跡 (3) ・出土遺物 (1)	96
第42图	第19号住居跡・出土遺物	54	第78图	第4号掘立柱建物跡出土遺物 (2)	97
第43图	第20・23号住居跡	56	第79图	第4号掘立柱建物跡出土遺物 (3)	98
第44图	第20・23号住居跡出土遺物	57	第80图	第4号掘立柱建物跡出土遺物 (4)	99
第45图	第21号住居跡・第71号土城	58	第81图	第5号掘立柱建物跡 (1)	102
第46图	第21号住居跡跡跡・出土遺物 (1)	59	第82图	第5号掘立柱建物跡 (2)・出土遺物	103
第47图	第21号住居跡出土遺物 (2)	60	第83图	第6号掘立柱建物跡	105
第48图	第22号住居跡	62	第84图	第7号掘立柱建物跡 (1)・出土遺物	106
第49图	第22号住居跡出土遺物	63	第85图	第7号掘立柱建物跡 (2)	107
第50图	第24号住居跡・出土遺物	64	第86图	第8号掘立柱建物跡 (1)	108
第51图	第25号住居跡・出土遺物	65	第87图	第8号掘立柱建物跡 (2)	109
第52图	第26号住居跡	66	第88图	第9号掘立柱建物跡 (1)・出土遺物	110
第53图	第26号住居跡出土遺物	67	第89图	第9号掘立柱建物跡 (2)	111
第54图	第27号住居跡	68	第90图	第10号掘立柱建物跡・出土遺物	112
第55图	第27号住居跡出土遺物	69	第91图	第11号掘立柱建物跡	113
第56图	第28号住居跡・出土遺物	70	第92图	第12号掘立柱建物跡	114
第57图	第29号住居跡・出土遺物	72	第93图	第13号掘立柱建物跡	115
第58图	第30号住居跡・出土遺物	73	第94图	第14号掘立柱建物跡・出土遺物	116
第59图	第31号住居跡	74	第95图	第15号掘立柱建物跡・出土遺物	117
第60图	第31号住居跡出土遺物 (1)	75	第96图	第1号井戸跡・出土遺物	118
第61图	第31号住居跡出土遺物 (2)	76	第97图	第6号溝跡	119
第62图	第32号住居跡・出土遺物	77	第98图	第7・3・2号溝跡	120
第63图	第33号住居跡 (1)	78	第99图	溝跡出土遺物	122
第64图	第33号住居跡 (2)	79	第100图	土城 (1)	124
第65图	第33号住居跡出土遺物	80	第101图	土城 (2)	125
第66图	第34・35号住居跡 ・第34号住居跡出土遺物	82	第102图	土城 (3)	126
第67图	第35号住居跡出土遺物	83	第103图	土城 (4)	127
第68图	第36号住居跡・出土遺物	84	第104图	土城 (5)	128

第105図	土壌（6）	129
第106図	土壌（7）	130
第107図	土壌（8）	131
第108図	土壌出土遺物	132
第109図	第1・2号石器集中	136

第110図	石器集中出土遺物（1）	137
第111図	石器集中出土遺物（2）	138
第112図	グリッドピット出土遺物	139
第113図	グリッド遺物	140
第114図	樹種同定炭化材	143

表 目 次

第1表	第1・6号住居跡出土遺物観察表	13
第2表	第2号住居跡出土遺物観察表	14
第3表	第3号住居跡出土遺物観察表	17
第4表	第4号住居跡出土遺物観察表	17
第5表	第5号住居跡出土遺物観察表	18
第6表	第7号住居跡出土遺物観察表	20
第7表	第8号住居跡出土遺物観察表	22
第8表	第9号住居跡出土遺物観察表	23
第9表	第9号住居跡出土土鍾・編物石観察表	26
第10表	第10・11号住居跡出土遺物観察表	31
第11表	第12号住居跡出土遺物観察表	35
第12表	第13号住居跡出土遺物観察表	38
第13表	第14号住居跡出土遺物観察表	43
第14表	第15号住居跡出土遺物観察表	45
第15表	第16号住居跡出土遺物観察表	47
第16表	第17号住居跡出土遺物観察表	51・52
第17表	第18号住居跡出土遺物観察表	52
第18表	第19号住居跡出土遺物観察表	54
第19表	第20・23号住居跡出土遺物観察表	57
第20表	第21号住居跡出土遺物観察表	60
第21表	第22号住居跡出土遺物観察表	62
第22表	第24号住居跡出土遺物観察表	64
第23表	第25号住居跡出土遺物観察表	65
第24表	第26号住居跡出土遺物観察表	67
第25表	第27号住居跡出土遺物観察表	69
第26表	第28号住居跡出土遺物観察表	71
第27表	第29号住居跡出土遺物観察表	72

第28表	第30号住居跡出土遺物観察表	73
第29表	第31号住居跡出土遺物観察表	76
第30表	第32号住居跡出土遺物観察表	77
第31表	第33号住居跡出土遺物観察表	80
第32表	第34号住居跡出土遺物観察表	83
第33表	第35号住居跡出土遺物観察表	83
第34表	第36号住居跡出土遺物観察表	84
第35表	第37号住居跡出土遺物観察表	88
第36表	第38号住居跡出土遺物観察表	89
第37表	第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	90
第38表	第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	92
第39表	第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表	100・101
第40表	第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表	104
第41表	第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表	107
第42表	第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表	111
第43表	第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表	112
第44表	第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表	116
第45表	第1号井戸跡出土遺物観察表	118
第46表	溝跡出土遺物観察表	123
第47表	土壌一覽表	131～135
第48表	土壌出土遺物観察表	135

第49表	旧石器観察表	135
第50表	グリッドピット出土遺物観察表	139

第51表	グリッド遺物観察表	140
第52表	樹種同定結果	143

写真図版目次

図版 1	1	調査区遠景（北から）		4	第12号住居跡遺物出土状況
	2	A区遠景（南から）		5	第12号住居跡炭化材出土状況
	3	A区全景（北から）		6	第13号住居跡
	4	B・C区遠景（東から）		7	第13号住居跡カマドB遺物出土状況
	5	B・C区全景（南から）		8	第14・15号住居跡
図版 2	1	A区全景（南から）	図版 6	1	第14号住居跡
	2	B区全景（東から）		2	第14号住居跡カマド
	3	C区全景（北西から）		3	第14号住居跡遺物出土状況（1）
	4	第1・2・6号住居跡 第1号掘立柱建物跡		4	第14号住居跡遺物出土状況（2）
	5	第2号住居跡 第1号掘立柱建物跡		5	第15号住居跡
	6	第2・6号住居跡		6	第15号住居跡カマド（1）
	7	第6号住居跡		7	第15号住居跡カマド（2）
	8	第6号住居跡		8	第16号住居跡
図版 3	1	第3・4号住居跡	図版 7	1	第17・18号住居跡
	2	第3・4号住居跡遺物出土状況		2	第17号住居跡遺物出土状況（1）
	3	第3号住居跡カマド遺物出土状況		3	第17号住居跡遺物出土状況（2）
	4	第4号住居跡		4	第18号住居跡遺物出土状況（1）
	5	第5号住居跡		5	第18号住居跡遺物出土状況（2）
	6	第5号住居跡遺物出土状況		6	第19号住居跡
	7	第7号住居跡		7	第20・23号住居跡
	8	第8号住居跡		8	第21号住居跡
図版 4	1	第8号住居跡遺物出土状況	図版 8	1	第21号住居跡カマド（1）
	2	第9号住居跡		2	第21号住居跡カマド（2）
	3	第9号住居跡カマド		3	第21号住居跡カマド（3）
	4	第9号住居跡カマド東西断面		4	第21号住居跡カマド（4）
	5	第9号住居跡土鍾出土状況		5	第22号住居跡
	6	第9号住居跡編物石出土状況		6	第22号住居跡遺物出土状況
	7	第10・11号住居跡		7	第24号住居跡カマド
	8	第10号住居跡カマドA		8	第25号住居跡
図版 5	1	第11号住居跡	図版 9	1	第25号住居跡カマド
	2	第12号住居跡		2	第26号住居跡
	3	第12号住居跡カマド		3	第26号住居跡掘方

	4	第26号住居跡遺物出土状況	図版14	1	第9号掘立柱建物跡
	5	第27号住居跡		2	第10号掘立柱建物跡
	6	第27号住居跡カマドA			第1号井戸跡
	7	第27号住居跡掘方		3	第10号掘立柱建物跡
	8	第28号住居跡		4	第11号掘立柱建物跡
図版10	1	第28号住居跡掘方		5	第12号掘立柱建物跡
	2	第28号住居跡カマド		6	第13号掘立柱建物跡
	3	第29号住居跡		7	第14号掘立柱建物跡
	4	第29号住居跡遺物出土状況		8	第15号掘立柱建物跡
	5	第30号住居跡遺物出土状況	図版15	1	第1号井戸跡断面
	6	第30号住居跡カマド		2	第6号溝跡
	7	第31号住居跡		3	第6号溝跡東側断面
	8	第31号住居跡遺物出土状況		4	第3号溝跡断面
	1	第31号住居跡遺物出土状況		5	第2号溝跡
図版11	2	第32号住居跡		6	第2号溝跡断面
	3	第33号住居跡		7	第1号石器集中(1)
	4	第33号住居跡カマド		8	第1号石器集中(2)
	5	第33号住居跡掘方	図版16	1	第1号住居跡出土遺物
	6	第34号住居跡		2	第6号住居跡出土遺物
	7	第35号住居跡		3	第2号住居跡出土遺物
	8	第35号住居跡遺物出土状況		4~7	第3号住居跡出土遺物
	1	第36号住居跡		8~10	第4号住居跡出土遺物
図版12	2	第37・38号住居跡		11~13	第5号住居跡出土遺物
	3	第37・38号住居跡遺物出土状況(1)	図版17	1~4	第5号住居跡出土遺物
	4	第37・38号住居跡遺物出土状況(2)		5	第7号住居跡出土遺物
	5	第37・38号住居跡 焼土遺構		6~8	第8号住居跡出土遺物
	6	第2号掘立柱建物跡		9~15	第10号住居跡出土遺物
	7	第3号掘立柱建物跡	図版18	1	第10号住居跡出土遺物
	8	第4号掘立柱建物跡(1)		2・3	第11号住居跡出土遺物
図版13	1	第4号掘立柱建物跡(2)		4	第10・11号住居跡出土遺物
	2	第4号掘立柱建物跡(3)		5~12	第12号住居跡出土遺物
	3	第4号掘立柱建物跡Pit 9	図版19	1~4	第12号住居跡出土遺物
	4	第5号掘立柱建物跡		5~8	第13号住居跡出土遺物
	5	第5号掘立柱建物跡遺物出土状況		9~11	第14号住居跡出土遺物
	6	第6・7号掘立柱建物跡	図版20	1~3	第14号住居跡出土遺物
	7	第7号掘立柱建物跡		4~12	第15号住居跡出土遺物
	8	第8号掘立柱建物跡	図版21	1・2	第16号住居跡出土遺物

	3～9	第17号住居跡出土遺物		12	第38号住居跡出土遺物
	10・11	第18号住居跡出土遺物	図版26	1	第37号住居跡出土遺物
図版22	1～4	第18号住居跡出土遺物		2	第38号住居跡出土遺物
	5～6	第19号住居跡出土遺物		3	第4号掘立柱建物跡出土遺物
	7～9	第20・23号住居跡出土遺物		4	第10号掘立柱建物跡出土遺物
	10～13	第21号住居跡出土遺物		5	第5号掘立柱建物跡出土遺物
	14	第22号住居跡出土遺物		6	第15号掘立柱建物跡出土遺物
図版23	1	第21号住居跡出土遺物		7	第6号溝跡出土遺物
	2～6	第22号住居跡出土遺物		8	第34号土壇出土遺物
	7・8	第25号住居跡出土遺物		9	第35号土壇出土遺物
	9～11	第26号住居跡出土遺物		10	第108号土壇出土遺物
図版24	1	第25号住居跡出土遺物		11	グリッドビット出土遺物
	2・3	第26号住居跡出土遺物		12・13	グリッド遺物
	4～7	第27号住居跡出土遺物	図版27	1	鉄製品・銭貨
	8	第28号住居跡出土遺物	図版28	1	第9号住居跡出土土鍾
	9	第29号住居跡出土遺物	図版29	1	第9号住居跡出土編物石
	10～15	第31号住居跡出土遺物		2	白玉・土鍾
図版25	1～3	第31号住居跡出土遺物		3	砥石
	4	第32号住居跡出土遺物		4	石製・土製紡錘車
	5～9	第33号住居跡出土遺物	図版30	1	石器集中出土石器
	10・11	第36号住居跡出土遺物		2	グリッド遺物・石器

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

平成24年4月27日、寄居町建設課から埼玉県大里郡寄居町大字用土5840番地50他14筆における(仮称)寄居PAスマートICの設置計画に先立ち、寄居町教育委員会教育長へ埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて照会があった。

照会を受けた寄居町教育委員会では、事業計画地の大半が周知の埋蔵文化財包蔵地である中平遺跡(埼玉県遺跡番号No.62-196)に該当していることを確認したため、試掘調査を実施した上で、適切な保護措置を判断すると回答した。ただし、この時点では調査対象となる土地の全てが民有の農地であったことから、試掘調査は事業計画の進展を待って実施することとした。そのため、試掘調査を実際に行ったのは、照会から2年以上を経た平成26年度のことである。

平成26年12月16日及び17日に実施した試掘調査の結果、古代の所産と考えられる竪穴住居跡や掘立柱建物跡のほか、溝跡や土壌等の遺構が複数検出された。遺構は、計画地のほぼ全面に分布しており、土師器や須恵器等の遺物も各所から出土した。このような状況から、工事に際しては発掘調査による記録保存が避けられないと判断し、その旨を寄居町建設課へ伝えて発掘調査に向けて協議を行うことになった。

しかし、調査面積や期間等を勘案すると、直営による発掘調査の遂行は、寄居町教育委員会の体制では困難であったことから、埼玉県教育委員会に支援を要請する運びとなった。

本工事計画にかかる文化財保護法(以下、法)第94条第1項の規定による「埋蔵文化財発掘の通知」は、平成27年9月11日付け寄建発第2320号で寄居町長から寄居町教育委員会教育長に提出され、同年9月15日付け寄生収第540号で埼玉県教育委員会教育長へ進達した。この通知に対しては、平成27年9月17日付け教生文第5-766号で、工事着手前に発掘調査を実施するように指示が出された。

平成27年10月15日、かねてより協議を重ねていた発掘調査の支援について、埼玉県教育委員会、寄居町、寄居町教育委員会、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の4者で「(仮称)寄居PAスマートIC建設予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。本協定に基づき、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査の実施機関に決まったため、平成27年11月2日付けで、寄居町と公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の間で正式に委託契約書を締結した。

調査にあたり、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは平成27年10月22日付け公財埋文第415号で法第92条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」が提出され、同年10月26日付け寄生収第650号により埼玉県教育委員会教育長へ進達した。本届出に対しては、平成27年11月10日付け教生文2-39号で発掘調査の実施に係る指示通知が出された。

(寄居町教育委員会生涯学習課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

中平遺跡の発掘調査は、(仮称) 寄居PAスマートIC整備事業に伴って平成27年11月2日から平成28年3月25日まで実施した。調査面積は3553.12㎡である。発掘調査及び工事の進捗の関係から、L形の発掘調査区域の中央をA区、両翼をB・C区と分割した。

平成27年10月22日に発掘調査届等の事務手続きを行った。発掘調査事務所及び発掘器材は、同事業に伴う深谷市北坂遺跡第3次から継続使用した。11月2日に囲柵設置工事を実施し、11月4日から重機によるA区の表土掘削を開始した。11月9日より補助員作業を開始し、遺構の確認作業に入った。10日から基準点測量委託、11日から遺構等測量委託を実施し、遺構概略図を作成した。確認された遺構は掘削・精査に着手し、順次、土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。12月24日に空中写真撮影を実施した。平成28年1月下旬に、A区の発掘調査は終了した。

1月下旬に、発掘調査事務所を撤去・新設し、B・C区の調査に着手した。発掘調査及び工事の進捗と関連し、表土掘削は1月下旬から2月中旬に3度に分けて実施した。基準点測量委託・遺構等測量委託も同様である。表土掘削を終えた箇所から順次、遺構確認・掘削・精査に着手し、土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。3月2日に空中写真撮影を実施した。

3月23日に発掘作業は終了し、発掘器材の搬出・発掘調査事務所の撤去、実績報告書の作成と発見届・保管証提出等の事務処理を行い、3月25日に完了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成28年6月1日から平成29年1月31日まで実施した。

6月上旬から、遺物の水洗・註記を行い、順次、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺物は7月中旬から実測図を作成し、計測値や特徴なども記入した。遺物実測には3スペース、オルソイメージャーなどを活用した。8月から、遺物実測図は製図ベンでトレースを行い、必要に応じて拓本を採った。これらはスキャナを使用してデジタル・データ化し、レイアウト編集して印刷用の挿図版下データを作成した。また、11月に遺物の写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

遺構図の整理は、遺物の整理作業と並行して6月上旬から行った。発掘調査で実施した遺構測量システムのデジタルデータ及び手作業によって作成した平面図・土層断面図等を修正・編集し、第二原図を作成した。7月から順次、パソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下データを作成した。10月から発掘調査で撮影された遺構写真の中から選択し、写真図版用の版下データを作成した。

自然科学分析は、2軒の竪穴住居跡から検出された炭化材の樹種同定を委託した。

10月中旬から、作成した遺構・遺物のデータ及び自然科学分析結果等をもとに報告文の執筆を開始した。これと遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付・編集を行った。完了後印刷業者に入稿し、校正を3回行い、平成29年3月下旬に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第431集「中平遺跡」を刊行した。

図面類・写真類・遺物・データ類等の諸資料は寄居町教育委員会が管理・保管する。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成27年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部			
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行		
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫		
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	主幹兼調査第二課長	田 中 広 明		
総 務 課 長	安 田 孝 行	主 幹	西 井 幸 雄		
		主 査	山 本 靖		

平成28年度（整理・報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部			
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行		
総務部		調 査 部 副 部 長	細 田 勝 靖		
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼整理第二課長	山 本		
総 務 課 長	曾 川 浩 二				

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

埼玉県の地形は、西部に山地、東部に平地が広がる。山地と平地の境には、松久・比企・加治などの複数の丘陵と、櫛挽・江南・入間・武蔵野などの複数の台地が連なる。北部の県境に沿って利根川が東流し、県中部に荒川、県東部に中川が南下する。荒川によって形成された荒川低地の東側には、大宮台地が南北に広がる。さらに、県東部の中川低地を挟み下総台地と対峙する。

中平遺跡が所在する大里郡寄居町は、埼玉県の北西部に位置する。秩父山地に源を発する荒川が秩父の山間から関東平野に流れ出す扇状地の要に立地する。荒川は町域を屈曲しながら東流し、山地・丘陵・台地・低地と多様な地形を形成する。

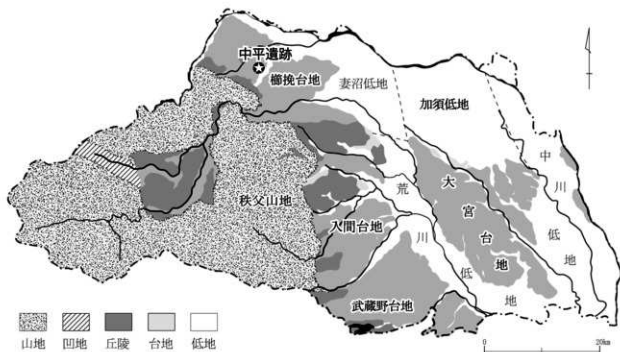
中平遺跡が位置する寄居町用土は、寄居町の北側に張り出した地区で、上武山地から半島状に延びる松久丘陵の東端部に広がる。また松久丘陵先端の東側には、開析によって分かれた諏訪山・山崎山の残丘がある。諏訪山・山崎山の頂部の標高

は約116mである。

諏訪山・山崎山の北側には、美里町広木を起点とする志戸川が北東へ流れる。志戸川は延長9.3kmの一級河川である。深谷市西田で小山川・女堀川等と合流し、利根川へ注ぐ。また、諏訪山・山崎山の南側には藤治川が北東に流れ、深谷市榛沢で志戸川に合流する。

中平遺跡は諏訪山の南端部に位置し、標高は75～81mである。市町境界に沿って深谷市北坂遺跡と区分されるが、本来は連続する一つの遺跡である。中平遺跡は諏訪山の南側斜面、北坂遺跡は諏訪山上の平坦面に立地する。

調査区域は、諏訪山から南側に降下する斜面地と、諏訪山裾部の狭い平坦地にあたる。北側は標高81～76mにかけて急激な斜面地が形成され、標高76m以南の裾部は緩やかな傾斜をもつ狭い平坦地になっている。調査区域外の南・東・西側は低地向う斜面地で、遺構は存在しない。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

中平遺跡の周辺では、旧石器時代から現在に至るまで、人々の生活が営まれ続けてきた。

旧石器時代

後期旧石器時代前半期の遺跡は、深谷市北坂遺跡第2次調査と寄居町末野遺跡がある。北坂遺跡では、頁岩製のナイフ形石器と黒曜石製の台形様石器が一括して出土したが、この時期に特徴的な局部磨製石斧等はみられない。一方、末野遺跡では局部磨製石斧と打製石斧が出土した。

後期旧石器時代後半期の遺跡は、本庄市浅見山Ⅰ遺跡（8）と寄居町赤浜牛無具利遺跡がある。浅見山Ⅰ遺跡では、二側縁加工の黒曜石製のナイフ形石器2点と剥片類約50点が発見された。グリッドや他時期の遺構に混入していた石器を含めると総数117点となる。出土した石器の形態には、複数の時期の石器群が含まれている。赤浜牛無具利遺跡では石器集中Ⅰ箇所が検出され、黒曜石製のナイフ形石器・掻器が出土した。両遺跡とも砂川期の良好な資料である。

縄文時代

草創期は、深谷市西谷遺跡（10）と水久保遺跡（11）が著明である。近接する両遺跡からは、多縄文系土器群が出土した。

早期は、美里町甘粕山遺跡群（19）の東山遺跡から、撚糸文系土器群終末段階の土器と石器がまとめて出土した。

前期は、深谷市宮西遺跡（3）では花積下層式〜関山式期の集落跡、深谷市東光寺裏遺跡（7）では諸磯式期の集落跡が調査された。

中期は、美里町広木上宿遺跡（22）と寄居町堀米遺跡（25）で、加曾利E式期の集落跡が発掘された。

弥生時代

寄居町用土・平遺跡（20）は、埼玉県における弥生時代研究の基準遺跡である。中期の竪穴住居

跡10軒が検出され、多数の弥生土器と磨製有角石斧等がみつかった。また、甘粕山遺跡群の如来堂C遺跡から、縄文時代終末から弥生時代前期の土器がまとめて出土した。

古墳時代

中平・北坂遺跡と谷を挟んだ北側には、深谷市安光寺古墳群（17）が存在する。また、低地から見上げる諏訪山・山崎山の縁辺部には、諏訪山古墳群（16）・西山古墳群（15）・千光寺古墳群（13）・猪山古墳群（14）が営まれている。さらに、寄居町用土北沢遺跡（27）・用土高城遺跡（26）では、周溝跡から円筒埴輪が出土した。なお、集落跡は、寄居町中野遺跡（24）と堀米遺跡がある。

奈良・平安時代

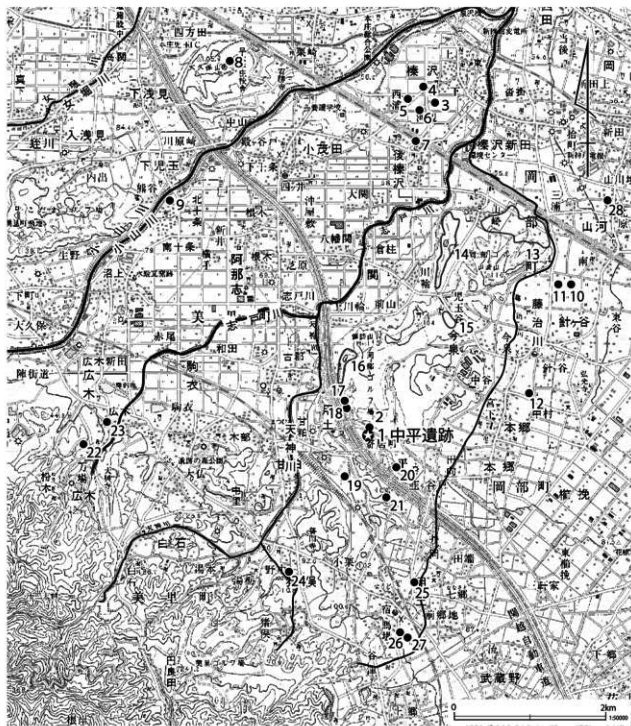
北坂遺跡では、平安時代の竪穴住居跡14軒・掘立柱建物跡9棟などが発見された。須恵器・土師器とともに円面硯・焼印・鉤・鈴等が出土し、一般集落とは異なる様相がみられる。

遺跡の周辺には古墳時代末期から平安時代の集落跡が存在し、谷を挟んだ北側には深谷市清水谷遺跡（18）が存在する。甘粕山遺跡群の東山遺跡では、平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が検出された。掘立柱建物跡の付近から出土した瓦塔・瓦堂は、重要文化財となっている。

寄居町中山遺跡（21）から、奈良・平安時代の集落跡と製鉄炉、排滓坑が発見され、多くの鉄滓が出土した。また甘粕山遺跡群の如来堂D遺跡では、製鉄燃料に関わる平安時代の炭焼窯跡が検出され、鉄生産に関わった地域といえる。

中世

広木上宿遺跡から埋納された漆箱が出土し、その中から金・銀・金銅・銅・鉄製の小型宝塔と小型未開敷蓮華が発見された。類例がなく時期の推定は難しいが、伴出した瓦や寺院跡の伝承等から、中世に位置づけられる。



- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1 中平遺跡 | 2 北坂遺跡 | 3 宮西遺跡 | 4 神田Ⅰ遺跡 | 5 神田Ⅱ遺跡 |
| 6 神田Ⅲ遺跡 | 7 東光寺裏遺跡 | 8 浅見山Ⅰ遺跡 | 9 宮ヶ谷戸遺跡 | 10 西谷遺跡 |
| 11 水久保遺跡 | 12 伊勢方遺跡 | 13 千光寺古墳群 | 14 猪山古墳群 | 15 西山古墳群 |
| 16 瀧山古墳群 | 17 安光寺古墳群 | 18 清水谷遺跡 | 19 甘粕山遺跡群 | 20 用土・平遺跡 |
| 21 中山遺跡 | 22 広木上宿遺跡 | 23 順蔵神社前遺跡 | 24 中野約遺跡 | 25 堀米遺跡 |
| 26 用土高城遺跡 | 27 用土北沢遺跡 | 28 西龍ヶ谷遺跡 | | |

第2図 周辺の遺跡

Ⅲ 遺跡の概要

中平遺跡は、寄居町大字用土字中平に所在する。JR八高線用土駅の北西約2.2km、寄居町と深谷市・美里町の一市二町の境界に位置する。松久丘陵から分離した調布山先端の東西方向に延びる尾根の南面する緩斜面に立地する。標高は約75～81mである（第6図）。発掘調査は関越自動車道（仮称）寄居PAスマートIC整備事業に伴って実施され、市町境界で区切られた深谷市北坂遺跡第2・3次も同事業に伴う発掘調査である（埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第425集・第426集参照）。

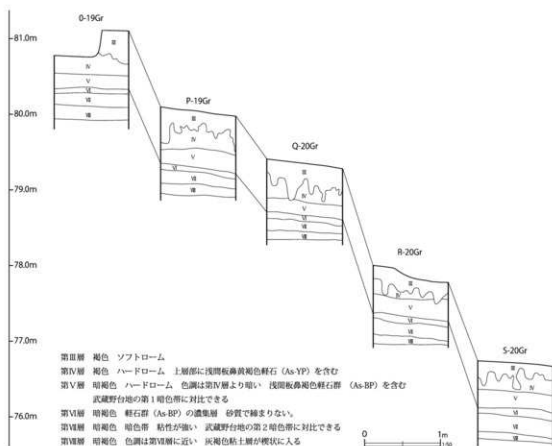
中平遺跡は、丘陵の南面する斜面地に形成された9世紀代を中心とする集落跡である。竪穴住居跡38軒、掘立柱建物跡15棟、井戸跡1基、溝跡13条、土壇12基、旧石器時代の石器集中2箇所、ピット多数が検出された（第4・5図）。旧石器時代の遺構・遺物を中心とする北坂遺跡第2・

3次調査区域とは、対極的な状況である。

中平遺跡の集落は、丘陵の肩部に沿って東西に延びる第6号溝跡によって北側が画され、この以南に住居跡・掘立柱建物跡等の遺構が分布する。唯一、区画溝の北側に所在する第22号住居跡は規模が極めて小さく、須恵器坏類を整然と重ね置いたような状態で出土した。そのため、通常の居住とは異なる機能が想定される。

中平遺跡では8世紀前半代に集落形成が開始され、該当する第8・18号住居跡の主軸方向は他の住居跡とは異なる。8世紀後半代から本格的な集落展開が始まり、竪穴住居跡36軒、掘立柱建物跡15棟が、斜面地の等高線に沿うように整然と方向を揃えて構築されている。

住居跡は、カマドが基本的に東壁に設置され、長軸を主軸方向に向ける。カマド袖の芯材には片



第3図 中平遺跡基本土層

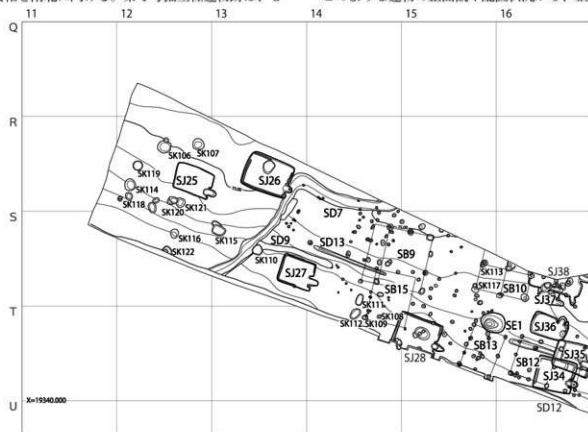
岩が多用され、片岩は支脚にも用いられる。第15号住居跡では、破損した土師器甕3個体が天井部の芯材に転用されていた。柱穴は確認されていない。貯蔵穴も不明瞭である。

第12・31号住居跡は焼失家屋で、壁際から炭化した垂木材が並んで発見された。第21号住居跡では、中央に設置された炉跡から羽口・埴塙・鍛造剥片、壁際から未使用の鋤型が出土した。金属製品を生産した工房遺構と推定される。

掘立柱建物跡は2間×2間の側柱建物が多く、長軸を南北に向ける。第4号掘立柱建物跡は、3

間×2間の身舎の三面に廂が付く大型建物である。第9号掘立柱建物跡では、西側に廂が付設される。また、第10号掘立柱建物跡は唯一の総柱建物跡で、南側に同時期の井戸跡が隣接する。

東壁にカマドが設置された住居跡は、対面する西壁側に入り口が想定できる。掘立柱建物跡は桁行（長辺）が東西に面し、また廂も西面する。このように住居跡と掘立柱建物跡は、西側を正面と意識したことが推定される。また、建物遺構は重複が少なく、整然とした分布状況が捉えられる。このような建物の正面観や配置状況から、企画性



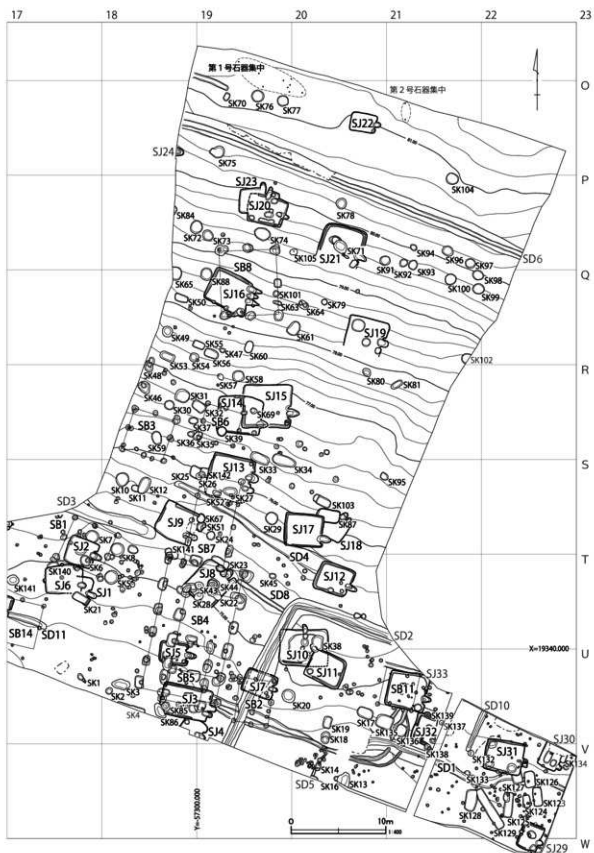
第4図 中平遺跡全体図(1)

の高い集落と位置づけることが可能である。

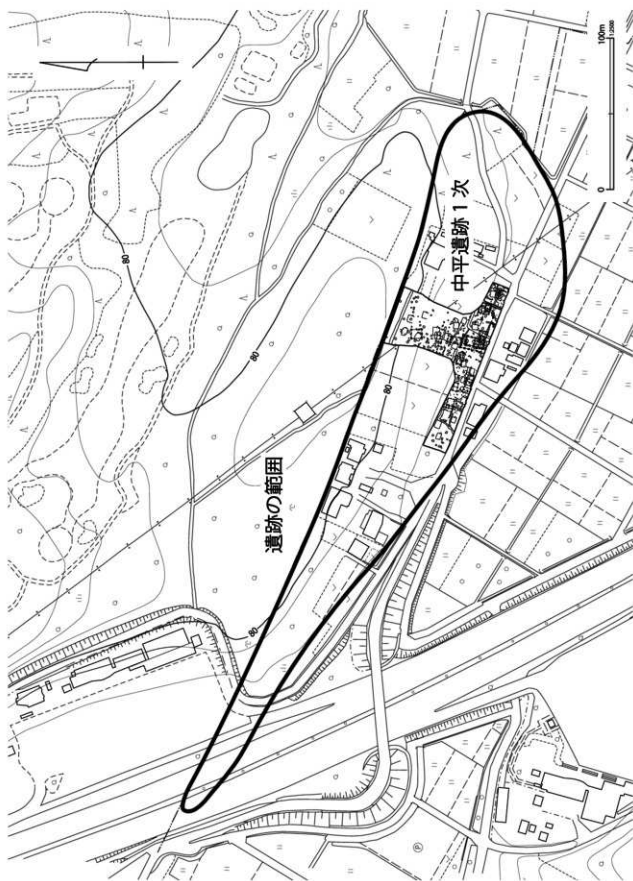
遺物は、土師器・須恵器・灰陶陶器・紡錘車・白玉・土鍾・刀子・釘・砥石等が出土した。なかでも灰陶陶器や鉄製紡錘車は、同時期の集落遺跡と比べて多い。隣接する北坂遺跡では円面硯・焼印・鉤・鈴等が出土し、一般集落とは異なる様相がみられる。中平遺跡と北坂遺跡は古代の榛沢郡と那珂郡の境界付近に位置し、この地域で古代の

役所的な性格を想起させる遺構・遺物が発見された意義は大きい。また金属製品の生産に関わる遺物は、中山遺跡や如来堂D遺跡などともに鉄製産に関わった地域として注目される。

このほかに、旧石器時代の石器集中2箇所が検出された。出土遺物は少ないが、北坂遺跡第2次調査で発見された旧石器時代石器集中の南限が明らかになった。なお、基本土層は第3図に示した。



第5图 中平遺跡全体图(2)



第6図 中平遺跡位置図

IV 遺構と遺物

1. 住居跡

中平遺跡では、38軒の竪穴住居跡が発見されている。1軒を除き、調査区域北端を画する第6号溝跡以南に分布している。南向きの斜面地に立地することも要因の一つと推定されるが、基本的にはカマドが東壁に設置されている。そして、主軸方向は、ほとんどが等高線と平行している。また竪穴住居跡同士の重複が少なく、単独で存在しているものが多い。重複する場合も2軒程度の重複にとどまり、複雑な重複関係はみられない。カマドが複数基検出された竪穴住居跡もあるが、この場合、基本的には竪穴住居跡同士の重複がない。柱穴は、ほとんどの竪穴住居跡でみつからない。唯一確認できた第38号住居跡は、中平遺跡のほかの竪穴住居跡に比べて規模が大きい。

第12・31号住居跡では、屋根を支えた垂木材などの炭化した建築部材が見つかり、焼失家屋と推定される。また、第21号住居跡からは小規模な鍛冶炉と土製の埴輪・鋳型が発見されている。鍛冶炉の覆土からは鍛造剥片が検出され、金属製品の鑄造・鍛造が行われていたようである。さらに集落の北限を画する第6号溝跡の北側に所在する第22号住居跡は、ほかの竪穴住居跡の四分の一ほどの規模である。須恵器環などの食器類が住居の隅に整頓されたような状態で出土していることから、通常の居住と異なる機能が推定される。

第1・6号住居跡・第21号土壌（第7・8図）

T-17グリッドに位置する。第1号住居跡は第21号土壌と、第6号住居跡は第2号住居跡・第140号土壌とも重複する。覆土の堆積状況と出土遺物の比較から、第1号住居跡は第6号住居跡よりも新しい。また、第6号住居跡よりも第140号土壌が新しく、第2号住居跡と重複する北西隅は検出されていない。

第1号住居跡は東壁にカマドが付設され、カマド右側（南側）が外方に張り出す。A区とB区の区切り付近に位置するため、第6号住居跡と重複する西半部は不明瞭である。また南東コーナーから南壁部が第21号土壌に壊されている。

主軸方向の東西長は不明であるが、南北幅は3mほどである。ほかの住居跡との比較から、平面形態は主軸方向に長軸をもつ長方形と推定される。確認面からの深さは0.1m前後で、貼床が施されている（第4層）。

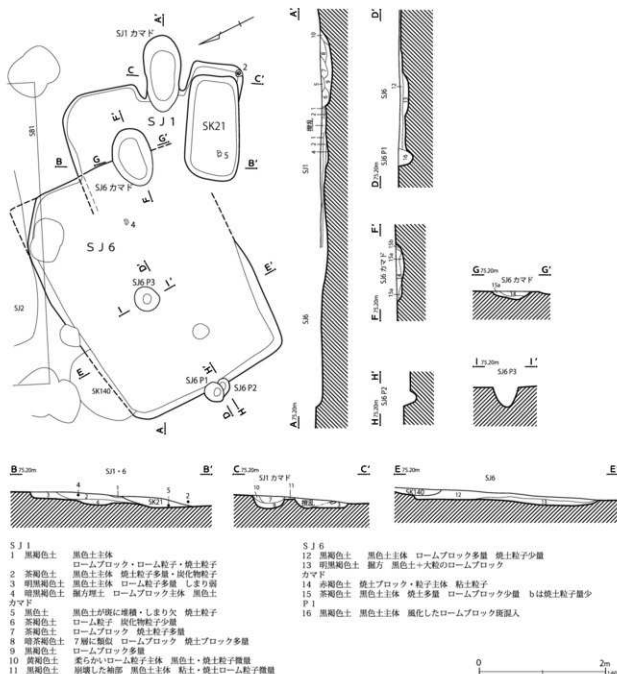
カマドは、短い袖部と幅0.58m×奥行1.2mの楕円形の燃焼部が検出されている。主軸方位はN-117°-Eを指す。煙道部は削平され、残存していなかった。焚き口が住居の壁際に、架け口が住居の壁外に位置していたことが推定される。火床面は確認されていないが、燃焼部の奥壁に焼土ブロックの堆積がみられた。

柱穴・壁溝・貯蔵穴などは確認されていない。

出土遺物は9世紀第4四半期頃と推定される。

第6号住居跡も、東壁にカマドが付設された平面形態が長方形の住居跡である。第1号住居跡と重複する東壁中央から南壁中央部の壁は検出されていない。主軸方向に長軸を向け、主軸長3.94m、南北幅2.96m、確認面からの深さ0.1mを測り、主軸方位はN-88°-Eを指す。掘方を埋め戻すように貼床が施され（第13層）、その上面にはロームブロックを多量に含んだ黒褐色土が堆積する。重複する第1号住居跡との新旧関係も勘案すると、埋め戻された可能性が高い。

カマドは東壁の中央から南側に寄った箇所に設置され、燃焼部のみが検出された。平面楕円形の掘方で、東半部が東壁の外側に張り出す。主軸長0.92m、短軸長0.6m、床面からの深さ0.12mである。



第7図 第1・6号住居跡・第21号土壌

楕円の中心が壁とほぼ一致する位置関係から、架け口を壁線上、焚き口を住居内部に推定できる。掘方埋土（第15層）の上面の焼土を主体とする土層の第14層は火床面と思われる。

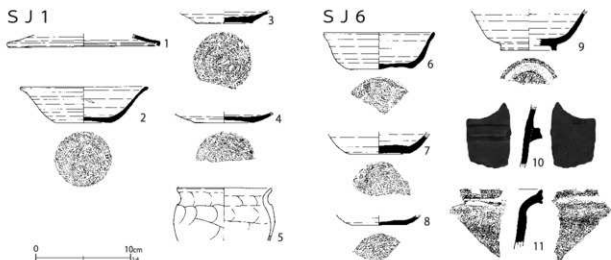
ピットは西壁際の重複する2基（Pit 1・Pit 2）と住居跡中央付近の1基（Pit 3）である。Pit 1・Pit 2はカマド対面の西壁中央付近に位置することから、出入り口施設に伴う遺構と推定

される。一方、Pit 3の用途・性格は不明である。住居中央に位置する柱穴の可能性もある。

壁溝・貯蔵穴等の施設はみつからない。

出土遺物は9世紀第2四半期頃と推定される。

第21号土壌は長軸をN-119° -Eに向ける長方形の平面形態で、第1号住居跡南東隅から南壁に沿って位置する。第1号住居跡の掘方の一部である可能性もあるが、長軸方向が第1号住居



第8図 第1・6号住居跡出土遺物

第1表 第1・6号住居跡出土遺物観察表 (第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	蓋	(16.0)	[1.3]		DEHI	10	普通	灰	SJ1B 末野産	16-1
2	須恵器	環	(13.3)	3.8	5.9	CDEHIK	60	不良	浅黄	SJ1%1 末野産 底部回転糸切り 内面黒面大か?	
3	須恵器	環		[1.4]	6.2	AHIK	75	良好	灰	SJ1 末野産 底部回転糸切り	
4	須恵器	環		[1.1]	6.0	EHIK	55	普通	灰	SJ1%3 末野産 底部回転糸切り	
5	土師器	小型甕	(10.0)	[5.7]		CHIK	10	不良	橙	SJ1%2	
6	須恵器	環	(11.5)	3.9	7.2	EHIK	25	良好	灰	SJ6C 末野産 底部回転糸切り	16-2
7	須恵器	環		[2.3]	(6.6)	CDIK	20	普通	灰	SJ6B 末野産 底部回転糸切り	
8	須恵器	環		[1.1]	(6.0)	EIK	25	良好	灰白	SJ6C 末野産 底部回転糸切り	
9	須恵器	高台付碗		[4.3]	(5.9)	CDEHIK	20	普通	灰	SJ6 末野産 貼付高台 底部回転糸切り	
10	須恵器	甕				EHIK		普通	灰	SJ6B 末野産	
11	須恵器	甕				CDEHIK		普通	灰白	SJ6C 末野産	

跡の北壁の方向と異なることから、第1号住居跡よりも新しい土壌と捉えた。長軸長2.80m、短軸長0.86m、深さ0.15mである。

第2号住居跡 (第9図)

S・T-17グリッドに位置する。第6号住居跡、第6・7号土壌と重複する。

平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸方向に長軸を向け、主軸長3.14m、南北幅2.92mを測り、主軸方位はN-112°-Eを指す。確認面からの深さは0.2mほどである。覆土は下層がローム粒子を多量に含む黄褐色土、上層が一気に埋まったような暗黒褐色土が堆積し、住居跡と掘立柱建物跡が重複する遺構の配置から、埋め戻された可能性がある。

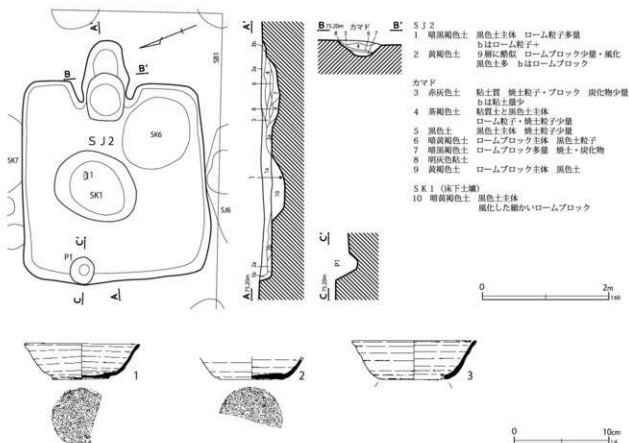
主柱穴は確認されていない。

カマドは燃焼部が検出され、先端に煙道部がわ

ずかに残存している。燃焼部の奥壁は、住居跡の外側に大きく張り出している。袖は幅0.25m、長さ0.45mが残る。カマドの規模は、燃焼部の長軸長1.28m、幅0.72m、袖部外側の幅1.1mである。土層は第3・8層が天井部の崩落土、第6・7・9層が掘方への充填土である。明確な被燃面は確認されていないが、第6層の上面が火床面と推定される。

貯蔵穴・壁溝は検出されていない。ピットは1基のみである。カマドに対面する西壁際の配置状況から、出入り口施設に伴う機能が想定される。

住居跡中央付近から、床下土壌が検出されている。長軸が北東-南西方向を指す楕円形で、長径1.32m、短径1.06m、床面からの深さ0.2mを測る。黒色土と風化した細かいロームブロックが混合された単層である。用途・性格は不明である。



第9図 第2号住居跡・出土遺物

第2表 第2号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	環	(12.0)	3.7	6.2	DEIK	60	良好	黄灰	末野産 底部回転糸切り No.5-D・床下土層		16-3
2	須恵器	環		[2.4]	6.8	CEHI	50	普通	灰	末野産 底部回転糸切り カマド		
3	須恵器	環	(13.0)	4.1	(7.2)	EHIK	40	普通	灰白	末野産 底部周辺ヘラケズリ カマド		

出土した遺物は少ない。図示し得た末野産の須恵器環3点(底部回転糸切り2点、底部周辺ヘラケズリ1点)から、9世紀前半台(第1～2四半期)と推定される。

第3号住居跡(第10・11図)

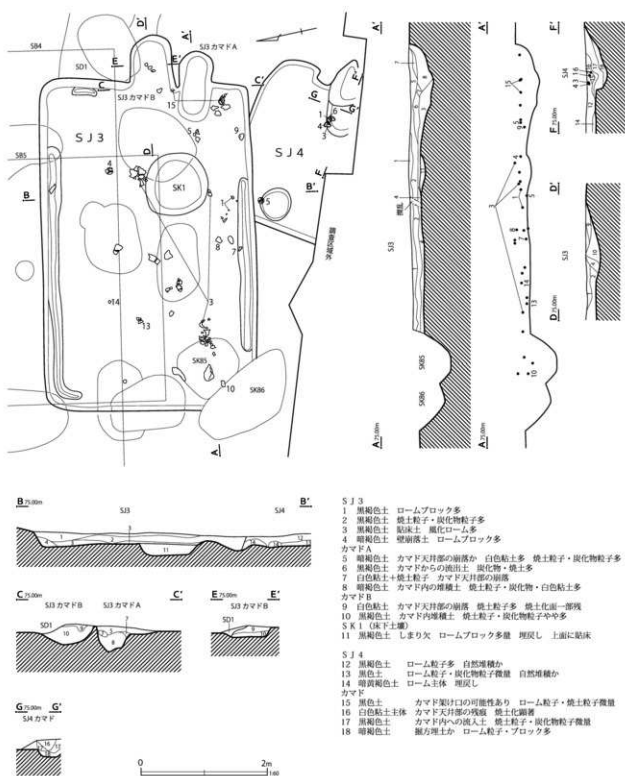
U-18・19グリッドに位置し、重複する第4号住居跡、第4・5号掘立柱建物跡よりも新しい。第1号溝跡は第3号住居跡よりも新しく、第85・86号土層との新旧関係は不明である。

平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長5.24m、南北幅3.36mを測り、主軸方位はN-103°-1Eを指す。確認面からの深さは0.22mほどである。

主柱穴は確認されていない。

カマドは2基検出された。確認状況やカマド構築・焼土・炭化物等の堆積状況等から、東壁中央のカマドBが住居跡の構築当初、南側のカマドAは造り替えられたものと判断される。いずれも燃焼部のみが検出され、煙道部は削平されている。カマドAは、二重の掘方状であるが、底面はわずかな段に過ぎない。長軸長1.1m、幅0.52mである。覆土には白色粘土が多く含まれ、天井部の崩落と推定される。カマドBは住居内の段差は不明瞭で、壁外に張り出す。残存する長軸長1.04m、幅0.68mである。

壁溝は北壁・南壁の一部に巡るが、しっかりと掘り込みをもたない。カマドの前面に床下土層が確認されている。東西1.0m、南北1.0mの間



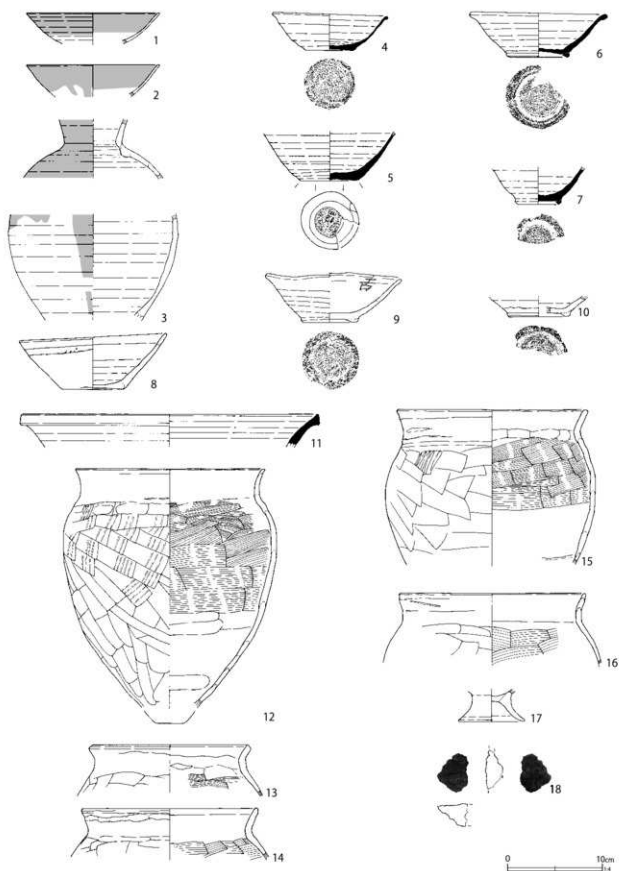
第10図 第3・4号住居跡

丸方形を呈し、床面からの深さは0.2mである。用途等は不明である。

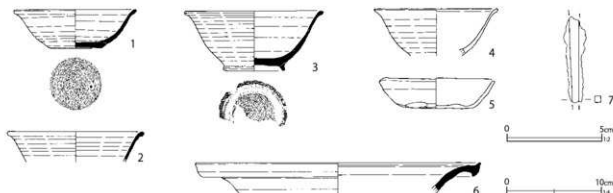
遺物は灰釉陶器・ロクロ土師器・須恵器環類・土師器甕等が出土し、第11図9は口縁部内面に

「吉」と線刻がある。9世紀末～10世紀初頭と推定される。

第11図18は椀型滓である。上面が平面、下面は球面状に湾曲する。残存する長さ4.3cm・幅3.2cm・



第11图 第3号住居跡出土遺物



第12図 第4号住居跡出土遺物

第3表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰釉陶器	碗	(14.0)	[3.3]		HK	20	普通	灰白	猿投産 №28・№29・C	
2	灰釉陶器	碗	(13.9)	[3.4]		IK	20	良好	灰白	猿投産 C	
3	灰釉陶器	長頸瓶		[6.4]		IK	25	良好	灰黄	猿投産 №16・28・30・32・U18Gr	
4	須恵器	環	12.0	3.9	5.0	EIK	80	良好	黄灰	末野産 赤み大・桶門型に並む 底部回転糸切り №9・C	16・4
5	須恵器	環		[5.2]	6.1	CDEHK	70	不良	に黄	末野産 底部周辺ヘラズリ №5・B・SK85・U18Gr	16・5
6	須恵器	高台付碗	(14.2)	4.6	6.0	DEJK	40	良好	灰	南北金産 貼付高台 底部回転糸切り 口縁部歪み C・D	
7	須恵器	高台付碗		[4.0]	(4.4)	EHLJK	50	良好	灰黄	末野産 貼付高台 底部回転糸切り №22	
8	ワコ土器	碗	15.4	5.5	6.5	HIK	60	普通	に黄	内面黒色 底部手持ちヘラズリ №24・U18Gr	16・6
9	ワコ土器	高台付碗	14.0	5.2	5.7	CDEHK	95	普通	淡黄	底部回転糸切り 貼付高台 内面に「吉」のヘラ №1	16・7
10	ワコ土器	高台付碗		[2.2]	6.6	CEIK	40	普通	黒褐	貼付高台 底部回転糸切り №14	
11	須恵器	甕		[3.5]		EIK	5	良好	灰	末野産 A	
12	土師器	甕	(20.0)	[25.4]		CHK	60	普通	橙	№32・D	
13	土師器	甕	(16.4)	[5.5]		CEHK	45	普通	赤褐	№18	
14	土師器	甕	(18.6)	[5.6]		CEHK	55	普通	赤褐	№21・カマド・B・C・D	
15	土師器	甕	18.8	[16.5]		CHK	60	普通	橙	器面風化顯著 №2・6・カマド・A	
16	土師器	甕	(19.7)	[7.8]		CHK	50	普通	赤褐	カマド B・A・D	
17	土師器	台付甕		[3.4]	(7.0)	CEHK	60	普通	に黄	D 台部	

第4表 第4号住居跡出土遺物観察表 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	環	(12.7)	4.1	5.5	DEHK	90	良好	灰黄	末野産 底部回転糸切り カマド №1	16・8
2	須恵器	環	(14.0)	[3.3]		EIK	10	良好	灰黄	末野産 カマド	
3	須恵器	高台付碗	(14.5)	6.4	(6.3)	CHK	45	不良	淡黄	末野産 貼付高台 底部回転糸切り カマド №2・D	16・9
4	ワコ土器	碗	(13.0)	[5.0]		EHIK	15	普通	明赤褐	外面煤付着 カマド №3	
5	土師器	環	12.0	3.3	7.3	CEIK	95	普通	に黄	底部ヘラズリ 内面煤付着 カマド №1	16・10
6	須恵器	甕	(30.0)	[3.4]		EHIK	10	普通	灰	末野産 カマド №4	

厚さ2.4cm・重さ20.2g、非磁着である (A)。

第4号住居跡 (第10・12図)

U-18・19グリッドに位置し、南側約三分の一が調査区域外にある。覆土の堆積状況から、重複する第3号住居跡が新しい。

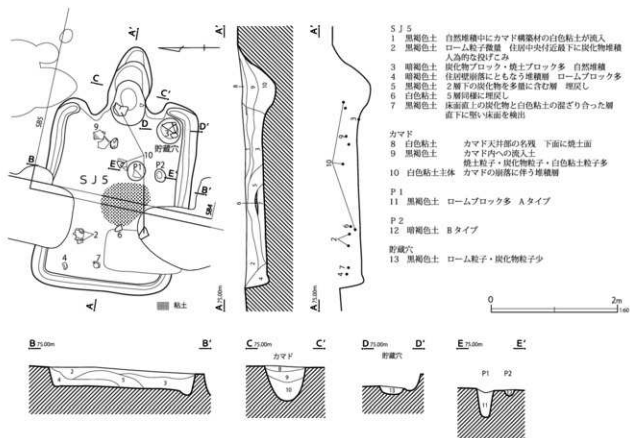
平面形態は方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長2.58m、南北残存長1.70mを測り、主軸方位はN-121°-Eを指す。確認面からの深さは0.18mほどである。

柱穴・壁溝・貯蔵穴は確認されていない。

カマドは燃焼部が残存し、地山を掘り残した北袖が短く残る。土層の堆積から推測される架け口は住居壁の内側に位置する。残存長1.22mである。

カマドに対面する西壁際から、東西0.34m、南北0.32mの土塊が検出されている。上面の貼土の有無は確認されていないが、用途不明の床下土塊の可能性はある。

遺物は須恵器環類・甕、ワコ土師器、土師器



第13図 第5号住居跡

第5表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	杯	12.5	3.7	7.1	CDHIK	50	普通	灰	本野産 底部周辺ヘラケズリ T18Gr	16-11
2	須恵器	杯	12.6	4.0	6.6	CDEHIK	80	普通	に35 灰	本野産 底部回転ヘラケズリ №10-11	16-12
3	須恵器	杯	12.9	4.3	7.1	CDEIK	100	普通	灰白	本野産 底部回転糸切り 内外面煤付着 C	16-13
4	須恵器	杯	(12.7)	3.5	(7.0)	ACDHIK	25	良好	灰白	本野産 底部回転糸切り №9	
5	須恵器	杯	(12.6)	4.2	(5.0)	EHIK	20	良好	灰	本野産 底部回転糸切り B	
6	須恵器	高台付埴	16.4	7.8	8.8	EHIK	80	普通	に35 灰	本野産 附付高台底面糸切り 内面炭化 外面下平に煤付着 №7	17-1
7	須恵器	杯	(12.8)	3.7	6.4	CDEHIK	45	普通	明赤褐	本野産 底部回転糸切り №8	17-2
8	土師器	杯	(14.7)	3.9		CEIK	25	普通	に35 灰	平底 C	
9	須恵器	甕	(26.8)	[20.0]		CEHIK	50	普通	明黄褐	本野産 №2・カマド	17-3
10	須恵器	甕		[33.0]		EHIK	40	普通	灰	本野産 №1・4・6	17-4

坏等が出土し、9世紀第3四半期頃と推定される。

第12図7は断面形が方形を呈し、先端が細くなる形状から、鉄製の釘と思われる。残存する長さ4.5cm・幅0.35cm・厚さ0.35cm・重さ4.4gである(D/図版27)。

第5号住居跡 (第13・14図)

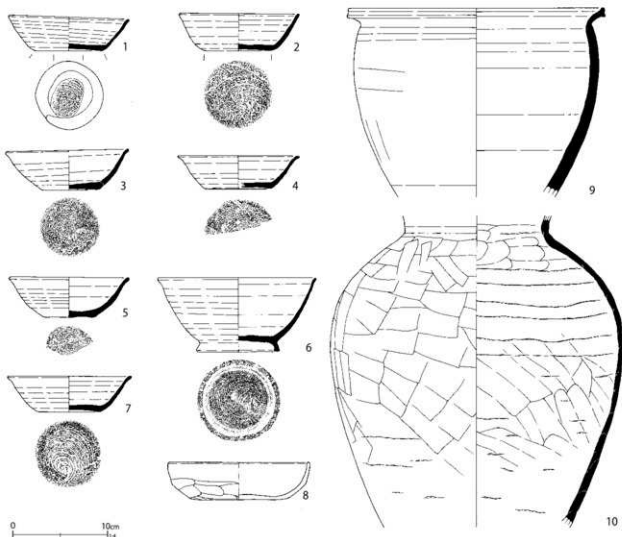
T・U-18グリッドに位置し、重複する第4・5号掘立柱建物跡は新しい。

平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長3.1m、南北幅2.3m、確認面

からの深さは0.3mを測り、主軸方位はN-99°-Eを指す。壁崩落後の炭化物・白色粘土を含む下半層は、斜面上方の北側から埋め戻されている。

カマドは地山を掘り残した短い袖を芯として構築されている。燃烧部が壁外に張り出し、焚き口が壁付近、架け口が壁外にある。長さ1.0m、幅0.62mの燃烧部の先端には煙道の痕跡が0.2mほどみられる。カマド最上層は天井部の残存層で、カマド内面側に焼土化が認められる。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に付設されてい



第14図 第5号住居跡出土遺物

る。東西0.4m、南北0.38m、床面からの深さ0.14mの小規模な掘り込みである。

壁溝は、カマドが付設された東壁を除いて全周する。ピットは2基検出されたが、配置位置から柱穴とは異なる。

遺物は、末野産須恵器の底部糸切り離し坯を主体とし、全面回転ヘラケズリ・周辺ヘラケズリも共伴する。9世紀中葉～後半頃と推定される。

第7号住居跡 (第15図)

U-19グリッドに位置し、第2号掘立柱建物跡と重複する。住居の中央部を南北に縦断する近世の第2号溝跡によって、大半が攪乱されている。

平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長3.4m、南北幅2.6mを測り、

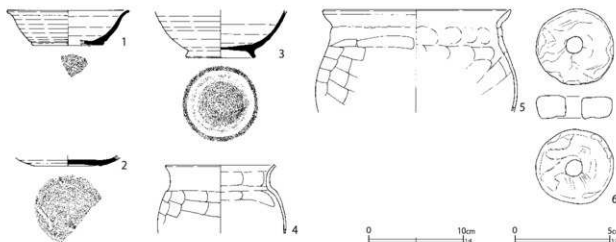
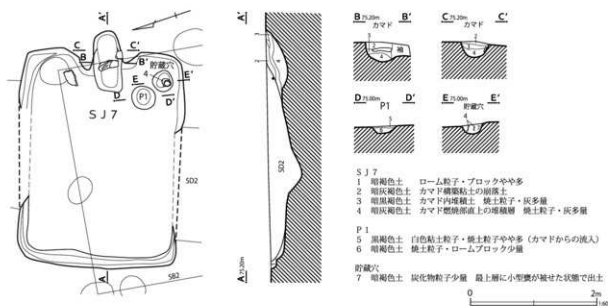
主軸方位はN-104°-Eを指す。

カマドは地山を掘り残した短い袖を芯として構築され、燃焼部が壁外に張り出す。架け口の手前には骨組みとして差し渡された片岩が残存している。規模は、長さ0.94m、幅0.45mである。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に付設されている。東西0.34m、南北0.32m、床面からの深さ0.14m、浅く小規模な掘り込みである。主柱穴は確認されていない。Pit 1は浅い。

出土遺物は9世紀中葉頃と推定される。

第15図6は石製紡錘車で、貯蔵穴から出土した。上径4.1cm・下径3.7cm・孔径0.9cm・高さ1.2cm、残存率90%、残存重33.4g、石材は滑石である(図版29-4)。



第15図 第7号住居跡・出土遺物

第6表 第7号住居跡出土遺物観察表 (第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	杯	(12.8)	3.7	(7.3)	CHK	10	普通	灰	木野産 底部回転糸切り	A	17-5
2	須恵器	杯		[1.1]	7.0	CDEHK	55	普通	青灰	木野産 底部回転糸切り 幕状圧痕 内面保付着	D	
3	須恵器	高台付埴		[5.0]	7.4	EIK	30	良好	黄灰	木野産 貼付高台付 底部回転糸切り	C	
4	土師器	小型甕	11.3	[7.4]		CEHK	95	普通	橙	外面保付着 №1・貯蔵穴		
5	土師器	甕	(19.8)	[10.9]		CEHK	20	普通	明赤褐			

第8号住居跡・第23・28・43・44号土壇

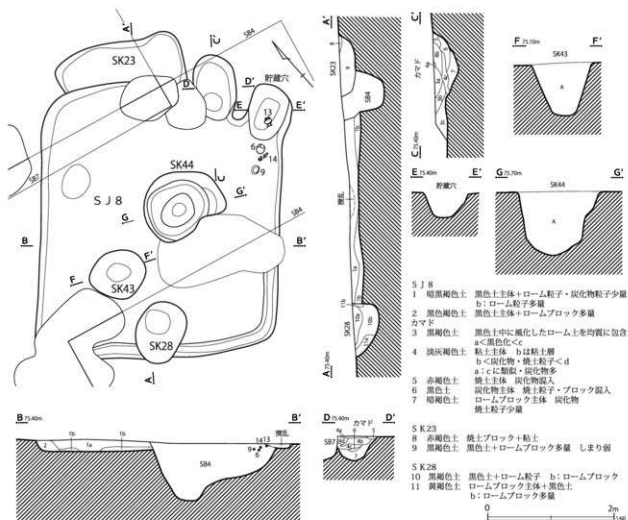
(第16・17図)

T-18・19グリッドに位置する。第8号住居跡が最も古く、第4・7号掘立柱建物跡と第23・28・43・44号土壇は新しい。深度の深い遺構が多く、第8号住居跡への影響が顕著である。

第8号住居跡は平面形態が長方形で、カマド

を北東壁に付設する。主軸長4.36m、南北幅3.8m、確認面からの深さ0.18mを測り、主軸方位はN-38°-Eを指す。

カマドは住居東隅から北東壁約三分の一ほどに設置されている。燃焼部が検出され、煙道部は削平されている。長さ1.0m、幅0.66mである。カマド北西の左袖は重複する第7号掘立柱建物跡



第16図 第8号住居跡・第23・28・43・44号土壇

によって掘削され、カマド南東の右袖は地山掘り残しと思われる。第4層は崩落した天井部で、粘土によってカマドが構築されている。奥壁側に炭化物層が堆積し、掘方はロームブロックを主体に整地されている。支脚の痕跡や土層断面から捉えられないが、炭化物層の堆積が奥に限定されることから、架け口は壁線上付近と推定される。

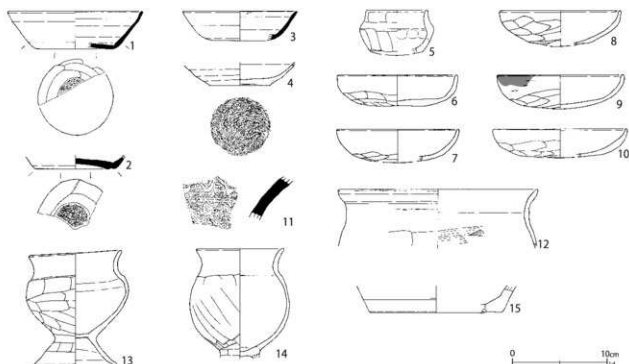
柱穴は確認されていない。貯蔵穴は住居東隅のカマド右袖と南東壁に挟まれたように付設されている。長径0.88m、短径0.6m、床面からの深さ0.35mの楕円形の掘り込みである。壁溝は、南東壁中央から南西壁に沿って巡っている。

遺物は底部周辺ヘラケズリの須恵器環と土師器環・甕・小型台付甕が出土し、8世紀中葉頃と

推定される。

第23号土壇は、第4・7号掘立柱建物跡よりも新しい。第8号住居跡と第4・7号掘立柱建物跡と一括して調査に着手したため、西側三分の一の詳細は不明である。上面で焼土ブロックと粘土が確認されたため、第8号住居跡のカマドの可能性も考慮したが、第8号住居跡よりも新しい土壇と判明した。平面形態は長方形で、長軸長2.05m、残存短軸長0.7m、確認面からの深さ0.24mを測る。長軸方位はN-50°—Wを指す。

第28号土壇は、第8号住居跡カマドと対面する位置関係から出入り口施設か、形状・規模から第4・7号掘立柱建物跡の柱穴と想定された。しかし、第8号住居跡との新旧関係と覆土の堆積



第17図 第8号住居跡出土遺物

第7表 第8号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	坏	(14.0)	4.0	(8.4)	EHIK	30	普通	灰白	木野産 底部周辺ヘラケズリ 貯蔵穴	17-6
2	須恵器	坏	(12.0)	3.1	(7.6)	EHIK	30	普通	灰白	木野産 底部周辺ヘラケズリ D	
3	須恵器	坏	(12.0)	3.1	(7.6)	EHIK	30	普通	灰黄	木野産 口縁部内面に油芯痕跡(転用灯明皿) A	
4	須恵器	坏	(12.0)	3.1	(7.6)	EHIK	75	良好	灰白	底部回転率切り カマド	
5	土師器	小型碗	(6.2)	(4.6)		CHIK	30	不良	橙	合子身型 平底 カマド	17-7
6	土師器	坏	12.6	3.2		AEHIK	95	普通	橙	No2	
7	土師器	坏	(12.8)	(3.4)		ACHIK	30	普通	灰白	木野産 波状文 A	
8	土師器	坏	(12.6)	(3.7)		HIK	40	普通	橙	D	
9	土師器	坏	13.0	3.6		BCEIK	100	普通	橙	No4	17-8
10	土師器	坏	(14.0)	(2.9)		ACHIK	25	普通	橙	C	
11	須恵器	甕				EHIK		良好	灰	木野産 波状文 A	
12	土師器	甕	(21.0)	(6.3)		ACHIK	10	普通	灰白	C	
13	土師器	小型台付	9.5	11.9	8.4	CEHIK	90	普通	灰白	No1 C	17-8
14	土師器	小型台付	9.0	(11.7)		CHIK	60	普通	灰白	内外面は被熱による風化顕著 No3・A・一括	
15	陶器	甕	(2.8)	(14.0)		AEHIK	5	普通	灰白	在産 底部回転率切り 二次的被熱・赤色化 C	

状況が掘立柱建物跡とは異なる様相を示すことから、土壌と判明した。平面形態が隅丸長方形で、長軸長0.96m、短軸長0.77m、確認面からの深さ0.4mを測る。長軸方位はN-49°-Eを指す。

第43・44号土壌は、第4号掘立柱建物跡の柱穴もしくは束柱などの補助的な施設も仮定したが、配置の規則性や覆土の堆積状況が第4号掘立柱建物跡柱穴とは異なることから、いずれも土壌と判明した。覆土はIV-5で後述するAタイプで、

黒色土を主体にローム粒子・ブロックを含んだ暗褐色土・黒褐色土である。第43号土壌は平面楕円形、長軸長0.94m、短軸長0.82m、深さ0.82m、長軸方位N-66°-Wを測る。第44号土壌は平面隅丸方形、長軸長1.30m、短軸長1.02m、深さ0.90m、長軸方位はN-62°-Wである。

第9号住居跡 (第18・19図)

S-18・19グリッドに位置する。平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央から南寄りに付設す

る。しかし、カマドの南側は第7号掘立柱建物跡、カマドの北側は掘乱と第51・67号土壌と重複し、東壁は検出されていない。覆土は概ね削平され、床面に施された貼床が露出した状態で確認された。主軸長3.7～3.8m、南北幅3.72mを測り、主軸方位はN-117°-Eを指す。

カマドは第7号掘立柱建物跡と掘乱によって袖部はみられず、燃焼部のみが検出された。灰色粘土で構築されたカマドが、潰された状態で残存していた。長さ1.3m、幅0.57mの掘り込みをもち、床面からの深さも0.4mと深い。住居壁の外側に大きく張り出した形態と推定される。燃焼部奥壁手前から片岩を立てた支脚が発見され、基部は埋め込まれている。支脚の位置と奥行きは長い掘方のバランスから、複数の架け口が前後に並ぶカマドであった可能性が高い。

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝は、北壁と西壁の一部に付設されている。

北壁際から土鍾104点（第18・19図5～108）がまとまって出土し、刺し網の鍾の一括資料と捉えられる。また編み物石6点（第19図109～114）も北西隅から発見された。図示し得る遺物は少なく、8世紀後半～9世紀初頭頃と推定される。

第10・11号住居跡・第38号土壌（第20～23図）

重複する2軒の住居跡で、T・U-19・20グリッドに位置する。床面の検出状況や覆土の堆積状況などから、第10号住居跡が新しい。また、第10号住居跡は、第38号土壌と断面のみで確認された土壌と重複する。さらに、西壁が第2号溝跡によって掘乱されている。

第10号住居跡は平面形態が長方形で、カマドAを東壁中央付近、カマドBを北壁中央付近に付設

する。残存状態が良好なカマドAが住居廃絶まで使用されていたカマドと推定され、主軸を東西に向ける。主軸長5.06m、南北幅3.74m、確認面からの深さ0.35mを測り、主軸方位はN-90°-Eを指す。

カマドAは燃焼部が検出され、短い袖部が残存する。土層断面では先端に煙出し的な堆積がみられるが、住居壁との距離が短いことから、ここから外方に煙道部が延びていたものと推定される。燃焼部は長さ1.3m、幅0.56mで、底面は外方に向かって上がっていく。明確な火床面は検出されていない。カマドの状況から、住居壁付近に焚き口、壁外に架け口が位置する形態と推定される。

カマドBは住居構築当初のカマドで、カマドAに造り替えた段階に壊されている。燃焼部と煙道部の一部が残存していた。燃焼部は長さ0.83m、幅0.46mで、奥壁は傾斜をもって立ち上がる。上端から続く浅い煙道は、0.13mほど確認された。燃焼部の中心が住居壁内にあたることから架け口が住居内に位置する可能性は否めない。しかし、カマドの造り替えは住居の建て替えや拡張に伴う例が多く、カマドAと同様に壁外に架け口があったことが推定される。

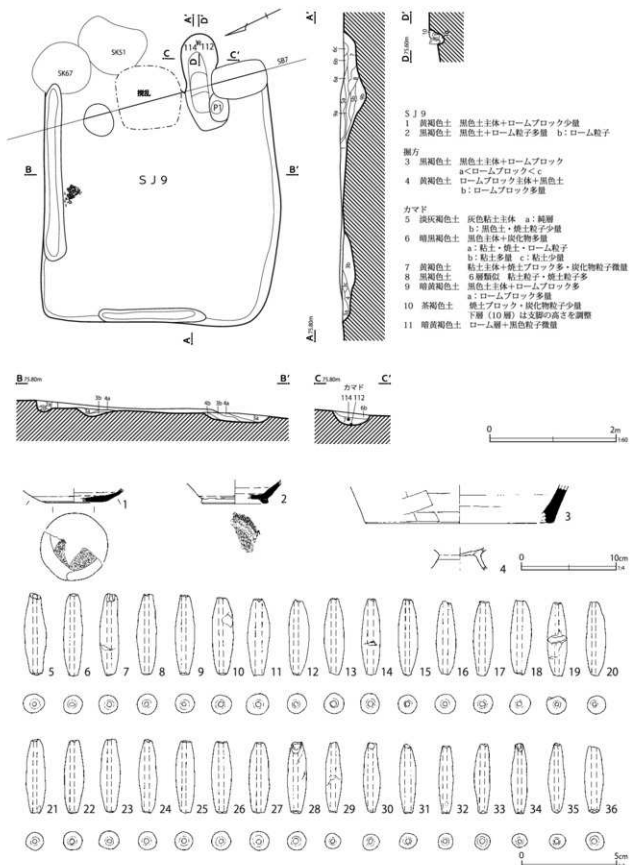
柱穴・貯蔵穴は検出されていない。壁溝は南壁の一部に沿って検出されたが、住居の壁に沿って幅広の溝状に巡る掘方の一部の可能性もある。

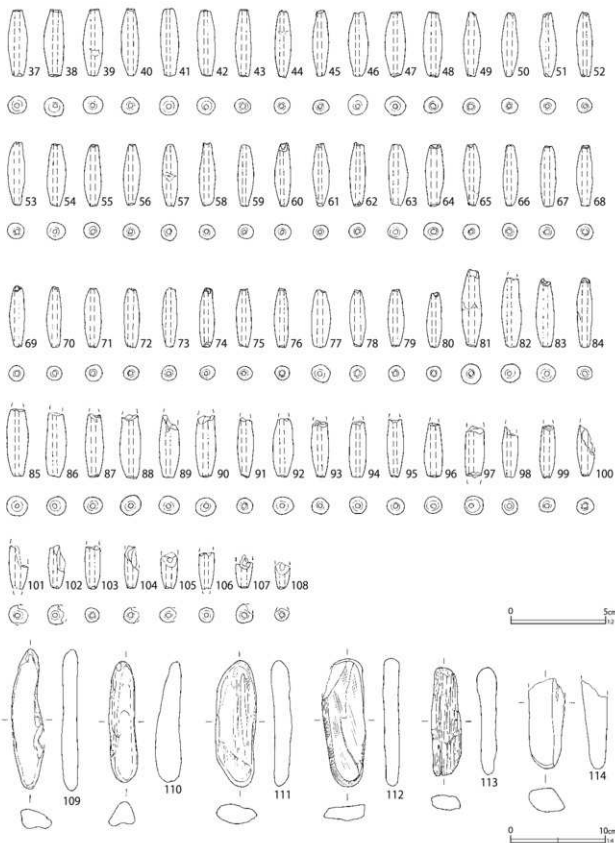
遺物は、末野産の底部回転糸切り籬しの須恵器坏を中心に、須恵器把手付甕・甕、土師器コの子甕等が出土し、9世紀第4四半期と推定される。

SK1・SK2・Pit1は貼床下から検出された。このうちSK1は掘方の一部であった可能性が高い。SK2・Pit1は用途不明である。

第8表 第9号住居跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	坏		(11.5)	(7.0)	EHK	40	普通	灰	末野産 底部周辺へハズリ内面に煤状の付着物 カマド	
2	須恵器	高台付甕		[2.5]	(7.1)	CDHK	20	良好	灰	末野産 貼付高台 底部回転糸切り C	
3	須恵器	甕		[4.1]	(20.0)	EIK	5	良好	灰	末野産 平底 底部へハズリ C	
4	土師器	台付甕		[2.5]		CEHK	70	普通	にじみ黒	B	

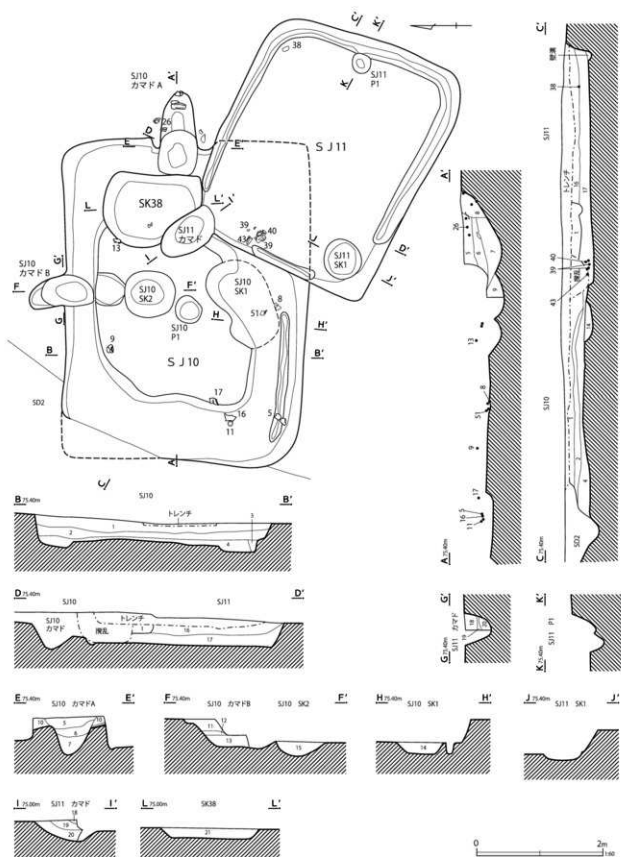




第19图 第9号住居跡出土遺物(2)

第9表 第9号住居跡土鍾・編物石観察表 (第18・19回・図版28・29-1)

番号	器種	長軸長	最大径	孔径	重さ	残存	色調	番号	器種	長軸長	最大径	孔径	重さ	残存	色調	
5	土鍾	4.3	1.1	0.2	4.6	100	橙	61	土鍾	3.3	0.8	0.2	2.0	100	褐	
6	土鍾	4.3	1.0	0.2	4.4	100	明赤褐	62	土鍾	3.3	0.8	0.2	1.8	100	褐	
7	土鍾	4.3	1.0	0.2	[4.3]	95	にぶい赤褐	63	土鍾	3.2	1.0	0.3	2.7	100	橙	
8	土鍾	4.2	1.0	0.2	4.5	100	黒褐	64	土鍾	3.2	0.9	0.3	2.8	100	明赤褐	
9	土鍾	4.2	1.0	0.2	4.4	100	にぶい褐	65	土鍾	3.2	0.9	0.2	2.4	100	赤褐	
10	土鍾	4.1	1.1	0.2	4.4	100	明褐	66	土鍾	3.2	0.8	0.3	2.3	100	にぶい褐	
11	土鍾	4.0	1.1	0.3	4.6	100	にぶい褐	67	土鍾	3.2	0.8	0.3	2.1	100	にぶい褐	
12	土鍾	4.0	1.0	0.3	4.7	100	褐灰	68	土鍾	3.2	0.8	0.3	2.1	100	にぶい赤褐	
13	土鍾	4.0	1.0	0.3	4.2	100	黒褐	69	土鍾	3.2	0.8	0.3	2.0	100	にぶい赤褐	
14	土鍾	4.0	1.0	0.3	4.1	100	にぶい褐	70	土鍾	3.2	0.8	0.3	1.8	100	にぶい赤褐	
15	土鍾	4.0	1.0	0.3	4.0	100	明褐	71	土鍾	3.1	0.8	0.3	2.3	100	にぶい褐	
16	土鍾	3.9	1.0	0.3	4.3	100	黒褐	72	土鍾	3.1	0.8	0.3	2.0	100	褐	
17	土鍾	3.9	1.0	0.3	4.1	100	明褐	73	土鍾	3.1	0.8	0.3	1.8	100	にぶい褐	
18	土鍾	3.9	1.0	0.2	4.5	100	橙	74	土鍾	3.1	0.8	0.2	1.8	100	にぶい褐	
19	土鍾	3.9	1.0	0.2	4.0	100	にぶい赤褐	75	土鍾	3.1	0.8	0.2	1.8	100	褐	
20	土鍾	3.9	1.0	0.2	3.9	100	橙	76	土鍾	3.1	0.7	0.2	1.6	100	にぶい赤褐	
21	土鍾	3.9	1.0	0.2	3.7	100	褐	77	土鍾	3.0	1.0	0.3	2.6	100	明赤褐	
22	土鍾	3.8	1.0	0.3	3.8	100	にぶい赤褐	78	土鍾	3.0	0.8	0.3	1.8	100	明赤褐	
23	土鍾	3.8	1.0	0.2	3.8	100	褐	79	土鍾	3.0	0.8	0.2	1.8	100	褐	
24	土鍾	3.8	0.9	0.3	3.4	100	黒褐	80	土鍾	2.9	0.8	0.2	1.5	100	褐	
25	土鍾	3.8	0.9	0.2	3.1	100	橙	81	土鍾	[4.1]	1.0	0.3	[4.3]	90	にぶい赤褐	
26	土鍾	3.7	1.0	0.3	4.0	100	黒褐	82	土鍾	[3.7]	1.0	0.2	[3.4]	90	にぶい赤褐	
27	土鍾	3.7	1.0	0.3	3.8	100	にぶい赤褐	83	土鍾	[3.6]	0.9	0.3	[3.3]	90	明赤褐	
28	土鍾	3.7	1.0	0.3	3.5	100	にぶい赤褐	84	土鍾	[3.6]	0.8	0.3	[2.1]	90	にぶい赤褐	
29	土鍾	3.7	0.8	0.3	2.5	100	にぶい褐	85	土鍾	[3.5]	1.1	0.2	[4.2]	90	橙	
30	土鍾	3.6	0.9	0.3	2.6	100	褐	86	土鍾	[3.4]	1.0	0.2	[3.5]	90	にぶい褐	
31	土鍾	3.6	0.9	0.3	2.5	100	にぶい赤褐	87	土鍾	[3.4]	0.9	0.2	[2.9]	90	にぶい赤褐	
32	土鍾	3.6	0.8	0.3	2.3	100	にぶい褐	88	土鍾	[3.3]	1.0	0.2	[3.7]	80	にぶい褐	
33	土鍾	3.6	0.8	0.3	2.3	100	にぶい褐	89	土鍾	[3.3]	1.0	0.2	[3.3]	80	にぶい赤褐	
34	土鍾	3.6	0.8	0.2	2.4	100	にぶい褐	90	土鍾	[3.2]	1.0	0.2	[3.9]	80	にぶい褐	
35	土鍾	3.6	0.8	0.2	2.4	100	にぶい赤褐	91	土鍾	[3.1]	0.8	0.2	[1.9]	90	にぶい褐	
36	土鍾	3.5	1.0	0.3	3.3	100	赤褐	92	土鍾	[3.0]	1.0	0.2	[3.1]	90	にぶい赤褐	
37	土鍾	3.5	1.0	0.3	3.2	100	にぶい橙	93	土鍾	[3.0]	0.9	0.2	[2.6]	80	にぶい褐	
38	土鍾	3.5	1.0	0.3	3.1	100	明褐	94	土鍾	[3.0]	0.9	0.2	[2.4]	90	にぶい赤褐	
39	土鍾	3.5	1.0	0.2	3.0	100	橙	95	土鍾	[3.0]	0.8	0.2	[2.1]	80	にぶい赤褐	
40	土鍾	3.5	0.9	0.3	2.3	100	にぶい赤褐	96	土鍾	[2.8]	0.9	0.3	[2.4]	90	明褐	
41	土鍾	3.5	0.9	0.2	3.3	100	にぶい赤褐	97	土鍾	[2.7]	1.0	0.2	[3.2]	70	明褐	
42	土鍾	3.5	0.9	0.2	3.1	100	にぶい赤褐	98	土鍾	[2.7]	0.9	0.3	[1.5]	70	にぶい褐	
43	土鍾	3.5	0.8	0.3	2.3	100	にぶい褐	99	土鍾	[2.7]	0.8	0.3	[1.8]	90	にぶい赤褐	
44	土鍾	3.5	0.8	0.2	2.4	100	にぶい褐	100	土鍾	[2.6]	[0.9]	0.3	[1.6]	60	黒褐	
45	土鍾	3.5	0.8	0.2	1.9	100	明褐	101	土鍾	[2.3]	[1.0]	0.3	[1.4]	40	黒褐	
46	土鍾	3.4	1.0	0.3	3.7	100	にぶい赤褐	102	土鍾	[2.3]	[0.8]	0.2	[1.6]	50	にぶい黄褐	
47	土鍾	3.4	1.0	0.2	3.3	100	明赤褐	103	土鍾	[2.2]	0.8	0.3	[1.4]	70	にぶい赤褐	
48	土鍾	3.4	0.9	0.3	2.7	100	にぶい褐	104	土鍾	[2.2]	[0.7]	0.3	[1.0]	40	にぶい赤褐	
49	土鍾	3.4	0.8	0.3	2.3	100	にぶい赤褐	105	土鍾	[1.9]	[0.8]	0.3	[1.0]	40	にぶい黄褐	
50	土鍾	3.4	0.8	0.3	2.0	100	赤褐	106	土鍾	[1.9]	0.8	0.2	[1.2]	50	にぶい赤褐	
51	土鍾	3.4	0.8	0.2	2.0	100	明褐	107	土鍾	[1.8]	[0.9]	0.3	[1.0]	30	黒褐	
52	土鍾	3.4	0.8	0.2	1.9	100	にぶい赤褐	108	土鍾	[1.5]	[0.7]	0.2	[0.5]	20	にぶい褐	
53	土鍾	3.3	0.9	0.3	2.3	100	にぶい褐									
54	土鍾	3.3	0.9	0.2	2.9	100	橙	番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材		
55	土鍾	3.3	0.9	0.2	2.3	100	にぶい褐	109	編物石	14.8	3.5	2.0	156.7		緑色岩	
56	土鍾	3.3	0.9	0.2	2.0	100	にぶい黄褐	110	編物石	12.8	3.1	2.5	140.6		緑色岩	
57	土鍾	3.3	0.9	0.2	[1.8]	95	にぶい赤褐	111	編物石	13.4	4.2	2.0	175.0		片岩	
58	土鍾	3.3	0.8	0.3	2.0	100	灰黄褐	112	編物石	13.5	4.3	1.5	164.9		片岩	
59	土鍾	3.3	0.8	0.2	2.1	100	にぶい褐	113	編物石	11.5	3.1	2.1	100.0		片岩	
60	土鍾	3.3	0.8	0.2	2.0	100	にぶい黄褐	114	編物石	[9.5]	3.7	2.4	[113.2]		片岩	



第20図 第10・11号住居跡・第38号土坑

S J 10

- 1 暗褐色土 自然増殖 ローム粒子・ブロックやや多
焼土粒子・炭化物粒子少量 白色粘土やや多
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 ローム少 白色粘土はみられない
- 3 硬質
- 4 暗黄褐色土+黒褐色土 粘床層 ロームブロック主体
- カマド A
- 5 灰褐色土 カマド天井部 粘土主体 焼土粒子少量
- 6 灰褐色土 カマド側壁土主体 粘土主体
ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量
- 7 黒褐色土 カマド燃焼部への侵入土 焼土多 明確な火床面はみられない
- 8 暗褐色土 粘土 焼土少量 埋出
- 9 黒褐色土 ロームブロック多 埋戻し
- 10 暗褐色土の粘土主体 ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子少量
- カマド B
- 11 灰褐色土 カマド天井部の残欠 粘土主体
- 12 赤褐色土 カマド天井部内壁の焼土層
- 13 黒褐色土 カマド内への流入土 ロームブロック多

S K 1

- 14 黒褐色土 床下土壌の埋戻し ロームブロック・暗褐色土ブロック多量
焼土粒子・炭化物粒子少量

S K 2

- 15 暗褐色土 床下土壌の埋戻し ロームブロック多量 炭化物少量

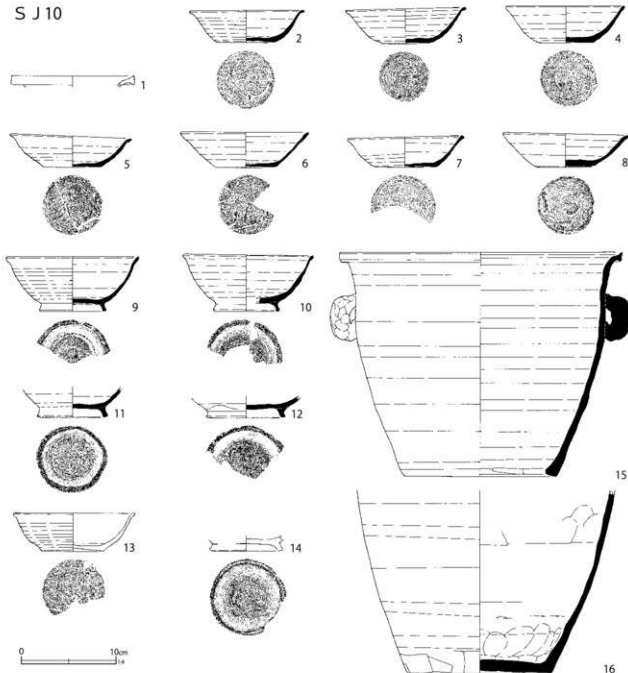
S J 11

- 16 暗褐色土 暗褐色土ブロック多量 ローム粒子・焼土粒子少量
(確認は難いが、埋戻しか)
- 17 黒褐色土 暗褐色土ブロック少量 焼土粒子やや多
- カマド
- 18 赤褐色土 カマド天井部内壁の残欠、焼土層
- 19 黒褐色土 カマド内への流入土 焼土粒子・ローム粒子少量
底面の焼土化がみられる
- 20 多量のロームブロックと黒色土の混合層 壁方の埋戻し

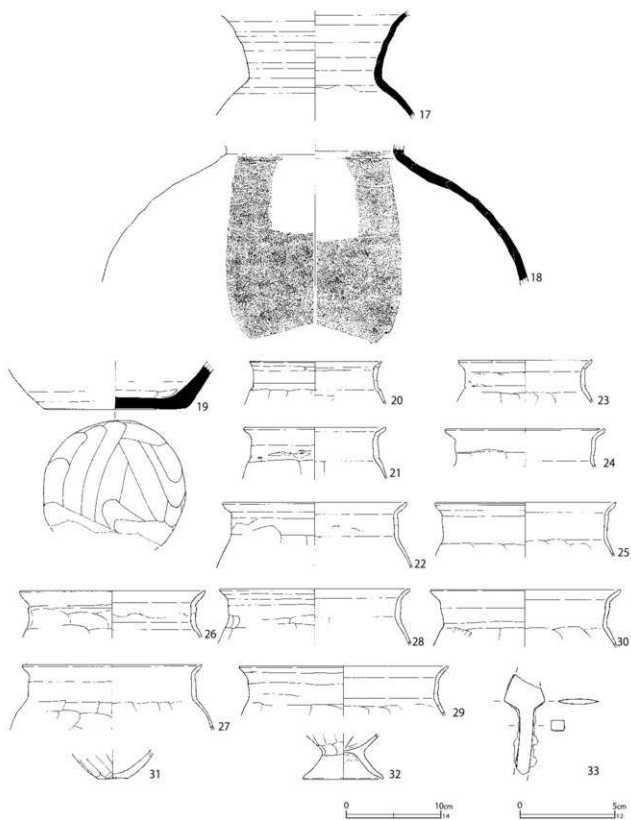
S K 38

- 21 暗褐色土 ロームブロック多量

S J 10

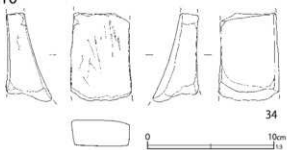


第21図 第10号住居跡出土遺物 (1)

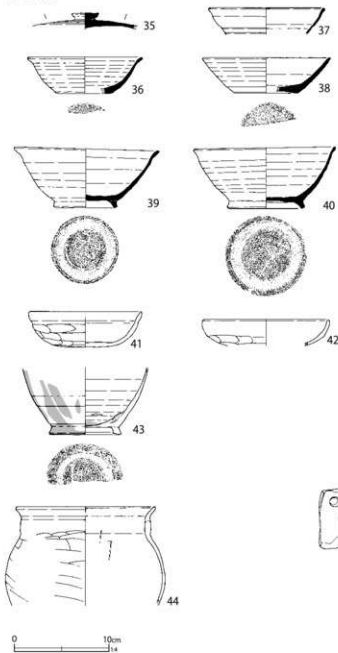


第22图 第10号住居跡出土遺物(2)

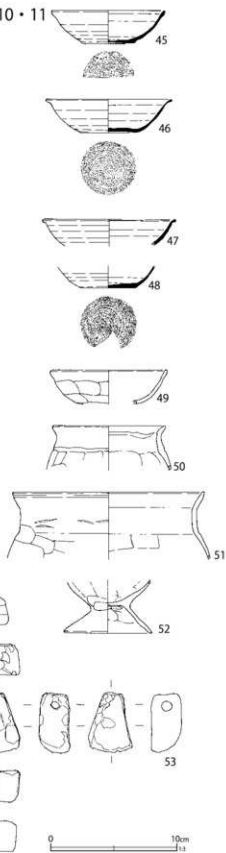
S J 10



S J 11



S J 10 · 11



第23图 第10·11号住居跡出土遺物

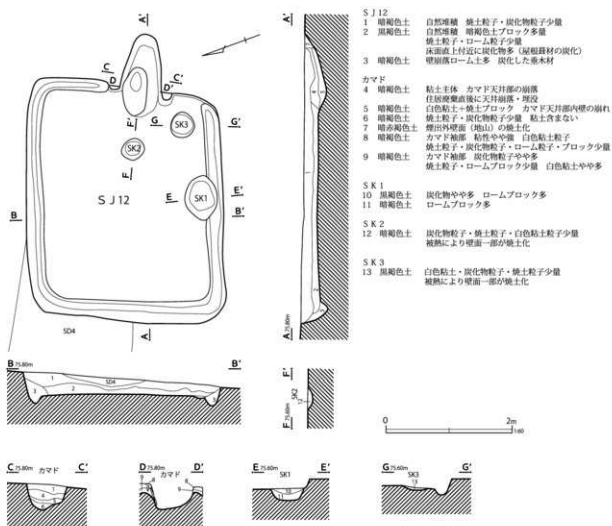
第10表 第10-11号住居跡出土遺物観察表 (第21～23頁)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰釉陶器	長頸瓶	(13.0)	[1.2]		IK	5	良好	灰白	SJ10 撤設区 内外面施釉 軸式オリブ D	
2	須恵器	環	11.8	3.4	6.0	EIK	80	良好	灰	SJ10 末野産 底部回転系切り SJ10B・SJ11C	17-9
3	須恵器	環	(12.6)	3.8	5.1	HIK	50	良好	灰白	SJ10 末野産 底部回転系切り C	
4	須恵器	環	(12.4)	3.9	5.8	CHIK	50	普通	浅黄橙	SJ10 末野産 底部回転系切り C・D	17-10
5	須恵器	環	12.6	3.3	6.3	AEIK	85	普通	灰	SJ10 末野産 底部回転系切り №4・C	17-11
6	須恵器	環	13.3	3.7	6.3	EHK	80	普通	灰白	SJ10 末野産 底部回転系切り D	17-12
7	須恵器	環	12.0	3.3	6.8	CDHIK	60	普通	灰	SJ10 末野産 周辺ヘラズリ B・C	
8	須恵器	環	12.9	3.5	6.0	EIKL	65	良好	灰	SJ10 末野産 底部回転系切り №9・B・C・SJ11C	17-13
9	須恵器	高台付埴	(13.8)	5.8	(7.0)	DEIK	25	普通	灰	SJ10 末野産 貼付高台 底部回転系切り №10・D	
10	須恵器	高台付埴	(13.7)	6.2	6.4	EIK	30	良好	灰	SJ10 末野産 貼付高台 底部回転系切り B・C	
11	須恵器	高台付埴		[3.2]	7.5	ADEIK	75	普通	灰白	SJ10 末野産 貼付高台 底部回転系切り №3・B	
12	須恵器	高台付埴		[2.2]	(8.4)	CEHIK	40	普通	灰黄	SJ10 末野産 貼付高台 底部回転系切り D	
13	ワタシ師	環	(12.7)	4.1	6.5	AEIK	55	普通	橙	SJ10 内面風化顕著 SJ10№11・SJ10A・SJ11D	17-14
14	ワタシ師	高台付埴		[1.7]	7.8	AIK	90	普通	橙	SJ10 貼付高台 底部回転系切り C	
15	須恵器	甕	(30.0)	23.7	(16.0)	EHK	20	良好	黄灰	SJ10 末野産 把手付 単孔・多孔不明 カマダ・D	17-15
16	須恵器	甕		[19.3]	15.2	DEHI	65	良好	灰	SJ10 末野産 貼付高台 底部回転系切り №4・C	18-1
17	須恵器	甕		[11.4]		EIK	20	良好	黒	SJ10 末野産 №1	
18	須恵器	甕		[14.9]		EHK	30	良好	褐灰	SJ10 末野産 カマダ・B・C	
19	須恵器	甕		[5.1]	15.0	DEIL	60	良好	灰	SJ10 末野産 底部ヘラズリ 外面タタキ後ナデ C・D	
20	土師器	小型甕	(14.0)	[4.5]		ACHIK	20	普通	にいが	SJ10 D	
21	土師器	小型甕	(14.8)	[5.6]		AHIK	20	普通	にいが	SJ10 SK2・D	
22	土師器	甕	(19.2)	[7.0]		ACHIK	40	普通	橙	SJ10 カマダ・SK2・SJ11A・D	
23	土師器	小型甕	(14.0)	[4.5]		CHIK	20	普通	にいが	SJ10 B・C	
24	土師器	甕	(16.7)	[4.1]		ACEHIK	20	普通	橙	SJ10 C	
25	土師器	甕	(19.0)	[5.7]		CHIK	25	普通	にいが	SJ10 C	
26	土師器	甕	(19.5)	[5.0]		CEHIK	35	普通	明赤褐	SJ10 カマダ・№5、カマダ A	
27	土師器	甕	(18.7)	[7.0]		CEHIK	20	普通	明赤褐	SJ10 カマダ A	
28	土師器	甕	(20.0)	[6.0]		CHIK	40	普通	にいが	SJ10 カマダ A	
29	土師器	甕	(22.0)	[5.3]		CHIK	25	普通	にいが	SJ10 カマダ A	
30	土師器	甕	(20.0)	[6.1]		AHIK	20	普通	にいが	SJ10 C	
31	土師器	甕	[3.1]			CEIK	40	普通	明赤褐	SJ10 覆付底 底部ヘラズリ カマダ №11	
32	土師器	台付甕	[4.8]	(8.4)		HIK	25	普通	にいが	SJ10 カマダ A	
35	須恵器	蓋		[1.7]		DEIK	70	普通	灰	SJ11 南北金産 つまみ径2.8cm 二次的被熱・黒色化 B	
36	須恵器	環	(12.0)	[3.9]	(5.8)	EIK	20	良好	灰	SJ11 末野産 底部回転系切り C	
37	須恵器	環	(12.0)	[2.8]		DEIK	20	普通	灰	SJ11 末野産 SJ10B・SJ11C	
38	須恵器	環	(13.2)	3.8	(6.6)	AEIK	35	良好	灰黄	SJ11 末野産 底部回転系切り 体部下端部ヘラズリ №7	18-2
39	須恵器	高台付埴	(14.9)	6.3	6.6	EIK	80	良好	灰黄	SJ11 末野産 貼付高台 底部回転系切り 二次的被熱顕著 表面風化顕著 №4・C	
40	須恵器	高台付埴	(14.8)	6.4	8.1	ADEIK	75	良好	灰黄	SJ11 末野産 貼付高台 底部回転系切り №2・C・D・SJ10B・SJ10A	18-3
41	土師器	環	(11.7)	3.7		ACDHIK	40	普通	橙	SJ11 C	
42	土師器	環	(13.0)	[2.8]		HIK	25	普通	にいが	SJ11 B	
43	灰釉陶器	長頸瓶	[7.1]	(7.4)		HIK	45	普通	灰	SJ11 東濃産 貼付高台 底部回転系切り №1・B・C	
44	土師器	甕	(14.3)	[10.5]		ACHIK	15	普通	褐	SJ11 C	
45	須恵器	環	(11.8)	[3.5]	(5.4)	EIK	30	普通	灰	SJ10/11 末野産 底部回転系切り SJ10A・SJ11D	
46	須恵器	環	13.0	3.5	5.8	DEHIK	70	普通	灰	SJ10/11 末野産 底部回転系切り SJ10A・SJ11C・SJ11D	18-4
47	須恵器	環	(14.0)	[2.8]		EIK	15	良好	灰黄	SJ10/11 末野産 SJ10A・SJ11C・SJ11D	
48	須恵器	環		[2.3]	5.6	EIK	70	普通	灰	SJ10/11 末野産 底部回転系切り SJ10A・SJ10A・SJ11D	
49	土師器	環	(12.0)	[3.6]		HIK	25	普通	にいが	SJ10/11 器面風化 SJ10A・SJ11D	
50	土師器	小型甕	(11.8)	[4.8]		CEHIK	25	普通	赤褐	SJ10/11 SJ10A・SJ11D	
51	土師器	甕	(20.0)	[7.2]		AEHIK	25	普通	明赤褐	SJ10/11 SJ10№6・SJ10A・SJ11D	
52	土師器	台付甕		[5.6]	(9.2)	EIK	40	普通	橙	SJ10/11 SJ10A・SJ11D・SK38	

第22図33は長頸平造長三角式鉄鍬である。鍬身部は平刃で、逆刺はない。鍬被部の断面形は長方形で、厚い。残存する鍬身長5.35cm・身幅2.1cm・厚さ0.25cm・頸長3.4cm・残存重11.1gである(図

版27)。

第23図34は砥石で、両端を欠損する。残存する長さ7.0cm・幅4.6cm・最大厚3.6cm・重さ120.77g、石材は凝灰岩である(図版29-3)。



第24図 第12号住居跡

第11号住居跡は平面形態が長方形である。カマドは北西隅から残欠が確認された。東西長3.9m、南北長3.28m、確認面からの深さ0.45mを測る。長軸方位はN-117°-Eを指す。第10号住居跡と重複し、暗褐色土ブロックを多量に含む覆土から、埋め戻された可能性が高い。

カマドは燃焼部底部付近が残存していた。北西隅に住居の対角線方向に設置されている。底面付近で天井部の一部が確認されていることから、破壊されていると判断した。底面には被熱による焼土化が認められる。長さ1.0m、幅0.56m、床面からの深さ0.35mである。

柱穴は確認されていない。壁溝はカマドの付設

された北西隅と南西隅を除いた北壁～東壁～南壁及び西壁中央付近に沿って巡る。東壁中央際のPit 1は、出入り口施設に伴う可能性がある。南西隅のSK1は床下土壌で、貯蔵穴とは異なる。

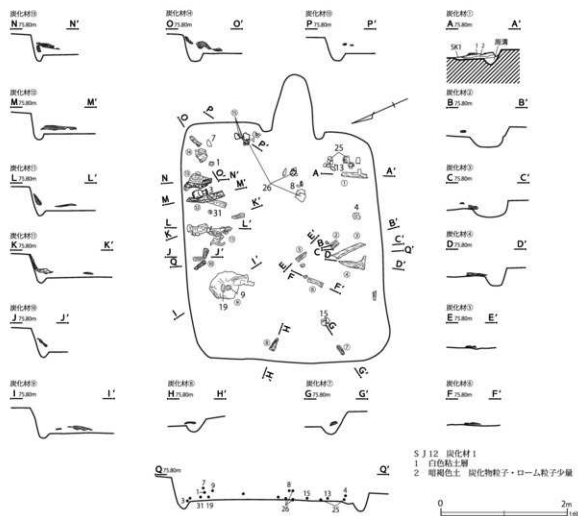
出土遺物は9世紀第3四半期頃と推定される。

第23図53は砥石で、上端側面を貫通する孔が穿たれている。長さ4.4cm・幅3.5cm・厚さ2.4cm・孔径0.6～0.8cm・重さ42.0g、石材は凝灰岩である（図版29-3）。

第12号住居跡（第24～27図）

T-20グリッドに位置し、重複する第4号溝跡によって上層部が攪乱される。

平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央付近



第25図 第12号住居跡炭化材・遺物出土状況

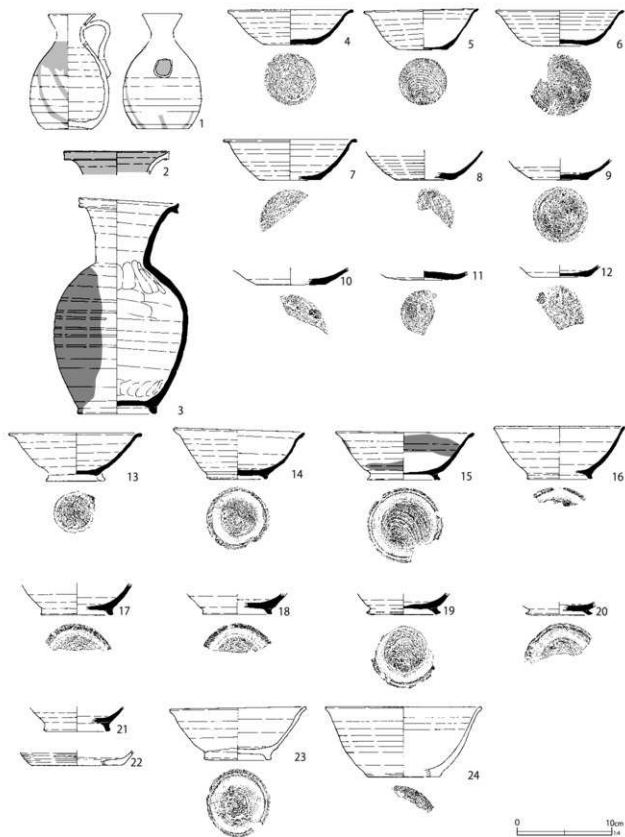
に付設する。主軸長3.72m、幅3.1m、確認面からの深さ0.35mを測り、主軸方位はN-111°-Eを指す。

壁際から炭化した径10cmに満たない丸太材が検出された。壁の辺に沿って直交するように、コーナー付近では住居の対角線に沿った方向に長尺を揃え、等間隔に並んでいた。また、これらの炭化材は壁や床に打ち込まれた痕跡がなかったことから、住居の焼失に伴って落下した屋根の垂木と推定される。樹種はすべてクリと同定され、垂木材としてクリが選別されていたことがわかる。

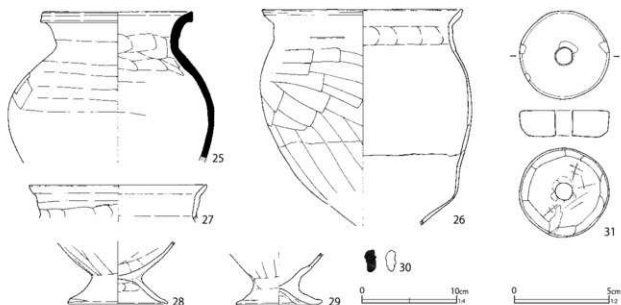
カマドは左袖の内面に骨組み材として片岩を使用し、粘土を用いて構築されている。覆土の堆積状況は、天井部の粘土層と底面との間の堆積層が

薄く住居廃絶直後に天井部が崩落した状況が観察できるため、壊された可能性が高い。底面に顕著な焼土化はみられず、火床面は不明瞭である。奥壁は斜めに立ち上がり、焼土化が顕著である。長さ1.32m、幅0.62mである。

柱穴は確認されていない。付属する土壌が3基検出されている。南壁中央壁際のSK 1は用途が不明である。東西0.7m、南北0.5m、床面からの深さ0.14mを測る。カマド前面に位置するSK 2は壁面の一部に焼土化がみられ、カマドの影響を受けたものと推定される。東西0.34m、南北0.34m、床面からの深さ0.08mである。カマド右側の南東隅のSK 3は貯蔵穴の可能性があるが、床面からの深さが0.04mと極めて浅く、貯蔵穴と断定する



第26图 第12号住居跡出土遺物（1）



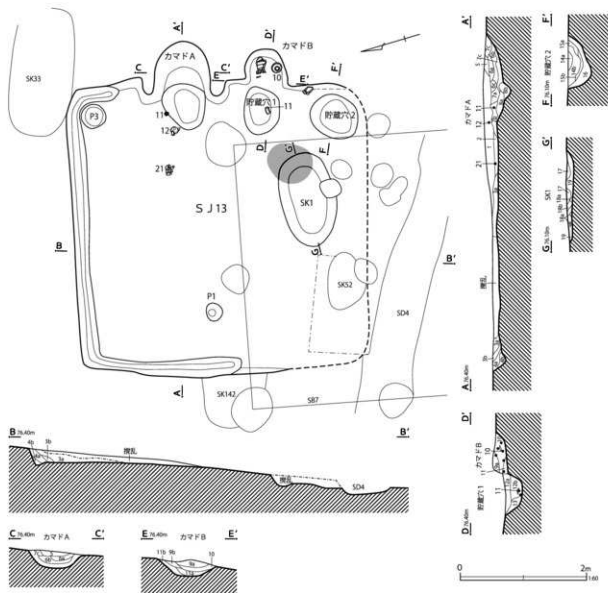
第27図 第12号住居跡出土遺物（2）

第11表 第12号住居跡出土遺物観察表（第26・27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰釉陶器	手付小瓶	(4.8)	[12.2]	5.0	IK	50	良好	灰	猿投産 底部糸切離し 把手欠損 №15・D	18・6
2	灰釉陶器	長頸瓶	(11.0)	[2.5]		HIK	10	良好	灰白	猿投産 内外全面施釉 C	
3	須恵器	長頸瓶	10.4	22.7	8.3	DEHI	90	普通	灰	未野産 貼付高台 底部ナデ №17	18・7
4	須恵器	瓶	(12.8)	3.7	5.4	EIK	55	良好	灰	未野産 底部回転糸切り №4	18・5
5	須恵器	瓶	11.8	4.2	5.0	EHK	70	普通	灰黄	未野産 底部回転糸切り カマド・A・A	18・8
6	須恵器	瓶	(13.4)	3.8	5.8	EHK	40	良好	灰黄	未野産 底部回転糸切り №14	18・9
7	須恵器	瓶	(13.6)	4.3	(6.5)	EIK	30	良好	灰	未野産 底部回転糸切り №14	
8	須恵器	瓶		[3.1]	(6.0)	DEHI	25	普通	灰	未野産 底部回転糸切り №9	
9	須恵器	高台付埴		[2.3]	6.0	CEIK	70	良好	灰白	未野産 貼付高台（剥離） 底部回転糸切り №6	
10	須恵器	瓶		[1.8]	(7.4)	AEIK	20	不良	灰黄	未野産 底部回転糸切り 底面に粘土付着 カマド	
11	須恵器	瓶		[0.9]	(5.0)	EIK	30	普通	灰	未野産 底部回転糸切り A	
12	須恵器	瓶		[1.2]	(5.6)	EHK	30	不良	灰黄	未野産 一部酸化焙 底部回転糸切り カマド	
13	須恵器	高台付埴	13.8	[5.1]	(6.2)	EIK	60	良好	灰	未野産 貼付高台（剥離） 底部回転糸切り №2	18・10
14	須恵器	高台付埴	13.6	5.3	6.4	DIK	60	良好	灰	未野産 貼付高台 底部回転糸切り カマド・A・B	18・11
15	須恵器	高台付埴	14.3	5.1	7.6	EHI	80	普通	灰	未野産 貼付高台 底部回転糸切り 内外面に黒斑 №5	19・1
16	須恵器	高台付埴	(13.8)	[5.6]	(7.0)	EIK	40	良好	暗灰黄	未野産 貼付高台 C	
17	須恵器	高台付埴		[3.4]	(7.8)	EIK	30	良好	灰黄	未野産 底部回転糸切り 貼付高台 D	
18	須恵器	高台付埴		[2.2]	(7.2)	EHK	40	不良	灰黄褐	未野産 酸化焙 貼付高台 底部回転糸切り A	
19	須恵器	高台付埴		[2.2]	(7.8)	EIK	80	良好	灰	未野産 貼付高台 底部回転糸切り №7	
20	須恵器	高台付埴		[1.4]	(7.2)	EIK	30	良好	灰	未野産 貼付高台 底部回転糸切り A	
21	須恵器	高台付埴		[2.6]	(7.0)	EHK	20	普通	灰黄	未野産 貼付高台 D	
22	土師器	瓶		[1.6]	(9.4)	EHK	10	普通	橙	底部手持ちヘラズリ A	
23	土師器	高台付埴	14.1	5.6	7.0	AEHK	95	良好	に似る黄褐色	貼付高台 底部回転糸切り 内面一部剥離 B	18・12
24	土師器	瓶	(16.0)	7.4	(7.6)	EIK	25	良好	に似る黄褐色	底部回転糸切り 内面一部剥離 カマド・B	19・2
25	須恵器	壺	15.6	16.0		EHK	70	普通	黒褐	未野産 №1・3・A	19・3
26	土師器	甕	(21.0)	[23.0]		CHIK	65	不良	灰	釜み大 胴部下半の一部が外方へ突出 №8・11・13・カマド・A・D	19・4
27	土師器	甕	(18.5)	[4.0]		CEIK	50	普通	橙	C	
28	土師器	台付甕		[6.6]	10.3	HIK	55	普通	に似る黄褐色	カマド・D	
29	土師器	台付甕		[5.5]	(9.0)	EHK	50	普通	明赤褐	A	

ことは難しい。東西0.4m、南北0.38mの規模である。壁溝は、南壁～西壁～北壁～東壁北半のカマドを避けた位置に巡る。

遺物は壁際の炭化した垂木材とともに出土し、屋根が焼け落ちて、そのまま埋没したと捉えられる。猿投産灰釉陶器の手付小瓶（第26図1）と



S J 13

- 1 暗黒褐色土 黒色土主体 粘土・焼土・炭化物粒子微量
 - 2 黒褐色土 1層砂 焼土・炭化物粒子を含まない b: 黒色土 > c
 - 3 明黒褐色土 炭化した粘土粒子・炭化物粒子を含まない b: ローム粒子多量
 - 4 黒褐色土 黒色土主体+ローム粒子 b: ローム粒子主体+黒色土微量
- カマダ A
- 5 暗黒褐色土 粘土+焼土粒子・炭化物粒子少量
 - 6 暗赤褐色土 焼土ブロック多量+黒色土 しまり面 b > 黒色土 > c
 - 7 赤褐色土 焼土主体+ローム粒子・炭化物粒子 c: 焼土層+粘土粒子微量
 - 8 明黒褐色土 炭化ローム主体+黒色土微量 b: 黒色土多

カマダ B

- 9 暗黒褐色土 ロームブロック・粘土粒子・炭化物粒子微量 b: 焼土粒子
- 10 赤褐色土 多量の焼土小ブロックで構成
- 11 黒褐色土 炭化ローム土・黒色土・炭化物・焼土粒子

貯蔵穴 1

- 12 暗黒褐色土 黒色土・ローム粒子微量 b: ローム粒子量少
- 13 黒褐色土 基本的に 12 層に同じ ローム粒子多量

貯蔵穴 2

- 14 茶褐色土 明黒色土+粘土粒子多量・炭化物・焼土粒子少量
- 15 暗赤褐色土 b: 粘土量少
- 16 暗黄褐色土 焼土ブロック・粘土多量 b: 焼土粒子のみ
- 17 暗黄褐色土 黒色土+人粒のロームブロック多量

SK 1

- 17 赤褐色土 茶褐色土・焼土ブロック・ローム粒子多量
- 18 灰褐色土 粘土層 b: 褐色土混
- 19 茶褐色土 ロームブロック多量 焼土粒子少量

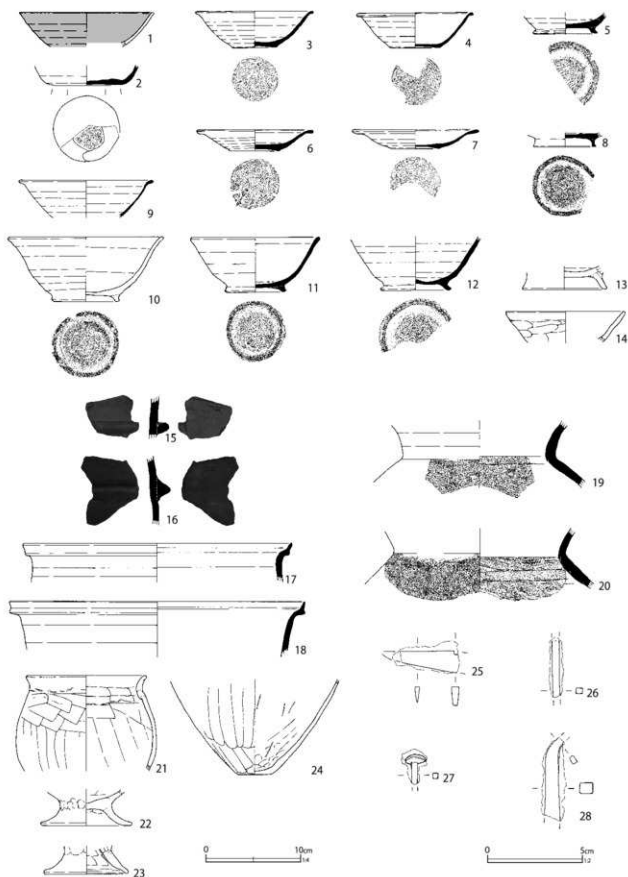
第28図 第13号住居跡

末野産須恵器の長頸瓶（3）が特筆される。また、著しく歪んだ土師器甕（第27図26）は、生産地ゆえに使用されていた製品と考えられる。そのため、遺構としては確認されていないが、集落内に土師器焼成坑が存在していた可能性が極めて高い。

9世紀第4四半期頃と推定される。

第27図30は鉄塊系遺物である。長さ2.2cm・幅1.1cm・厚さ1.0cm・重さ3.3g、磁着する（A）。

31は土製紡錘車である。側面は、ヘラケズリによる面取りが行われている。土径4.7cm・下径3.6



第29图 第13号住居跡出土遺物

第12表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰桶	甕	(14.0)	[3.7]		HI	10	良好	灰黄	猿投産 内外面全面施釉 A・土層	19-5
2	須恵器	坏		[2.1]	(7.0)	EIK	25	不良	灰	本野産 底部周辺ヘラケズリ A	
3	須恵器	坏	(12.4)	3.9	(4.8)	EIK	40	良好	灰	本野産 底部回転糸切り カマド・D	
4	須恵器	坏	12.0	3.7	5.2	EIK	50	普通	灰	本野産 底部回転糸切り カマド・A・D	
5	須恵器	高台付甕		[2.2]	(6.8)	EIK	50	良好	灰	本野産 貼付高台 底部回転糸切り	
6	須恵器	皿	11.7	2.2	5.2	DEIK	85	良好	灰	本野産 底部回転糸切り C・D	19-6
7	須恵器	皿	(13.0)	2.0	5.2	EHIK	40	普通	灰	本野産 底部回転糸切り B	
8	須恵器	高台付甕		[1.5]	6.5	ELJK	90	良好	灰	南北全産 貼付高台 底部回転糸切り D	
9	須恵器	坏	(14.0)	[4.0]		EHIK	20	普通	灰	本野産 A・D	
10	須恵器	甕	16.0	6.8	7.0	EHIK	100	普通	灰	貼付高台 底部回転糸切り 二次的被熱痕 №5	
11	須恵器	高台付甕	13.2	5.8	6.4	DEIK	30	良好	灰	本野産 貼付高台 底部回転糸切り 器面発痕 №3-10	19-7 19-8
12	須恵器	高台付甕		[5.6]	(7.2)	EI	20	良好	灰	本野産 貼付高台 内面に重ね焼きの痕跡 住居内土層№2	
13	土師器	高台付甕		[2.5]	(8.8)	AHIK	75	普通	浅黄橙	貼付高台 底部回転ヘラ切り 内面黒色 A	
14	土師器	坏	(12.3)	[3.3]		ACIK	20	普通	赤褐	貯蔵穴	
15	須恵器	甕				DEHIK		普通	灰黄	本野産 貼付凸帯 カマドA	
16	須恵器	甕				EIK		普通	黄灰	本野産 貼付凸帯 D	19-7 19-8
17	須恵器	甕	(28.0)	[4.2]		DEHI	10	普通	灰	本野産 D	
18	須恵器	甕	(31.0)	[5.9]		EIK	5	普通	灰黄	本野産 壁に比べ器壁が薄い D	
19	須恵器	甕		[7.1]		EHIK	10	普通	灰	本野産 内面斜部当て具痕か？ D	
20	須恵器	甕		[6.4]		EIK	5	良好	灰白	本野産 内面斜部に当て具痕 D	
21	土師器	小型甕	(12.3)	[10.1]		AHIK	25	普通	灰白	本野産 カマドA・A	19-7 19-8
22	土師器	台付甕		[3.9]	(9.3)	HIK	50	普通	灰白	本野産 カマドA・A	
23	土師器	台付甕		[3.0]	8.6	CIK	70	普通	灰白	本野産 カマド	
24	土師器	甕		[10.1]	(3.8)	HIK	20	普通	橙	器面風化 カマド・A	

cm・高さ1.4cm・孔径0.9～1.0cm・重さ41.4g、色調は灰白色を呈している (№18/図版29-4)。

第13号住居跡 (第28・29図)

R・S-19グリッドに位置し、第7号掘立柱建物跡、第33・52・142号土層、第4号溝跡と重複する。

平面形態は方形で、カマドを東壁に2基付設する。斜面下方の南半は削平され、南壁を消失している。主軸長4.10m、南北推定幅4.62m、確認面からの深さ0.2mを測り、主軸方位N-106° - Eを指す。柱穴は確認されていない。

東壁北寄りのカマドAは短い袖を残すが、燃焼部の大半が壁外に張り出す。長さ1.35m、幅0.78mを測る。東壁南寄りのカマドBは袖部がなく、壁外に張り出した燃焼部が検出された。長さ0.60m、幅0.67mを測る。貯蔵穴が2基発見された。いずれもカマドの右側に位置し、カマドAと貯蔵穴1、カマドBと貯蔵穴2が対応関係にある。貯蔵穴1は東西0.75m、南北0.55m、床面からの深さ0.26mである。貯蔵穴2は東西0.70m、南北

0.75m、床面からの深さ0.35mである。カマドBと貯蔵穴1の新旧関係から、カマドB・貯蔵穴2が住居構築当初のもの、カマドA・貯蔵穴1が住居の拡張に伴って造り替えられたことが推定される。カマド前面に焼土面が検出され、下面から東西1.50m、南北0.91m、床面からの深さ0.1mのSK1が確認された。用途は不明である。

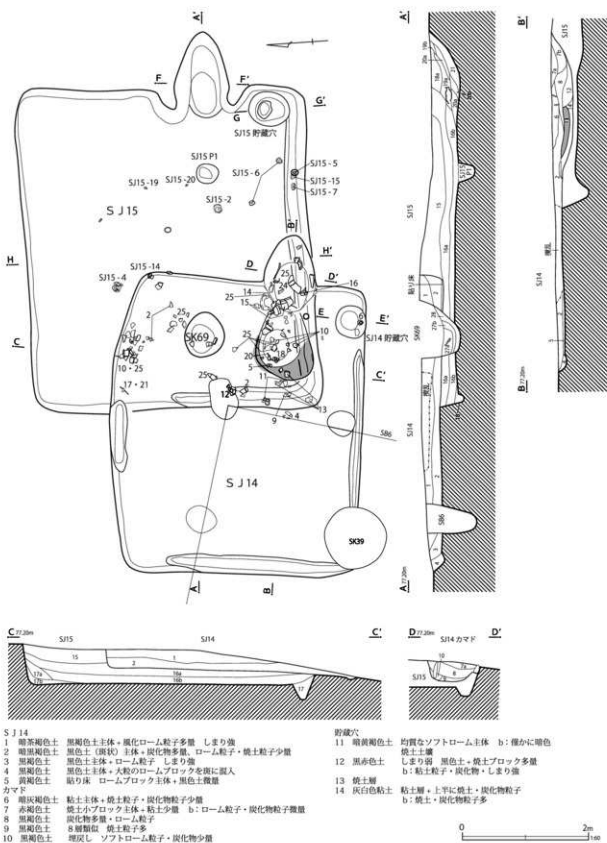
壁溝は西壁北半から北壁に巡っている。ピットは2基確認された。

出土した遺物は、9世紀末～10世紀初頭頃に推定される。

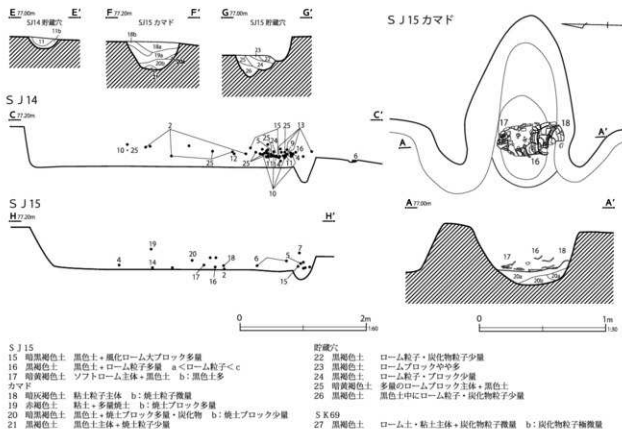
第29図25は鉄製の刀子である。刃部の先端と、茎部の大半を欠損する。残存する長さ4.1cm・刃幅0.8cm・背幅0.25cm・重さ4.1gである (カマドA/図版27)。

26は棒状鉄製品である。両端を欠損し、断面形は方形である。残存する長さ3.0cm・幅0.35cm・厚さ0.3cm・残存重1.79g、大きさ・形状から鉄釘の可能性が高い (D/図版27)。

27は鉄製釘である。頭部付近の破片で、頭部は



第30図 第14・15号住居跡（1）・第69号土壇



第31図 第14・15号住居跡 (2)

半球状を呈している。身部は断面形が方形を呈している。残存する長さ1.7cm・幅0.3cm・厚さ0.3cm・重さ2.1gである (図版27)。

28は不明棒状鉄製品である。断面形は方形で、上端部は細くなり湾曲する。残存する長さ4.4cm・幅0.7cm・厚さ0.6cm・残存重6.7gである (C / 図版27)。

第14・15号住居跡・第69号土壇 (第30～34図)

R-19・20グリッドに位置する。新旧関係は第15号住居跡→第14号住居跡→第69号土壇の順に新しい。また、第6号掘立柱建物跡・第39号土壇とも重複する。

第14号住居跡は、第15号住居跡を埋め戻した後に構築されている。平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長4.70m、幅3.95m、確認面からの深さ0.3mを測り、主軸方位はN-94°-Eを指す。床面には貼床が施されている。柱穴

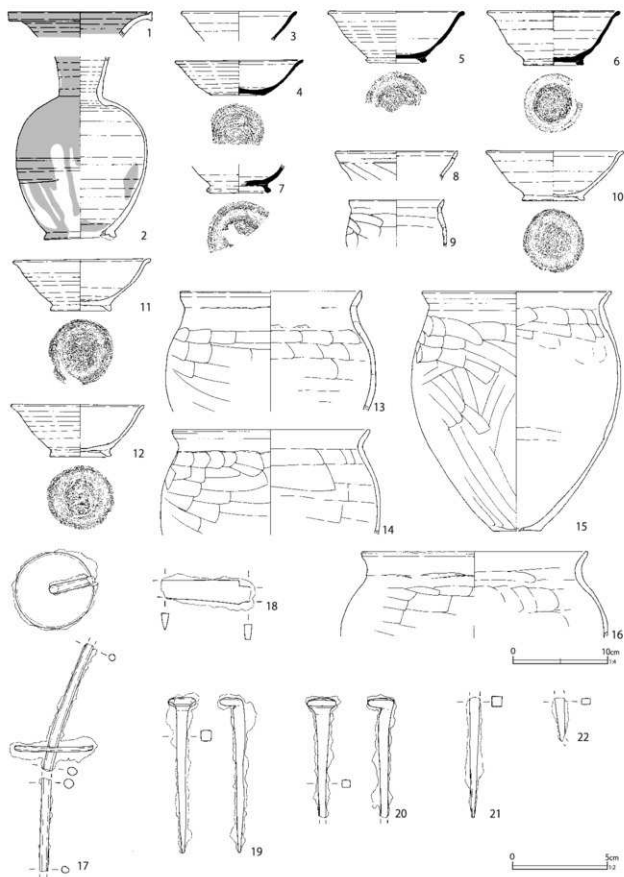
は確認されていない。

カマドは東壁の中央からやや南寄りに位置する。燃焼部の三分の二が壁外に張り出し、袖部・煙道部は検出されていない。粘土によって構築され、骨組みとして住居壁付近の左右壁面に扁平な鏝が設置されている。天井部 (第6層) が崩落した状態でみつがっている。長さ1.2m、幅0.82mで、架け口が壁外に位置すると推定される。

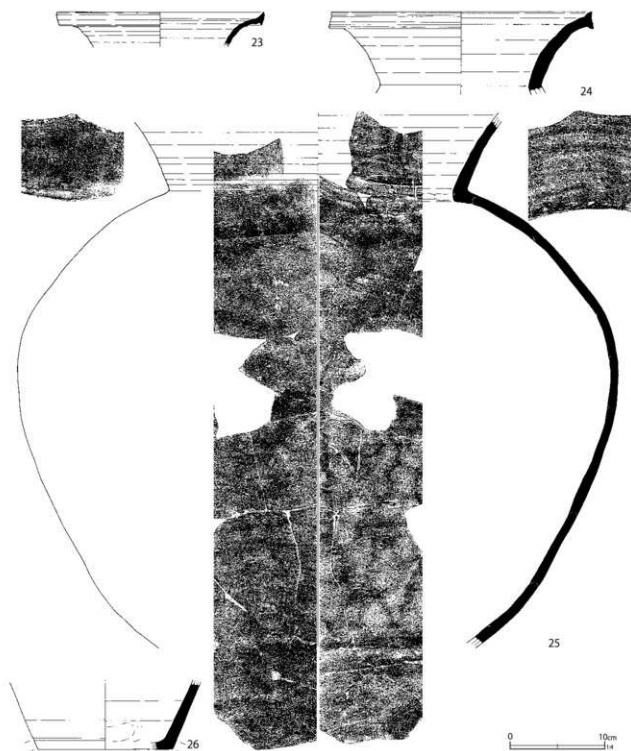
貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に付設される。東西0.50m、南北0.48m、床面からの深さ0.17mであり、須恵器高台付罐が出土している。壁溝は、南壁・西壁と北壁の中央付近に巡る。

遺物は遠江産・猿投産の灰釉陶器長頸瓶、コの字形態が崩れた土師器甕、末野産須恵器の大甕が出土している。9世紀末～10世紀初頭頃と推定される。

第32図17は北壁中央付近の壁際から発見された



第32图 第14号住居跡出土遺物(1)



第33図 第14号住居跡出土遺物（2）

鉄製紡錘車である。紡軸は両端が欠損し、紡輪より上部は湾曲している。紡輪は径4.2×4.1cm・厚さ0.3cm、紡軸は断面円形で、残存長11.8cm・最大径0.5cm、残存重26.5gである（No 1・1／図版

27）。

18は鉄製刀子である。刃部の先端と茎部の大半を欠損する。刃部と茎部の接続部には上下ともに段をもつ。刃部は平刃、茎部は断面形が長頸であ

第13表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第32・33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰釉陶器	長頸瓶	(15.0)	[2.7]		EIK	10	普通	灰白	遠江産 D	
2	灰釉陶器	長頸瓶		[19.2]	7.5	HIK	65	普通	灰白	嶺投産 №52・54・47・カマド・D	19-9
3	須恵器	坏	(12.0)	[3.2]		DEHIK	30	普通	灰	木野産 貯蔵穴・A	
4	須恵器	坏	(13.3)	3.7	5.8	EHIK	40	普通	灰	木野産 底部回転糸切り 内面に重ね焼きの痕跡 №35	
5	須恵器	高台付埴	(14.2)	5.4	(6.4)	DEI	30	良好	黒	木野産 貼付高台 底部回転糸切り №45・B・C	
6	須恵器	高台付埴	(13.8)	5.8	6.4	EHIK	60	不良	にぶい黄	木野産 貼付高台 底部回転糸切り №4・貯蔵穴1	19-10
7	須恵器	高台付埴		[3.0]	(6.8)	LIK	35	良好	灰	南北金産 貼付高台 底部回転糸切り C	
8	土師器	埴	(12.6)	[3.1]		HIK	30	普通	にぶい黄	B・C	
9	土師器	小型甕	(9.8)	[5.0]		ACHIK	25	普通	明褐	№38・C	
10	ワカ土師器	高台付埴	14.1	5.3	6.6	CEHIK	80	良好	にぶい黄	貼付高台 底部回転糸切り №20・23・29・30・33・カマド	20-1
11	ワカ土師器	高台付埴	14.3	5.5	6.6	EHIK	60	普通	黒褐	貼付高台 底部回転糸切り 黒色煤状の付着物 №40・46・B	20-2
12	ワカ土師器	高台付埴	13.8	5.6	6.6	BEHIK	70	普通	明赤褐	貼付高台 底部回転糸切り 内面に重ね焼きの痕跡 底部に粘土層付 №48・C	19-11
13	土師器	甕	(19.0)	[12.7]		CHIK	40	普通	橙	№34・39・41・42・A・B・C	
14	土師器	甕	(20.8)	[11.3]		ACHIK	25	普通	橙	№9・カマド	
15	土師器	甕	(19.8)	25.3	(5.0)	CHIK	20	普通	明赤褐	№9・14・カマド	
16	土師器	甕	(23.8)	[9.1]		ACEHI	20	普通	にぶい黄	№7・カマド	
23	須恵器	甕	(21.7)	[3.7]		DIK	5	良好	灰	木野産 B	
24	須恵器	甕	(27.4)	[8.9]		EHIK	10	普通	灰	木野産 内面自然釉付着 №8	
25	須恵器	甕		[56.7]		BDEIK	50	良好	灰	木野産 口縁部破損面二次加工 №33他・SK69・D	20-3
26	須恵器	甕		[7.4]	(14.0)	EHI	10	普通	灰	木野産 平底ヘラクスリ カマド	

る。残存する長さ4.2cm・刃幅0.9cm・背幅0.4cm・残存重9.3gである (№3・図版27)。

19・20は酷似する鉄製の釘である。工具で打撃が加えられる頭部は屈曲する。断面は方形を呈し、頭部から先端に向かって尖る。19は長さ8.15cm・幅0.55cm・厚さ0.55cm・残存重9.7gである (D／図版27)。20は先端部を欠損する。残存長6.3cm・幅0.45cm・厚さ0.4cm・残存重9.1gである (№2／図版27)。

21は、鉄製紡錘車 (17) の棒軸先端と想定して一括して取り上げた。しかし、断面形が方形を呈し、先端に向かって尖ることから、鉄製釘である。残存する長さ6.4cm・幅0.5cm・厚さ0.5cm・残存重5.0gである (№1・2／図版27)。

22は棒状鉄製品である。両端を欠損し、下端は屈曲する可能性がある。断面形は長方形で、上端から下端にかけて細くなる。残存する長さ2.3cm・幅0.5cm・厚さ0.3cm・重さ1.5gである (図版27)。

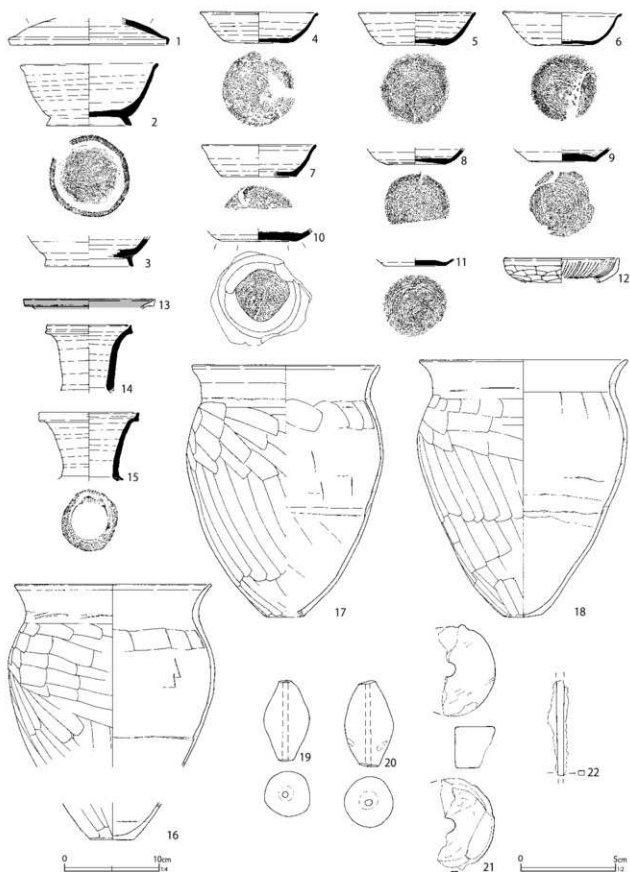
第14号住居跡の床面下から、底面に粘土を貼り付け、被熱による焼土化が顕著な焼土土塊が発見されている。第14号住居跡のカマド前面に位置し、カマドとほぼ同規模の土塊のため、第14号住居跡

の住居構築当初のカマドの名残と想定することも可能である。しかし、第14号住居跡には拡張を裏づける痕跡はみられない。東西1.28m、南北0.92m、第14号住居跡床面からの深さ0.16mである。

第15号住居跡は第14号住居跡に先行し、覆土には地山に由来するロームブロック・粒子を多量に含むことから、埋め戻されている。平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長5.15m、幅4.50m、確認面からの深さ0.53mを測り、主軸方位はN-93°-Eを指す。主柱穴は確認されていない。

カマドは、地山掘り残しの短い袖を芯に粘土によって構築されている。燃焼部は大半が住居壁の外側に張り出す。3個体が重ねるように差し渡された土師器甕は、カマドの骨組みに再利用されている。燃焼部に堆積した焼土・炭化物の直上に天井部が崩落し、住居廃絶時にカマドを壊したものと推定される。長さ1.36m、幅0.85mである。架け口の痕跡は確認されていないが、差し渡された転用甕の外側であった可能性が高い。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に付設されている。東西0.55m、南北0.65m、床面からの深さ



第34图 第15号住居跡出土遺物

第14表 第15号住居跡出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須臾器	蓋	(16.5)	[2.9]		IJK	15	良好	灰	南北金産 D	
2	須臾器	高台付埴	14.2	6.5	9.0	ACEHIK	90	良好	灰黄	末野産 酸化塩 貼付高台 底部回転糸切り №5・A	20-4
3	須臾器	高台付埴		[3.3]	(9.2)	EIK	15	良好	灰白	末野産 貼付高台 底部回転ヘラナデ D	
4	須臾器	環	12.3	3.3	6.5	EHK	90	良好	灰	末野産 底部回転糸切り №1・D	20-5
5	須臾器	環	12.3	3.5	6.6	EHK	95	普通	灰	末野産 底部回転糸切り №8	20-6
6	須臾器	環	12.4	3.5	6.4	EIK	95	普通	灰	末野産 底部回転糸切り №6・7・A	20-7
7	須臾器	環	(12.0)	3.4	(7.6)	BEHIK	30	普通	灰オリーブ	末野産 底部回転糸切り №10	
8	須臾器	環		[1.7]	(6.8)	EHK	50	普通	浅黄	末野産 底部回転糸切り 底部周辺に擦れ痕 D	
9	須臾器	環		[1.5]	7.1	EHK	60	良好	灰黄	末野産 底部回転糸切り B・D	
10	須臾器	環		[1.4]	8.0	EHK	80	普通	褐灰	末野産 周辺ヘラケズリ A	
11	須臾器	環		[0.8]	6.4	EHK	70	普通	灰黄	末野産 底部回転糸切り D	
12	土師器	環	(12.0)	[2.6]	(8.2)	CIK	15	普通	赤褐	内面に放射状暗文 (平底)	20-8
13	灰釉陶器	長頸瓶	(13.9)	[1.1]		IK	5	良好	灰黄	猿投産 内外面施釉	
14	須臾器	長頸瓶	(8.8)	[7.2]		EIK	80	普通	暗灰	末野産 外面に自然釉付着 №2	
15	須臾器	長頸瓶	10.4	[7.3]		CEHIK	95	不良	灰黄	末野産 酸化塩 頸部貼付面にキザミ №9	20-9
16	土師器	甕	20.5	[19.4] [3.9]	4.6	ABCHIK	80	普通	明赤褐	カマド №1・2・3	20-10
17	土師器	甕	19.7	26.7	(4.1)	CIK	80	普通	赤褐	カマド №1	20-11
18	土師器	甕	21.8	27.2	4.2	ABCHIK	80	普通	明赤褐	底部ヘラケズリ カマド №1・2・3	20-12

0.24mの浅いテラス状の掘り込みの西側に、さらに深さ0.16mのピット状の掘り込みをもつ。壁溝は南壁から西壁南半に巡る。カマド前面に、ピット1基が所在する。

出土遺物は9世紀後半頃と推定される。

第34図19・20は土鍾で、いずれも完形品である。縦断面ダイヤ形で、両端に比べて中央が太くなる。19は長さ4.3cm・最大径2.4cm・孔径0.3cm・重さ20.6g、色調はにぶい橙を呈している(№3/図版29-2)。20は長さ4.5cm・最大径2.6cm・孔径0.3cm重さ25.6g、色調はにぶい黄橙を呈している(№4/図版29-2)。

21は土製紡錘車で、残存率40%ほどである。残存する上径4.7cm・下径3.8cm・高さ2.2cm・推定孔径0.8cm・重さ30.6gである(№8/図版29-4)。

22は鉄製の釘である。両端を欠損する。断面は方形である。残存する長さ5.05cm・幅0.3cm・厚さ0.25cm・重さ3.6gである(図版27)。

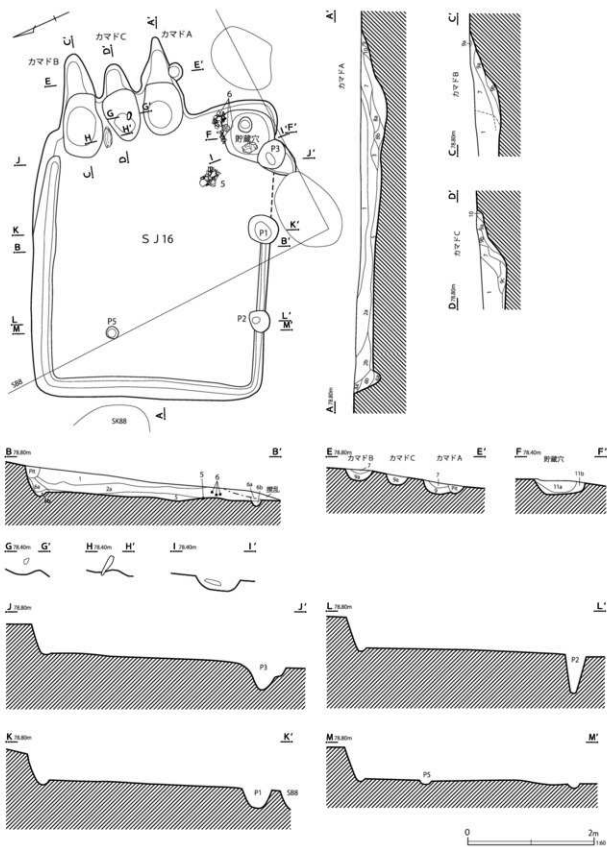
第20号土壌は深く、第15号住居跡床面を掘り抜いている。東西0.70m、南北0.60m、確認面からの深さ0.64mである。用途は不明である。

第16号住居跡 (第35・36図)

P・Q-19グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長4.62m、幅3.75m、確認面からの深さ0.36mを測り、主軸方位はN-115°-Eを指す。覆土の堆積は、斜面上方から埋没した状況が観察できる。柱穴は確認されていない。

カマドは3基検出された。同時に3基が使用されていた訳ではなく、古いカマドを埋め戻してから新しいカマドが造り直されている。住居構築時の最も古いものは、東壁中央付近のカマドAである。全長1.55m、燃焼部は長さ0.85m、残存幅0.67m、煙道部は長さ0.70mである。続いて北東隅のカマドBが造られている。全長1.65m、燃焼部は長さ1.04m、幅0.67m、煙道部は長さ0.61mである。最も新しいのが中央のカマドCである。全長1.26m、燃焼部の長さ0.84m、幅0.56m、煙道部の長さ0.42mである。袖部は消失していたが、左袖付近の構築補助材として使用されていた大型礫が発見されている。対応する右袖の礫は、貯蔵穴に流れ込んでいた。3基とも燃焼部の中心が



第35図 第16号住居跡

S J 16

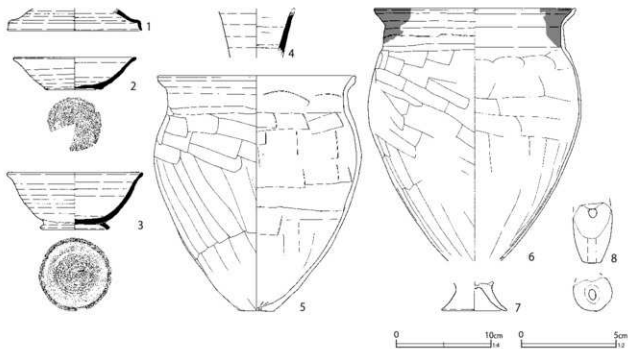
- 1 黒褐色土 黒色土主体+ローム粒子
 2 明褐色土 基本的に1層と同じ ローム粒子多量 焼土粒子少量
 3 黄褐色土 粘土層
 4 黒褐色土 1層類似 ロームブロック少量 b: ロームブロック多
 5 明褐色土 黒色土主体+ローム土
 6 黒褐色土 1層類似 ロームブロック b: ロームブロック多

カマド

- 7 暗褐色土 風化粘土主体
 8 黒褐色土 黒色土主体 焼土粒子・小ブロック多量
 9 赤褐色土 b: 焼土小ブロック多量・しまり弱
 10 黄褐色土 粘土・焼土主体+ローム粒子少量 b<焼土<c
 11 黄褐色土 ローム土主体+焼土粒子微量

貯蔵穴

- 11 明褐色土 均質なソフトローム主体+黒色土粒子 b: 黒色土粒子少量



第36図 第16号住居跡出土遺物

第15表 第16号住居跡出土遺物観察表 (第36図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	蓋	(14.0)	[2.3]		EHK	10	普通	灰黄	本野産 カマドB	
2	須恵器	坏	(12.8)	3.4	5.8	EI	70	良好	灰	本野産 底部回転糸切り カマドA・カマドC	
3	須恵器	高台付埴	(14.0)	6.0	7.4	EHK	35	良好	灰白	本野産 貼付高台 底部回転糸切り カマドC	
4	須恵器	長頸瓶		[5.0]		EIK	20	良好	灰黄	本野産 C	
5	土師器	甕	20.7	25.0	(3.6)	ACEHK	80	普通	明赤褐	底部ヘラズリ Na1・A	21-1
6	土師器	甕	21.2	[26.7]		CHK	60	普通	にじみ赤	Na2・3・4・7・A	21-2
7	土師器	台付甕	[3.1]	6.8		AIK	90	普通	橙	カマド	

住居壁線上に並び、架け口がこの付近に想定できる。住居壁と架け口の位置関係が継承され、カマドの造り替えが住居の建て替え・拡張に伴うと仮定した場合、カマドの設置された東壁は構築当初から現状が維持されていたようである。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に付設されている。平面形態は隅丸方形で、東西0.8m、南北0.8m、床面からの深さ0.2mである。東側にビット状の掘り込みが穿たれている。西壁際からカマドの構築材として用いられていた礫がみつかった。

壁溝は、南壁中央付近～西壁～北壁に沿って巡る。

斜面下方側の南壁に沿ってPit 1・Pit 2・Pit 3の3基のビットが等間隔に並んでいる。位置的に地面の傾斜に対して養生した、補助的な柱穴の可能性が考えられる。

遺物は本野産須恵器蓋・坏類・長頸瓶、土師器甕が出土し、9世紀中葉～後半頃と推定される。

第36図8は土鍾の欠損品(残存率40%)である。残存する長さ3.2cm・最大径2.1cm・孔径0.5cm・重さ10.3g、色調はにじみ橙である(図版29-2)。

第17号住居跡（第37～39図）

S-19・20グリッドに位置する。南西隅が第4号溝跡によって削平される。北東部に重複する第18号住居跡・第87号土壌よりも新しい。

平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長4.12m、幅3.50m、確認面からの深さ0.26mを測り、主軸方位はN-95°-Eを指す。覆土の堆積は、斜面上方の北東から斜面下方の南西に向かって埋没した様子が観察できる。

カマドは東壁の南東隅付近に位置する。白色粘土で造り付けた袖部の内側には、補強材に用いられた片岩が設置されていた。燃焼部が検出され、長さ1.45m、幅0.75mである。煙道部は削平され、確認されていない。燃焼部の中央付近から、棒状に加工された片岩が立てられた支脚が2本検出された。横に並ぶ二連の架け口が推定される。

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝は、全周する。

遺物は、煮沸具の土師器甕の出土点数が多い。

第38図7は底面に「秀」？と思われる墨書がみられる。15は須恵器の甕で、裾部が外反する。23は須恵器平底甕の底部破片を円板状に再加工されたものである。9世紀第4四半期頃と推定される。また、製鉄の痕跡はないが、鉄塊系遺物・腕型滓・が壁などの製鉄関連遺物が混入している。

第39図36は鉄製紡錘車である。紡輪と付近の棒軸の一部が残存している。紡輪は径4.2cm・厚さ0.3cm、紡輪は断面形が円形で、残存長3.5cm・最大径0.4cm、残存重19.8gである（No 3／図版27）。

37～39は鉄塊系遺物で、いずれも磁着する。37は長さ3.2cm・幅3.0cm・厚さ1.0cm・重さ15.1g（No 17-1）、38は長さ3.1cm・幅2.6cm・厚さ2.1cm・重さ18.3g（No 17-2）、39は長さ2.5cm・幅1.7cm・厚さ1.1cm・重さ10.1g（B）である。

40は腕型滓である。上面が水平、下面は球面を呈する。残存長6.8cm・残存幅5.3cm・厚さ2.5cm・重さ113.6g、磁着する（No 16）。

41はが壁の破片である。内面に発砲もしくは光沢をもつ滓化がみられ、外面は塵入り粘土である。残存長7.1cm・残存幅11.4cm・厚さ3.6cm・重さ189.7g、非磁着である（No 14）。

第18号住居跡・第87号土壌（第40・41図）

S-20グリッドに位置し、重複する第17号住居跡が最も新しく、第18号住居跡が最も古い。

第18号住居跡は平面形態が方形で、カマドを北東壁に付設する。主軸長2.60m、確認面からの深さは0.25mを測り、主軸方位はN-40°-Eを指す。覆土は埋戻された土層と観察される。

カマドは2基設置されている。カマドの残存状態や付随する貯蔵穴の配置関係から、北東壁中央のカマドAが住居廃絶時、東隅のカマドBが住居構築当初のものである。カマドAは天井部等の構築材粘土の堆積状況から、壊されているようである。燃焼部のみが検出され、長さ0.95m、幅0.65mである。東隅の貯蔵穴は、カマドAに対応する。東西0.4m、南北0.44m、床面からの深さ0.1mである。カマドBは軸方向を南東壁と一致させる。壁外に張り出した燃焼部の一部が確認された。カマドAに造り替える段階で壊し、壁内部分を再掘削したようである。残存長0.55m、幅0.68mである。対応する貯蔵穴はみつからない。

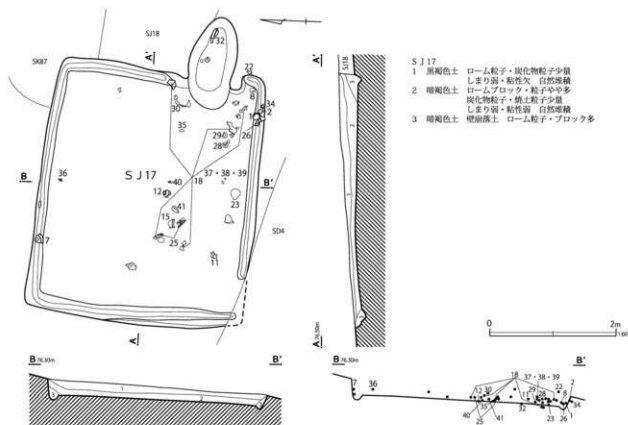
柱穴・壁溝は、確認されていない。

遺物は南東壁周辺に集中し、土師器盤・坏・甕が出土している。8世紀前半頃と推定される。

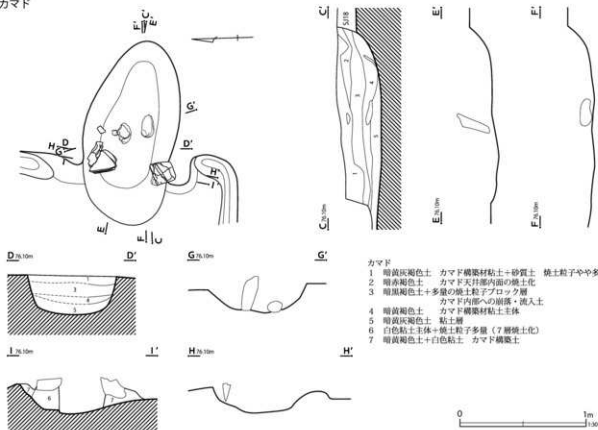
第41図10は砥石で、両端を欠損する。残存する長さ8.6cm・幅3.1cm・厚さ2.0cm・重さ110.8g、石材は粘板岩である（No 7／図版29-3）。

11は石製紡錘車である。上径と下径にあまり差のないタイプである。径4.7×4.6cm・高さ1.2cm・孔径0.8cm・重さ33.1g、石材は凝灰岩である（No 8／図版29-4）。

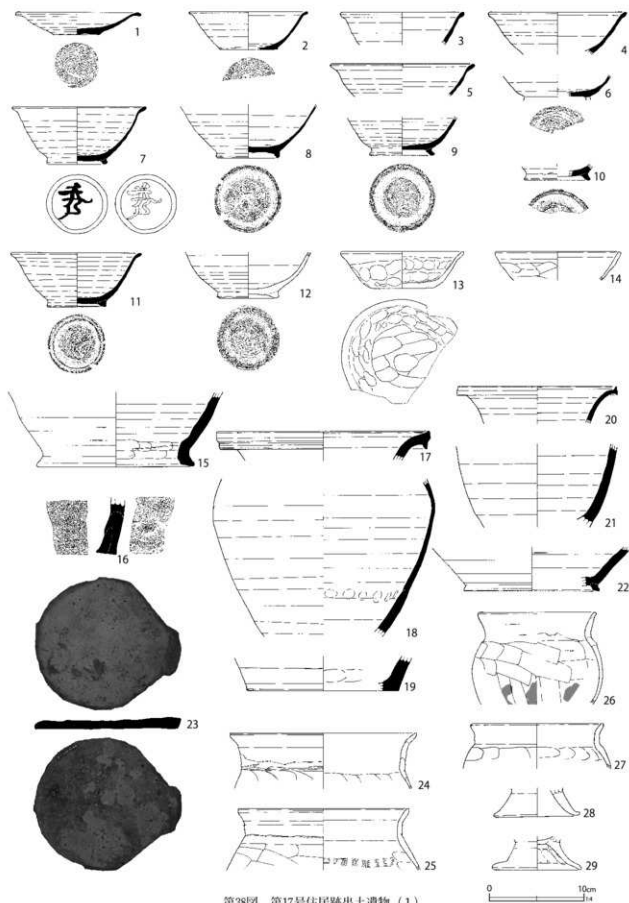
第87号土壌は、平面形態が長方形の土壌である。長軸方位がN-75°-Wを測り、重複する第18号住居跡とは方向が異なる。覆土の堆積状況には明



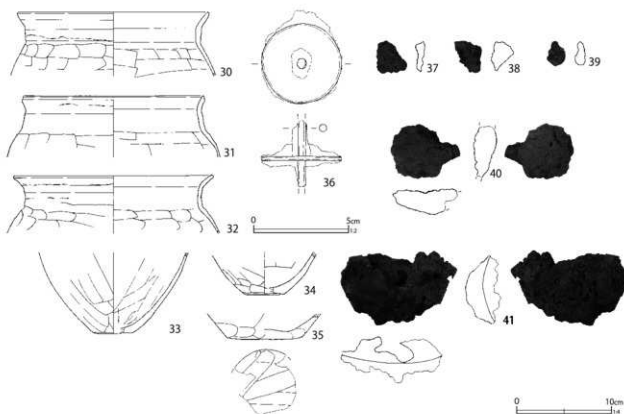
カマド



第37図 第17号住居跡



第38图 第17号住居跡出土遺物 (1)

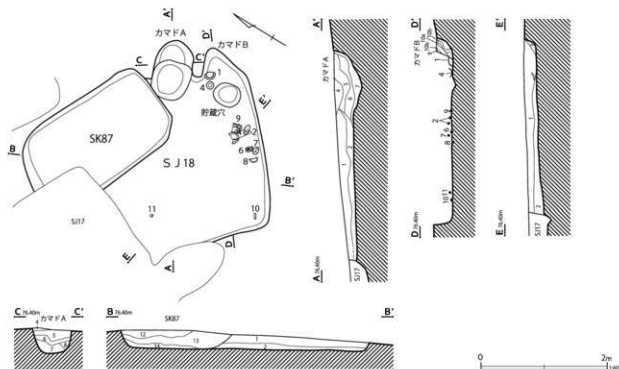


第39図 第17号住居跡出土遺物（2）

第16表 第17号住居跡出土遺物観察表（第38・39図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	皿	12.9	2.3	4.7	EHK	100	普通	黄褐色	末野産 底部回転糸切り №26	21-3
2	須恵器	杯	(12.4)	4.0	(6.0)	DEHK	30	普通	灰	末野産 底部回転糸切り №25・A	
3	須恵器	杯	(12.8)	[3.5]		EIK	25	良好	灰	末野産 B	
4	須恵器	杯	(14.4)	[4.5]		DIK	25	良好	灰	末野産 A・B	
5	須恵器	杯	(15.0)	[3.5]		EHK	25	普通	灰	末野産 A・B	21-4
6	須恵器	高台付埴		[2.3]		EHK	20	普通	灰ナリ	末野産 貼付高台 (剥離) 底部回転糸切り C	
7	須恵器	高台付埴	(14.0)	6.1	6.5	EHK	65	普通	にぶい黄	末野産 里割秀! 貼付高台 底部回転糸切り 内面に重ね焼きの痕跡 №1	
8	須恵器	高台付埴		[5.7]	6.8	DEHK	70	普通	赤褐色	末野産 貼付高台 底部回転糸切り 内面に重ね焼きの痕跡 №28-A	
9	須恵器	高台付埴		[4.0]	6.9	EIK	70	良好	灰	末野産 貼付高台 底部回転糸切り 内面に重ね焼きの痕跡 D	21-5
10	須恵器	高台付埴		[1.8]	[7.0]	EIK	30	普通	灰	末野産 貼付高台 底部回転糸切り B	
11	須恵器	高台付埴		5.7	6.2	EHK	75	普通	にぶい黄	末野産 貼付高台 底部回転糸切り №12・B	21-6
12	須恵器	高台付埴	13.6	[4.8]	6.5	EHK	65	普通	にぶい黄	貼付高台 底部回転糸切り №15・C	
13	土師器	杯	(13.0)	3.9	7.0	CEHK	60	普通	明赤褐色	平底 C	21-7
14	土師器	杯	(13.0)	[3.1]		DEHK	20	普通	橙	(平底) B	
15	須恵器	甕		[7.9]	(16.7)	EHK	20	良好	にぶい黄	末野産 単孔式 №8	21-9
16	須恵器	甕		[6.1]		EIK		不良	灰	末野産 D	
17	須恵器	甕	(22.3)	[3.1]		EIK	5	良好	暗灰	末野産 C	
18	須恵器	甕		[16.6]		DEI	70	良好	灰	末野産 外面自然軸付着 №5・10・23・29・41・A・B・C	
19	須恵器	甕		[3.7]	(16.0)	EHK	10	普通	灰	末野産 平底 底部ヘラケズリ C	21-10
20	須恵器	長頸瓶	(16.7)	[4.0]		EIK	10	良好	暗黄灰	末野産 内面に自然軸付着 D	
21	須恵器	長頸瓶		[8.8]		E	20	普通	灰	末野産 C	
22	須恵器	壺		[4.7]	(14.3)	EHK	10	普通	灰	末野産 貼付高台 №36	
23	須恵器	甕				EHK	100	普通	灰	末野産 平底甕底部の転用(用途不明) №18	21-11
24	土師器	甕	(19.6)	[6.0]		ACHIK	25	普通	橙	SJ12A・D	
25	土師器	甕	(17.8)	[6.6]		CHIK	40	普通	にぶい黄	№6・9・B	
26	土師器	小型甕	12.3	[9.8]		CHIK	70	普通	橙	内外面皮付着 №24・カマド・A	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
27	土師器	甕	(13.6)	[4.8]		ACHIK	25	普通	橙	カマド	
28	土師器	台付甕		[3.2]	9.0	CHIK	90	普通	にぶ濁	No.19	
29	土師器	台付甕		[3.5]	9.0	CEIK	90	普通	にぶ濁	No.21・A	
30	土師器	甕	(20.0)	[6.8]		EHK	40	普通	橙	No.38・A	
31	土師器	甕	(19.0)	[6.5]		CEHIK	20	普通	にぶ濁	カマド・A	
32	土師器	甕	(21.0)	[6.2]		EHK	30	普通	にぶ濁	No.42	
33	土師器	甕		[8.6]	4.2	AEHIK	60	普通	にぶ濁	底部ヘラケズリ B	
34	土師器	小型甕		[5.5]	(4.0)	EHK	20	普通	明褐	底部ヘラケズリ No.27	
35	土師器	甕		[2.7]	8.0	EHK	60	普通	にぶ濁	底部ヘラケズリ No.37・カマド	



SJ18

- 黒褐色土 しまり・粘性欠 ローム粒子・炭化物粒子多量 炭化材欠片 焼土粒子少量 埋戻し
- 暗黄褐色土 鋸床層 ローム主体 硬く踏み固められている
- 暗黄褐色土 ローム主体 硬弱層土
- カマド A
- 褐色土 掘尾層 浅間 A
- 暗褐色土 カマド構築土 黒褐色土ブロック+焼土粒子 カマド天井部の崩落土 壁面にくらべて焼土が少なく、人為的に硬されている
- 暗褐色土 焼土粒子・ブロック多量 炭化物粒子多 カマド内の堆積土
- 暗褐色土 ロームブロック多量 掘尾元埋層 焼土粒子・カマド構築土や中多
- 暗褐色土 6 層類似 右 (南側) 壁材のみ存在 構築石材の採取箇所か。

カマド B

- 暗黄褐色土 黒褐色土主体+多量の焼土粒子・少量の炭化物 炭化物なし b: 被熱による赤色化
- 明褐色土 ローム小ブロック・粒子・炭化物粒子少量

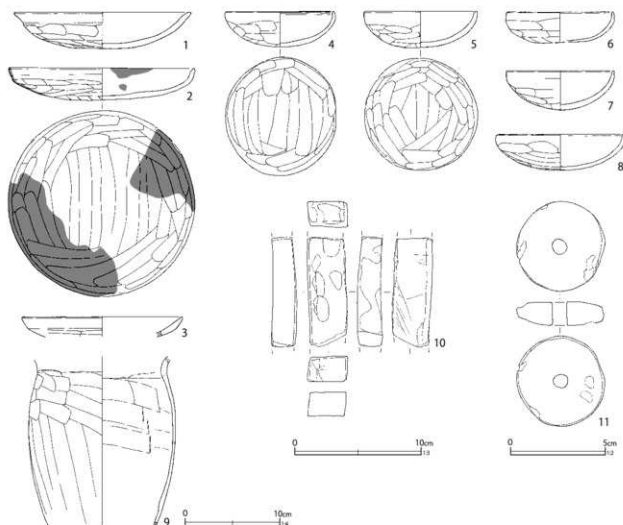
SK87

- 暗褐色土 しまり・粘性欠 ロームブロック・炭化物少量
- 黒褐色土 しまり・粘性欠 炭化物多量
- 暗黄褐色土 ロームブロック主体 掘尾に 13 層土混入

第40図 第18号住居跡・第87号土壇

第17表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	土師器	甕	(18.4)	3.9		CIK	40	普通	にぶ濁	No.2・カマド B	21-10
2	土師器	甕	19.4	3.4		CGHIK	95	普通	内外面黒斑	No.1・2	21-11
3	土師器	甕	(17.0)	[2.1]		AEIK	15	普通	赤褐	カマド・B	
4	土師器	甕	11.4	3.8		EHK	100	普通	明赤褐	No.1・カマド B	22-1
5	土師器	甕	11.7	3.8		CHIK	95	普通	橙	カマド	22-2
6	土師器	甕	11.1	3.3		HIK	70	普通	褐灰	内面風化 No.6・Bカマド	22-3
7	土師器	甕	11.3	4.1		CHIK	90	普通	黒褐	内面剥離多 No.5・Bカマド	22-4
8	土師器	甕	(13.4)	3.7		HIK	40	普通	にぶ濁	No.4	
9	土師器	甕		[18.0]		ACHIK	20	普通	明赤褐	No.3	



第41図 第18号住居跡出土遺物

らかな新田関係が認められる。長軸長2.42m、短軸長1.42m、確認面からの深さ0.3mを測る。覆土中に炭化物を多く含んでいるが、用途・性格は不明である。

第19号住居跡（第42図）

Q-20グリッドに位置する。

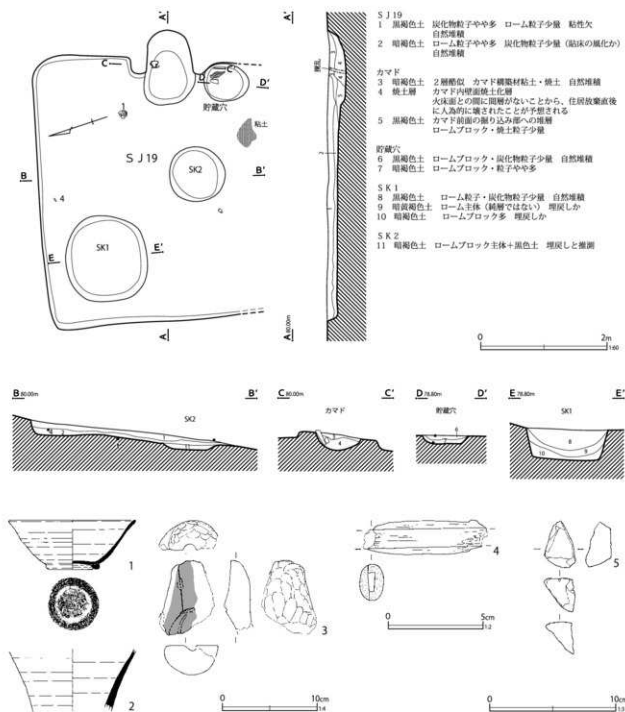
平面形態は方形で、斜面下方の南壁は残存していない。カマドを東壁に付設し、主軸長4.34m、残存幅3.50m、確認面からの最深0.18mを測る。主軸方位はN-109°-Eを指す。覆土は斜面上方から堆積した状況が観察できる。

カマドは地山を掘り残した短い袖を芯として構築されている。燃焼部のみが検出され、東半部は壁外に張り出している。全長1.16m、幅0.78mで、

左袖の内側から片岩を薄く打ち欠いた補強材がみついている。火床面と上面に堆積したカマド構築土のとの間に間層がないことから、住居廃絶直後に壊されたようである。

貯蔵穴は、カマド右側に付設されている。東西0.59m、南北0.73m、床面からの深さ0.10m、平面形態は円形である。

付属施設として土壇2基が検出されている。SK1は東西1.36m、南北1.40m、床面からの深さ0.49m、平面形態は隅丸方形である。用途は不明であるが、住居の北東隅に主軸方向を揃えた位置関係から、第19号住居跡に伴う土壇と推測される。SK2はカマド前面の住居中央付近に位置し、床下土壇である。東西0.86m、南北0.90m、床面



れる。

第42図3は粘土が焼成された鋳型で、第21号住居跡から出土した未使用の鋳型と酷似する。既に使用済みの鋳型で、金属を鋳型から取り出すときに破碎された湯口から湯道の破片である。内面は鋳込みによって流し込まれた湯（溶解した金属）の被熱を受けて変色し、灰色を呈している。残存する長さ7.8cm・幅5.9cm・厚さ3.2cm、湯口径1.2cmである（C／図版22-6）。鋳型の酷似状況と斜面の上下に並列する第21号住居跡と第19号住居跡の位置関係から、本来は第21号住居跡の遺物であったものが、破碎時もしくは住居跡の埋没過程で流出した可能性が高い。

4は鉄製の刀子である。断面形状が長方形であることから、柄が装着した状態の茎部である。残存する柄は木製で、腐食により原型を復元することはできない。残存する長さ6.4cm・幅1.0cm・重さ18.1gである（No2／図版27）。

5は砥石の破片である。残存する長さ3.7cm・幅2.45cm・厚さ2.6cm・重さ16.4g、石材は凝灰岩である（SK1／図版29-3）。

第20・23号住居跡（第43・44図）

P-19グリッドに位置する。斜面の傾斜が強く、平面観察では確認できなかったが、重複する2軒の住居跡である。覆土の堆積状況から、第20号住居跡の方が新しい。

第20号住居跡は平面形態が長方形で、カマドを東壁と北壁に付設する。長軸を東西方向に向け、東西推定長軸長4.15m、南北短軸長3.00m、確認面からの最深0.40mを測り、長軸方位はN-105°-Eを指す。

北壁のカマドAは、燃焼部と短く延びる煙道部がみつまっている。東壁のカマドBは、短い煙道部と燃焼部の残欠が検出され、住居壁までの間にカマドの痕跡は残されていない。そのため住居構築当初は東壁にカマドBを設置し、住居の拡張に伴って北壁のカマドAに造り替えたものと推

測される。カマドAは全長1.46m、燃焼部長1.11m、幅0.59m、煙道部長0.35mである。原位置は失われていたが、カマドの補強材に用いられていた大型の礫がみつまっている。カマドBは全長1.39m、煙道部長0.53mである。

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝は、カマドA両脇の北壁の一部と、南東隅付近に検出されている。SK1～SK4の土壌4基は、SK1が床下土壌、SK2・3とSK4は掘方の可能性が高い。SK1は東西0.95m、南北0.60m、床面からの深さ0.14m、SK2・3は東西1.66m、南北0.39～0.5m、床面からの深さ0.10～0.24m、SK4は東西0.60m、南北0.49m、床面からの深さ0.10mである。

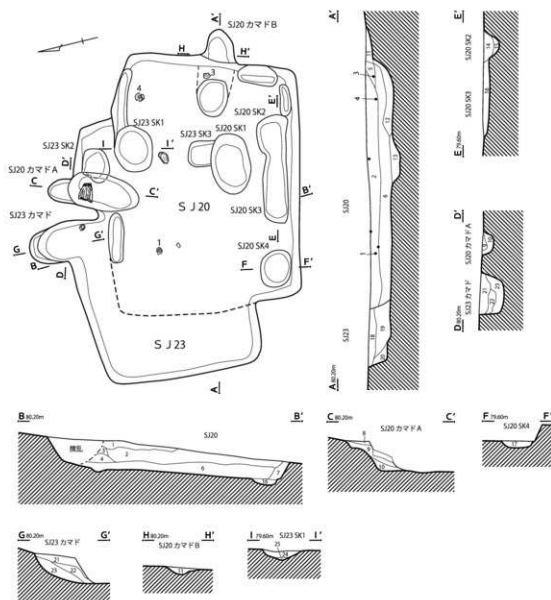
第23号住居跡はカマドを北壁に付設する。平面形態は長方形を基本としているが、北壁はカマドを挟んだ東西で段違いとなる。長軸を東西に向け、東西長軸長4.16m、南北短軸長2.63m、確認面からの深さ0.34mを測る。長軸方位はN-94°-Eを指す。覆土は、ロームブロックを多量に含む埋戻し層である。

カマドは、設置された北壁が段違いとなる片袖タイプのカマドと推定される。第20号住居跡との重複の影響で、燃焼部の掘り込み範囲は確認できなかった。推定長1.25m、幅0.64mである。先端には極めて短い煙道部が残っている。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されていない。SK1・SK2・SK3の土壌は壁際に点々と位置することから、掘方の可能性が高い。

第20・23号住居跡の遺物は、猿投産灰釉陶器皿・末野産須恵器坏類・土師器甕と、鉄鎌が出土し、9世紀末～10世紀初頭と推定される。

第44図20は長頸竜被平刃片刃式の鉄鎌である。鎌身部と筥被の一部が存存している。鎌身部は短く、逆刺状の関がある。残存する長さ5.1cm・刃幅0.6cm・背幅0.2cm・重さ2.9gである（図版27）。



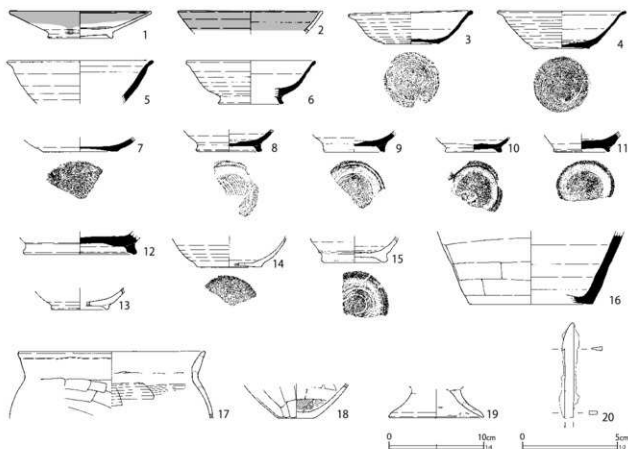
S J 20

- 1 黒色土 流入土 炭化物粒子・焼土粒子・ローム粒子微量 自然堆積
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ブロックやや多 焼土粒子少量 自然堆積
- 3 暗褐色土 2層近似 第23号住居跡カマド崩落土混入 自然堆積
- 4 暗褐色土 2層近似 第23号住居跡カマド白色粘土・焼土粒子混入 自然堆積
- 5 暗褐色土 2層近似 第20号住居跡カマド粘土・焼土流入 自然堆積
- 6 暗褐色土 ロームブロックやや多 自然堆積
- 7 黒褐色土 埋積層土 ロームブロック多 自然堆積
- 8 カマド A カマド上面陥没部の二次的堆積層 炭化物粒子・ローム粒子少量
- 9 暗褐色土 カマド天井部の崩落土層 粘土・ロームブロック主体
- 10 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 11 カマド B 埋没部焼土層 暗褐色土主体・焼土多量
- 12 暗褐色土 ロームブロック多 焼土粒子・炭化物粒子・カマド粘土少量
- 13 S K 1 ロームブロック多 埋戻し
- 14 S K 2 ロームブロック多 埋戻し
- 15 暗褐色土 ロームブロック多 埋戻し
- 16 S K 3 暗褐色土 ロームブロック多 埋戻し
- 17 S K 4 暗褐色土 ロームブロック多量 埋戻し

S J 23

- 18 黒褐色土 ローム粒子・焼土ブロック少量
- 19 暗褐色土 ロームブロック多 埋戻し
- 20 暗褐色土 埋積層土
- 21 カマド カマド天井部陥没部の二次的堆積層
- 22 暗褐色土 カマド粘土ブロックやや多 ローム粒子・焼土粒子微量
- 23 暗褐色土 カマド天井部崩落土 建築材粘土多
- 24 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量
- 25 S K 1 焼土層
- 26 S K 2 暗赤褐色土
- 27 S K 3 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
- 28 暗褐色土 ロームブロック多

0 2m



第44図 第20・23号住居跡出土遺物

第19表 第20・23号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

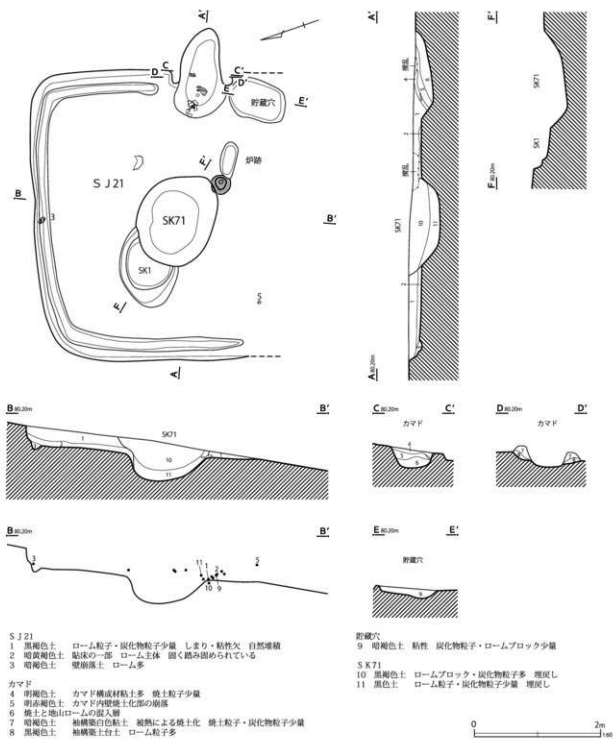
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰釉陶器	皿	(14.7)	2.9	6.8	EIK	70	良好	灰白	第20号 貼付高台 底部回転ヘラズリ 内面・外面の面割 SJ20A・SJ23C	22-7
2	灰釉陶器	碗	(15.2)	[2.5]		HIK	5	良好	灰白	東濃産 SJ20A・SJ23C	
3	須恵器	環	12.8	3.4	5.9	EIK	100	良好	灰白	末野産 底部回転率切り SJ20No3・SJ20A・SJ20D・SJ23A	22-8
4	須恵器	環	13.3	4.0	5.8	HIK	85	普通	黄灰	末野産 底部回転率切り SJ20No2	22-9
5	須恵器	高台付碗	(15.1)	[4.6]		EIK	10	良好	灰白	末野産 SJ23C	
6	須恵器	高台付碗	(13.2)	4.5	(6.8)	IK	25	良好	灰白	末野産 貼付高台 SJ20A・SJ23A・SJ20D	
7	須恵器	環	[1.5]	(7.6)		EHK	20	普通	にい・黄灰	末野産 底部回転率切り SJ23D	
8	須恵器	高台付碗	[2.4]	(7.0)		EHK	30	不良	灰	末野産 酸化焰 貼付高台 底部回転率切り SJ23C・SD6	
9	須恵器	高台付碗	[2.2]	(6.4)		EHK	35	良好	灰黄	末野産 貼付高台 底部回転率切り SJ23D	
10	須恵器	高台付碗	[1.6]	6.0		EIK	60	普通	灰	末野産 貼付高台 底部回転率切り SJ20A	
11	須恵器	高台付碗	[2.2]	6.0		CIK	75	良好	灰黄	末野産 貼付高台 底部回転率切り SJ23カマドA	
12	須恵器	高台付碗	[2.5]	(11.9)		EIK	25	良好	黄灰	末野産 貼付高台 底部ナデ 自然釉付着 SJ23A・SJ20D	
13	ワロ土器	高台付碗	[2.3]	(6.0)		CEHK	40	普通	橙	貼付高台 SJ20・23D	
14	ワロ土器	環	[3.2]	(6.4)		EHK	20	普通	にい・黄灰	底部回転率切り SJ20A	
15	ワロ土器	高台付碗	[2.8]	7.0		EHK	40	普通	にい・黄灰	貼付高台 高台付通割ヘラズリか? 底部回転率切り SJ23A・SJ20D	
16	須恵器	甕	[7.7]	(13.0)		EIK	25	良好	灰	末野産 平底 底部ヘラケズリ SJ23A・SJ20D	
17	土師器	甕	(19.4)			ACHIK	20	普通	にい・黄灰	二次的焼熱 SJ20カマド・SJ23カマド	
18	土師器	甕	[3.7]	4.0		CIK	60	普通	橙	底部ヘラケズリ SJ20	
19	土師器	台付甕	[3.0]	(10.0)		EHK	20	普通	にい・黄灰	カマド	

第21号住居跡・第71号土壌 (第45～47図)

P-20グリッドに位置し、第71号土壌は第21号住居跡よりも新しい。第71号土壌は不整長方形で、東西1.54m、南北1.2m、確認面からの深さ0.44m

である。覆土は埋め戻されている。

第21号住居跡は平面形態が方形で、カマドを東壁に付設する。斜面の傾斜が強いので、斜面下方の南壁付近は残存していない。主軸長4.12m、南

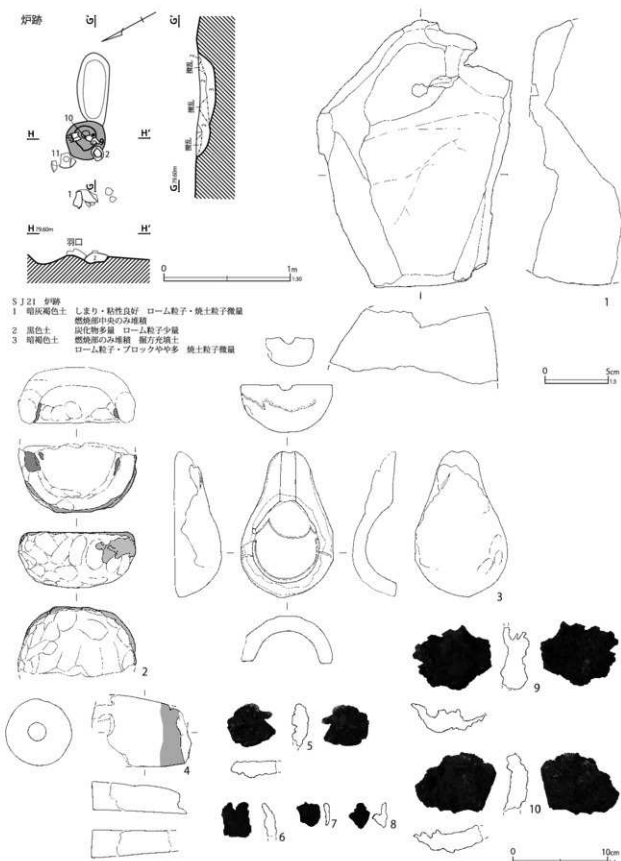


第45図 第21号住居跡・第71号土坑

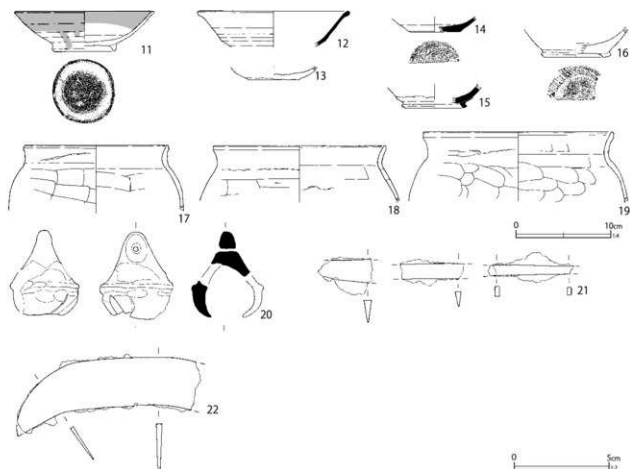
北残存幅4.02m、確認面からの最深0.27mを測り、主軸方位はN-105°-Eを指す。床面には貼床が施され、覆土は斜面上方の北側から堆積していった様子が観察できる。カマドは、白色粘土で構築された短い袖部と壁外に張り出す燃焼部が検出さ

れ、煙道部は不明である。長さ1.40m、幅0.70mを測る。

柱穴は検出されていない。貯蔵穴はカマド右側に位置する。隅丸長方形で、東西0.6m、南北0.95m、床面からの深さ0.15mである。壁溝はカ



第46図 第21号住居跡が跡・出土遺物（1）



第47図 第21号住居跡出土遺物（2）

第20表 第21号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
11	灰釉陶器	高台付碗	14.5	4.3	6.4	EIK	70	良好	灰白	東瀬産 貼付高台 底部回転糸切り	No5	23-1
12	須恵器	高台付碗	(15.8)	[3.8]		EIK	10	良好	灰黄	未野産 C		
13	土師器	碗		[1.4]	(5.6)	CEHIK	25	普通	灰黄	平底 手持ちヘラケズリ 二次的被熱 貯蔵穴		
14	須恵器	杯		[1.6]	(5.6)	EIK	25	良好	灰	未野産 底部回転糸切り C		
15	須恵器	高台付碗	[2.5]	(6.8)		CEHIK	20	良好	灰	未野産 貼付高台(帯状粘土追加) A		
16	土師器	高台付碗?	[3.2]	(7.4)		EIK	40	普通	橙	貼付高台 高台底面に帯状の圧痕 底部回転糸切り D		
17	土師器	甕	(14.8)	[7.0]		ACEHIK	15	普通	明赤褐	カマド A		
18	土師器	甕	(18.0)	[6.1]		CHIK	20	普通	明赤褐	カマド		
19	土師器	甕	(20.0)	[7.5]		HIK	15	普通	赤褐	D		

マド対面の西壁中央から北壁、カマド北側の東壁北半部に巡る。残存しない南壁にも巡っていた可能性が高く、全周していたことが予想される。

カマド前面の住居中央付近から、灰跡が確認されている。灰は、平面形態が隅丸方形の浅い土塊状の掘り込みをもつ。東西0.31m、南北0.29m、床面からの深さ0.1mを測る。底面の焼土化が顕著である。灰内から轆の羽口・埴塼・鉄塊系遺物・碗型滓・流動滓・鉄滓が出土し、北壁中央際から

未使用の鋳型も発見されている。また、灰跡の覆土から、鍛造剥片3.1g・磁着滓45.6g・非磁着滓13.54g・湯玉20点・砂鉄232.16gが検出されている。東側の長さ0.59m、幅0.25mの掘り込みは、煙出し状の施設の可能性もある。埴塼・鋳型と鍛造剥片の出土から、鋳造と鍛造に併用された灰跡と推定される。

SK1は平面形態が楕円形で、底面は段をもつ床下土塊と思われる。東西1.28m以上、南北0.94

m、床面からの最深0.22mである。

鉄生産関連遺物のほかに末野産須恵質の土鈴も注目され、9世紀末～10世紀初頭頃と推定される。

第46図1は金属生産に関わる石製品で、金床石などと推定される。上面に磨り面をもつ。残存する長さ21.1cm・幅15.3cm・厚さ7.2cm・重さ2183.5g、石材は安山岩である(№13/図版29-3)。

2は増堀である。丸底の椀形で、口縁部付近は被熱による変色がみられる。内面の口縁部付近には金属が付着し、非破壊分析では銅の成分が検出されている。体部内面は平滑であるが、口縁部内外面・体部外面は指頭瓦痕が顕著に残る。大きさは口径10.4cm・高さ5.9cm、残存率は60%ほどである。胎土には石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子が含まれている。色調は外面が橙、変色した内面は灰である(№12/図版22-10)。

3は未使用の鋳型である。第19号住居跡から出土した鋳型と酷似する。焼成された鋳型であるが、土器のように器面が調整されていないため、外面の風化が顕著である。半割状態の洋梨形で、湯口・湯道と半球形本体が一体となっている。内面には、湯(溶解した金属)を流した後の型離れをよくし、また鋳肌の仕上がりを少しでも滑らかにする「黒味塗り」が施されている。大きさは、長さ15.5cm・最大幅9.7cm・高さ5.0cm、湯口径1.3cmである。胎土には、雲母・片岩・白色粒子・黒色粒子を含む(№16/図版22-11)。

4は輪の羽口である。円筒状の製品で、中央に円孔が貫いている。先端は被熱の影響が顕著で、発泡・変色が著しい。残存率は70%程度で、残存する長さ10.5cm・径6.0～7.8cm・孔径1.9cm重さ341.4g、胎土には角閃石・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子が含まれている(図版22-12)。

5・10は椀型で底面は湾曲する。5は残存する長さ4.7cm・幅4.8cm・厚さ1.8cm・重さ49.6g、非磁着である(№15)。10は残存する長さ6.2cm・幅7.3cm・厚さ2.1cm・重さ12.9cm、磁着する(№

10)。

6・7は鉄塊系遺物である。6は長さ3.5cm・幅2.7cm・厚さ1.2cm・重さ14.6gである(B)。7は長さ2.3cm・幅2.2cm・厚さ0.6cm・重さ5.6gである(B)。いずれも磁着する。

8は鉄滓である。残存する長さ2.6cm・幅1.9cm・厚さ1.5cm・重さ6.2g、非磁着である(B)。

9は流動滓である。上面には液化した鉄分が流動した痕跡がみられる。残存する長さ6.5cm・幅7.7cm・厚さ2.7cm・重さ113.3g、非磁着である(№9)。

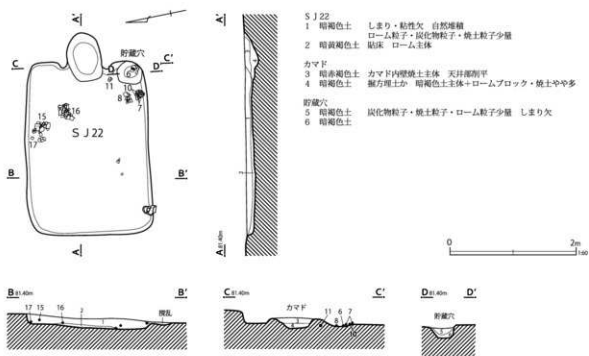
第47図20は須恵質の土鈴である。釣手は本体から扁平につまみ出し、中央に0.2×0.25cmの径が穿たれている。鈴口部は一直線の切り込みに、中央には推定径0.8cmの円孔が穿たれている。内部は空洞で、内部に入っていたはずの玉類は発見されていない。大きさは高さ4.7cm・幅3.9cmである。末野産で、胎土には片岩・白色粒子・黒色粒子を含む。色調は灰である(B/図版22-13)。

21は鉄製の刀子である。接合しない3破片が出土し、刃部・茎部とも比較的長い製品と思われる。刃部は平刃、茎部断面形は長方形を呈している。左から2片が刃部の破片である。残存する大きさは、左端が長さ3.4cm・刃幅0.8cm・背幅0.3cm・重さ2.8g、中央が長さ2.4cm・刃幅1.2cm・背幅0.4cm・残存重4.1gである。右端の茎部片は、長さ4.5cm・幅0.4cm・厚さ0.2cm・重さ3.7gが残存する(D/図版27)。

22は第71号土壌から出土した鉄製の鎌の刃部である。刃部2/3ほどの破片で、刃部先端が物理的な影響でほぼ直角に折れ曲がっている。図は根羽した状態に復元して示した。残存する長さ9.7cm・刃幅2.5cm・背幅0.3cm・残存重22.8gである(図版27)。

第22号住居跡(第48・49図)

集落を区画する第6号溝跡の北側に唯一所在する住居跡で、O-20グリッドに位置する。重複



第48図 第22号住居跡

第21表 第22号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	杯	(13.4)	[3.1]		EHIK	30	普通	灰黄	本野産 B		
2	須恵器	杯	(14.0)	[4.0]		EHIK	25	普通	灰黄	本野産 A		
3	須恵器	杯		[2.9]	6.0	EHIK	15	普通	灰	本野産 底部回転糸切り D		
4	須恵器	高台付埴	(13.6)	5.7	6.7	DEIK	80	良好	灰	本野産 釜み大 貼付高台 底部回転糸切り D		23-2
5	須恵器	高台付埴	(13.5)	5.2	6.0	EIK	60	良好	灰	本野産 貼付高台(割離) 内部に重なる焼土の形跡 Na7-A		
6	須恵器	高台付埴	(15.0)	4.9	5.8	DHIK	75	良好	明褐色	本野産 酸化塩 貼付高台(割離) 底部回転糸切り Na5		22-14
7	須恵器	高台付埴		[5.1]	7.1	EHIK	40	普通	灰黄	本野産 貼付高台(割離) 内部に重なる焼土の形跡 Na7-B		23-3
8	須恵器	高台付埴	(13.4)	5.7	(6.4)	EIK	25	普通	灰	本野産 貼付高台 底部回転糸切り Na4		
9	須恵器	高台付埴	(13.2)	5.9	(6.6)	EHIK	40	普通	黄褐色	本野産 貼付高台 底部回転糸切り Na4		
10	須恵器	高台付埴	(14.5)	5.0	5.9	HIK	70	不良	灰黄	本野産 貼付高台 底部回転糸切り 内部に重なる焼土の形跡 Na4-8		23-4
11	須恵器	高台付埴		[2.1]		EIK	30	普通	灰白	本野産 貼付高台(割離) 底部回転糸切り 重ね焼きの形跡 Na9		
12	須恵器	高台付埴		[1.9]	5.8	HIK	50	普通	橙	本野産 貼付高台 底部回転糸切り カマド・A		23-5
13	土師器	甕				EHIK		普通	橙	A		
14	土師器	小型甕	(12.5)	[6.8]		ACHIK	20	普通	灰黄	貯蔵穴		
15	土師器	甕	18.7	[15.8]		ACHIK	40	普通	橙	Na1-D		
16	土師器	甕	18.0	23.9	3.7	HIK	70	普通	灰黄	底部ヘラケズリ Na1-3-D		23-6

する遺構はない。

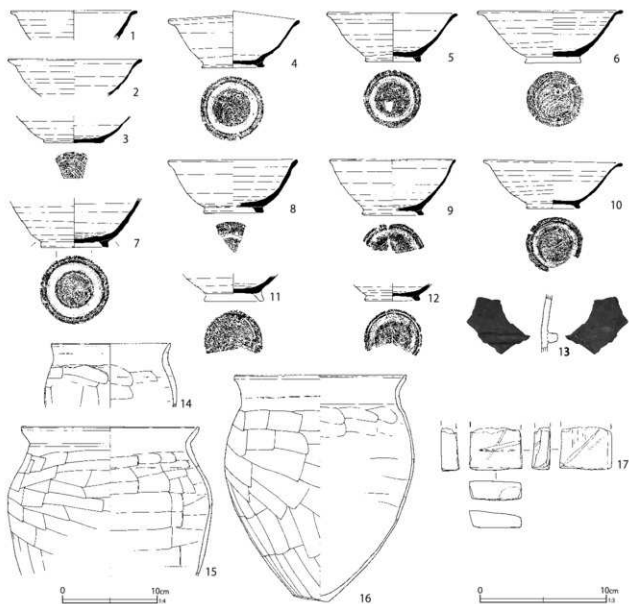
平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長2.75m、南北幅1.95m、確認面からの深さ0.15mを測り、主軸方位はN-101°-Eを指す。床面には貼床が施される。覆土は単層で、自然堆積と推定される。

カマドは、地山掘り残しの短い袖部と大半が壁外に張り出す燃焼部が検出され、煙道部は不明で

ある。長さ0.79m、幅0.52mである。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅に位置する。東西0.35m、南北0.40mと規模が小さい。柱穴・壁溝は検出されていない。

遺物は、貯蔵穴付近に須恵器供膳具、北壁中央際付近に土師器甕類が集中している。特に須恵器供膳具は重ね置いていたような状態で発見されている。集落内での配置位置、居住に適さない狭小



第49図 第22号住居跡出土遺物

な規模も合わせると、居住以外の用途も想起させられる。時期は9世紀第4四半期頃と推定される。

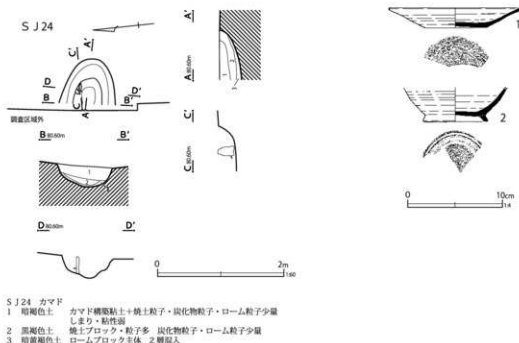
第49図17は砥石で、扁平な製品の端部付近の破片である。残存する長さ3.4cm・幅4.1cm・厚さ1.5cm・重さ30.3g、石材は凝灰岩である（No2／図版29－3）。

第24号住居跡（第50図）

O-18グリッドに位置し、カマド燃焼部の東半部のみが検出された。住居の居住部分は調査区域外にあり、カマドは東壁に付設されものと推定さ

れる。

燃焼部は住居の壁外に大きく張り出す。架け口も壁外にあり、北側に寄った位置から片岩を立てた支脚が発見された。支脚位置の偏りが顕著なため、二連の架け口であった可能性が高い。検出長0.7m、幅0.88m、確認面からの深さ0.32mを測り、主軸方位はN-96°-Eを指す。覆土は天井部の崩落土層、焼土ブロック・焼土粒子を多量に含むカマド内部の堆積層、掘方整地層に分層される。天井部崩落土層が燃焼部の先端にまで達していない



第50図 第24号住居跡・出土遺物

第22表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	皿	(14.0)	2.1	(6.2)	EHIK	30	普通	橙	本野産 酸化焙 底面輪転未切り	二次的焼熟 器面風化 カマド	
2	須恵器	高台付埴		[3.6]	(6.6)	HIK	25	良好	灰	本野産 貼付高台 底部回転未切り		

いことから、煙道部が燃焼部奥壁から外方に延びていた構造が予想される。

遺物は末野産の須恵器皿・高台付埴が出土し、厨房施設に直接伴う遺物はみつからない。9世紀末～10世紀初頭頃と推定される。

第25号住居跡 (第51図)

R-12・13グリッドに位置する。重複する遺構はない。

平面形態は長方形で、カマドを東壁の南半付近に付設する。主軸長4.15m、南北幅2.85m、確認面からの深さ0.27mを測り、主軸方位はN-112°-Eを指す。床面には貼床が施されている。覆土は、斜面上方の北側から堆積した状況が観察できる。また、中央部最上層には浅間Aを含む土層が二次的に堆積している。

カマドは、壁外に大きく張り出す燃焼部が検出されている。地山掘り残しの短い袖部を基礎に、灰黄褐色粘質土によって構築されている。燃焼部

の底面は外方に向かって上がっていき、崩落した天井部は燃焼部の先端にはみられない。痕跡は確認されていないが、煙道部へスムーズに移行する様相と捉えられる。長さ1.35m、幅0.7mである。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は確認されていない。

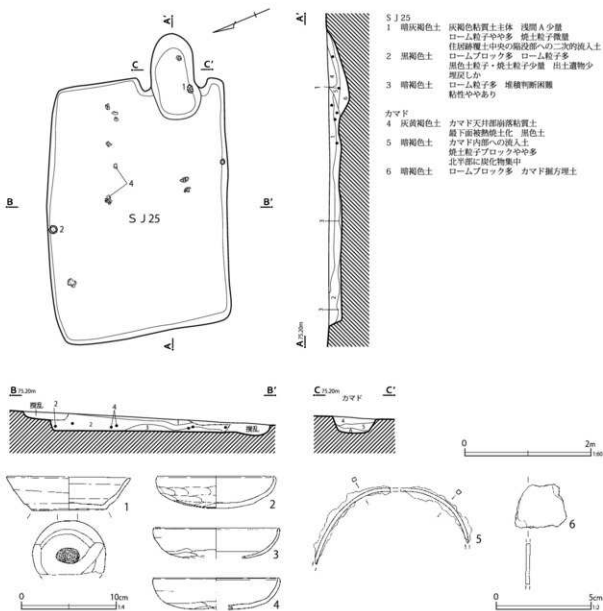
遺物は、南比企産と推定される底部周辺ヘラケズリの須恵器杯と武蔵型土師器杯が出土し、8世紀後半頃と推定される。

第51図5は不明鉄製品である。輪状になると推定される棒状製品で、断面方形を呈している。折損する2片が出土し、残存する長さ6.0cm+5.2cm・幅0.2cm・厚さ0.2cm・重さ4.4gである (B/図版27)。

6は板状の鉄製品である。残存する長さ2.15cm・幅2.15cm・厚さ0.2cm・重さ2.7gである。用途等は不明である (B/図版27)。

第26号住居跡 (第52・53図)

R-13グリッドに位置し、重複する第7号溝跡

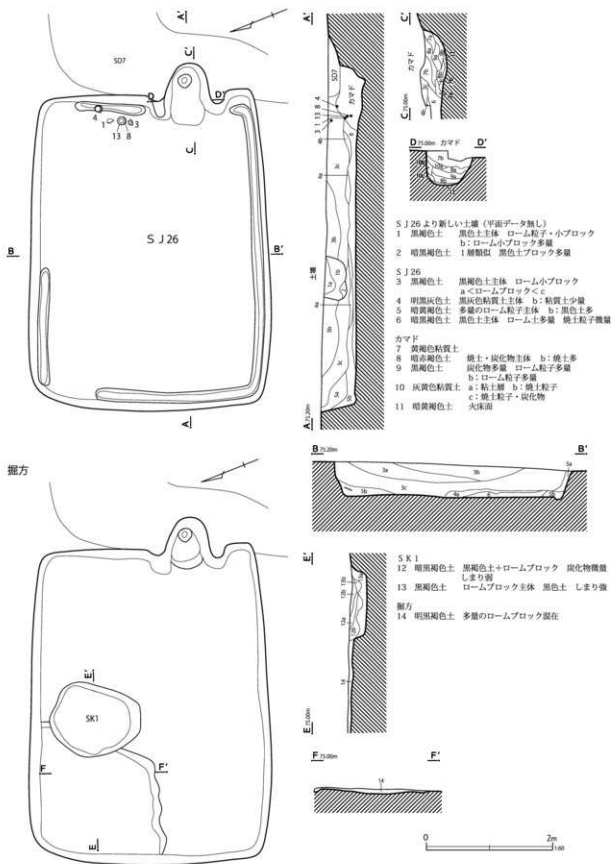


は新しい。断面観察から中央付近に別の土塊が所在しているが、平面確認では捉えられなかった。

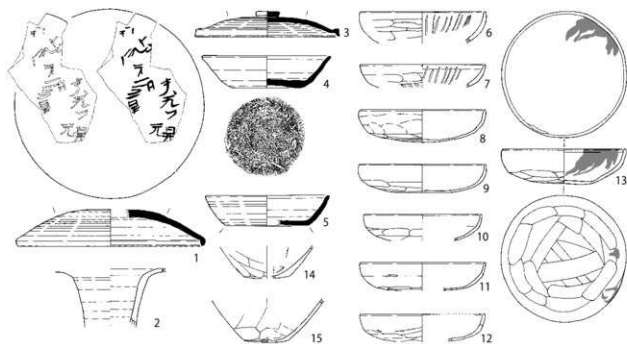
平面形態は長方形で、カマドを東壁の南半付近に付設する。主軸長5.00m、南北幅3.75m、確認面からの深さ0.55mを測り、主軸方位はN-112°

ーEを指す。床面には貼床が施されている。覆土は、壁際及び斜面上方の北側から堆積した状況が観察できる。

カマドは地山を掘り残した短い袖部と、壁外に大きく張り出す燃焼部が検出されている。燃焼部



第52図 第26号住居跡



第53図 第26号住居跡出土遺物

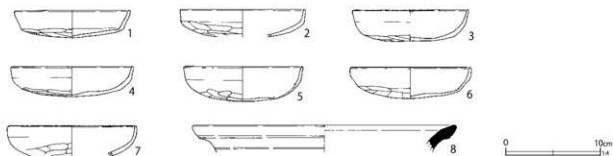
第24表 第26号住居跡出土遺物観察表 (第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	蓋	[3.9]		(19.4)	IK	20	普通	灰	木野産 墨書土器 転用硯 床面直上・No2・C	23・9
2	灰釉陶器	長頸瓶	[6.3]			IK	25	良好	灰白	遠江産 残存部に施釉箇所なし A・D	
3	須恵器	蓋	15.2	2.7		HJK	25	良好	褐灰	南北金産 つまみ径1.2cm 転用硯 No1	23・10
4	須恵器	坏	(13.4)	3.5	7.0	EHK	55	普通	灰黄	木野産 底部回転軸切り 底部周辺部埋れ置き No3	23・11
5	須恵器	坏	(12.8)	[3.2]	(8.4)	EIJ	40	良好	灰	南北金産 底部全面回転ヘラケズリ B・D	
6	土師器	坏	(12.9)	[3.3]		AIK	15	普通	橙	内面放射状暗文 A・C	
7	土師器	坏	(13.0)	[2.5]		HIK	15	普通	にじみ地	内面放射状暗文 D	
8	土師器	坏	13.0	3.5		HIK	100	普通	にじみ地	No5	24・3
9	土師器	坏	(13.2)	3.0		CIK	40	普通	橙	SK2・D	
10	土師器	坏	(12.2)	[2.8]		ACIK	25	普通	橙	B	
11	土師器	坏	(13.0)	3.0		HIK	20	普通	にじみ地	D	
12	土師器	坏	(13.0)	[2.9]		CHK	25	普通	明褐色	A	
13	土師器	坏	12.7	3.7		CIK	100	普通	にじみ地	内外面に油沁痕跡(燈明皿転用) No4	24・2
14	土師器	甕	[3.5]		5.0	ACIK	65	普通	にじみ地	底部ヘラケズリ A・C・D	
15	土師器	甕	[4.7]		4.6	CHIK	70	普通	にじみ地	底部ヘラケズリ カマド・A・D	

の先端付近には浅いピットが穿たれ、支脚が立てられていたことが予想される。全長0.96m、幅0.75mである。

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝は西壁北西隅付近と北壁東半部を除き全周する。北壁中央際から床下土壌のSK1がみついている。平面形態が不整形円形で、東西0.71m、南北1.44m、床面からの深さ0.24mである。北西の掘方は浅い土壌状に窪むが、壁の立ち上がり弱く、平面形態も暖味な形状で、床下土壌とは異なる。

遺物は、カマド北側の東壁際の床面直上に須恵器蓋・坏、土師器坏が集中し、第53図8と13は正位置に重ねられた状態で発見されている。時期は8世紀中葉頃と推定される。1は須恵器の蓋で、外面には複数の墨書文字がみられる。「元」「日」か「昇」の文字は判読できるが、文章の脈絡や文字配列の規則性などを認識できないことから、手習い文字の可能性はある。内面には研磨痕がみられ、墨が付着している。さらにひび割れた欠損面にも墨が浸透し、転用硯と推定される。



第55図 第27号住居跡出土遺物

第25表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第55図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	土師器	坏	(12.0)	2.9		ACIK	40	普通	明赤褐	カマド№8-B	24-4
2	土師器	坏	(13.0)	[2.9]		ACHIK	25	普通	橙	№4	
3	土師器	坏	11.8	3.3		CEIK	95	普通	橙	№2	24-5
4	土師器	坏	(12.6)	3.2		CIK	35	普通	橙	№5	
5	土師器	坏	12.3	3.7		CHIK	70	普通	にぶい 橙	№3	24-6
6	土師器	坏	12.5	3.3		CHIK	80	普通	にぶい 橙	№1-4	24-7
7	土師器	坏	(13.2)	[3.3]		CIK	15	普通	にぶい 橙	A	
8	須恵器	甕	(27.5)	[2.9]		CHIK	5	良好	橙	木野産 C	

第27号住居跡 (第54・55図)

S-13・14グリッドに位置する。平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長3.62m、南北幅2.86m、確認面からの深さ0.26mを測り、主軸方位はN-110° -Eを指す。覆土は、壁際から堆積した様子が観察できる。

カマドは2基が並んで設置されているが、同時に使用されたものではない。カマドAが新しく造り替えられたカマドで、造り付けの袖部と燃烧部・煙道部が検出されている。燃烧部の奥壁は住居壁とほぼ一致し、浅い煙道部が外方へ張り出している。全長1.20m、燃烧部長0.59m、燃烧部幅0.70m、煙道部長0.61m、煙道部幅0.65mの規模で、燃烧部と煙道部の幅に大差がない。覆土内から炭化材が検出されている。

南側のカマドBは、住居構築当初のカマドである。カマドAを造る際に推定される袖部が撤去され、燃烧部が埋め戻されている。燃烧部の底面は緩やかに傾斜して確認面に至る。長さ1.0m、住居壁内幅0.75m、住居壁外幅0.56mである。

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝は南壁の西半部～西壁～北壁～東壁北半部に沿って巡る。

南壁の壁溝端部に検出されたビットは、住居跡よりも新しい。

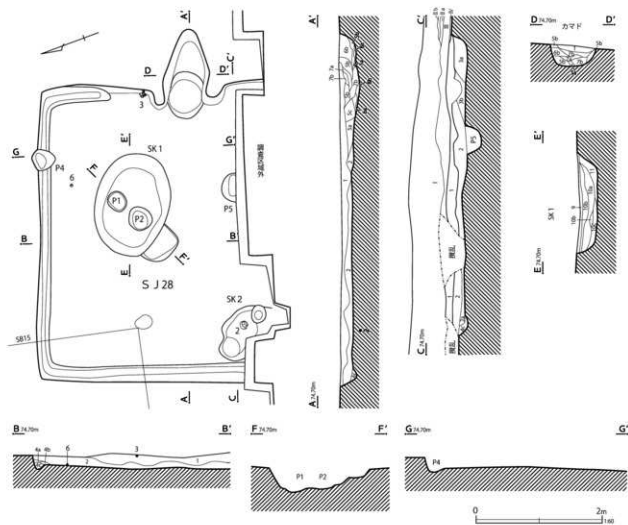
遺物の出土量は少ないが、床面直上から土師器坏が主体に見えられ、ほかの住居跡と土器組成が異なる。8世紀第3四半期頃と推定される。

第28号住居跡 (第56図)

T-14・15グリッドに位置し、南壁周辺が調査区域外にある。第15号掘立柱建物跡と重複する。

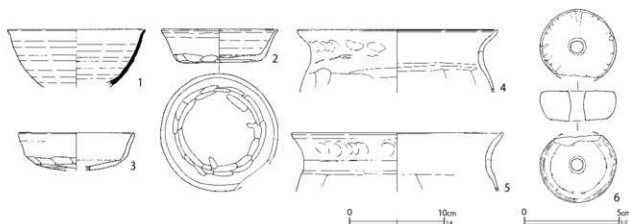
平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長4.57m、南北幅4.05m以上、調査区域壁面で確認された深さ0.49mを測り、主軸方位はN-112° -Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から堆積した様子を観察できる。

カマドは地山掘り残しの短い袖部と、住居壁外に大半が張り出す燃烧部が検出された。燃烧部の底面は住居壁の線上を跨いで長さ0.75mの浅いくぼみが確認され、カマド天井部の灰褐色土は先端まで達していない。焚き口を住居壁際、架け口を住居壁線上付近に推定できる。先端には天井が覆っていないことから、煙道部への接続部もしくは煙出し部と想定される。全長1.35m、最大幅0.76mである。



- S J 28
- I 黒褐色土 浅間A しまり面
 - II 黒褐色土 しまり強 a: 黒色土+浅間A多量 b: 黒色土+浅間A少量
 - III 暗黒褐色土 黒色土+ロームブロック多量 上面空欄(道路遺構か)
 - 1 黒褐色土 黒色土+ローム小ブロック多量 しまり面
 - 2 暗黒褐色土 黒色土主体+焼化ロームブロック 焼土粒子少量
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック主体+黒色土 b: ロームブロック多量
 - 4 黒褐色土 黒色土主体+ローム a>ローム>c

- カマド
- 5 灰褐色土 粘土主体+焼土・炭化物 a: 粘土層 a<器人物<c
 - 6 暗赤褐色土 焼土ブロック・黒色土 a<焼土ブロック<b
 - 7 赤褐色土 粘質土主体+焼土ブロック・炭化物多量 a: 焼土層
 - 8 黒色土 炭化物土主体 焼土粒子 焼土粒子極微量
- SK 1
- 9 暗黄褐色土 粘土 ローム土+黒色土 空欄
 - 10 黒褐色土 黒色土+ローム土 a<ローム<c しまり強
 - 11 暗黄褐色土 焼化ロームブロック主体 黒色土少量 しまり強



第56図 第28号住居跡・出土遺物

第26表 第28号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	高台付甕	(14.4)	[6.1]		EIK	25	良好	黄灰	木野産 A	24・8
2	土師器	環	12.0	3.5		AEIK	95	普通	灰黄褐	平底 底部回転系切り №3	
3	土師器	環	(12.0)	[4.0]		AEIK	25	普通	明褐	カマド №1	
4	土師器	甕	(21.0)	[6.6]		AHIC	20	普通	に似て黒	カマド	
5	土師器	甕	(22.2)	[6.3]		CHIK	25	普通	橙	カマド	

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝は西壁～北壁～東壁北東隅に沿って巡る。Pitは4基検出され、いずれも用途・性格は不明である。

床下土壌は2基みつかっている。SK1は楕円形の主域に張り出しをもつ形態で、東西長1.60m、南北長1.15m、張り出し部全長1.60m、床面からの深さ0.25mを測る。SK2は南西隅に位置する。平面形態は不整形で、長軸長0.94m、短軸長0.56mを測り、床面からの深さは0.1mと浅い。

遺物は、深身の須恵器碗、平底の土師器環、く字口縁の名残を残す土師器甕、石製紡錘車が出土し、9世紀第2四半期頃と推定される。

第56図6は石製紡錘車である。上径4.0cm・下径2.9cm・高さ1.6cm・孔径0.9cm・重さ37.8g、石材は滑石である(№2/図版29-4)。

第29号住居跡 (第57図)

V・W-22グリッドに位置する。グリッドピット以外に重複する遺構はないが、南東隅が調査区域外にある。

平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。長軸を主軸と直交する方向に向け、主軸長2.35m、南北幅2.90m、確認面からの深さ0.18mを測り、主軸方位はN-114°-Eを指す。床面には貼床が施されている。覆土は壁際から堆積した様子が観察できる。

カマドは、地山掘り残しの短い袖部と約二分の一が住居壁外に張り出した燃焼部が検出されているが、煙道部は不明である。両袖を繋ぐように数枚の片岩が並んで発見された。カマドの骨組み材として高架されていたものが崩落したものである。燃焼部の中央付近に浅いピット状の掘り込みがみられ、その奥側には片岩を突き立てた支脚が残存

していた。焚き口部は片岩列の内側、支脚付近が架け口部と推定される。規模は長さ0.85m、幅0.52mを測る。

柱穴は確認されていない。貯蔵穴はカマド右側の南東隅に付設されている。東西0.70m、南北0.65mの平面形態が不整形で、床面からの深さは0.05mと浅い。壁溝は南壁西半～西壁～北壁に沿って巡る。北半部に位置するSK1は床下土壌である。東西1.02m、南北0.82mの平面形態が楕円形である。底面から壁面には、暗灰色粘土が敷き詰められている。用途・性格は不明である。

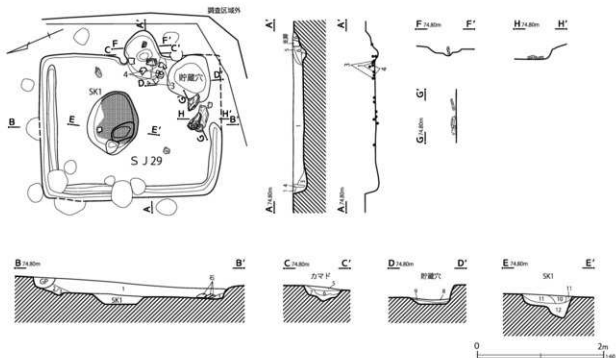
遺物は少ないが、9世紀第4四半期頃と推定される。南壁中央際の床面直上から片岩がまとまって出土し、被熱による赤化がみられる。カマドの袖強材に用いられた可能性もあるが、南壁にはカマドの痕跡がなく、用途・性格は明らかではない。

第30号住居跡 (第58図)

U・V-22グリッドに位置する。北部の広範囲が攪乱を受け、また北壁付近は調査区域外にある。重複する第134号土壌は第30号住居跡よりも新しい。

平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。長軸を主軸と直交する方向に向け、主軸長2.15m、南北現存幅2.53m、確認面からの深さ0.14mを測り、主軸方位はN-118°-Eを指す。床面には貼床が施され、その上面に黒褐色土が堆積する。

カマドは住居壁外に張り出した燃焼部が検出され、煙道部は不明である。奥壁が直線的な箱型の燃焼部で、長さ0.64m、幅0.61mである。掘方埋土直上の火床面には被熱による焼土化が認められる。住居底絶直後に天井が崩落し、火床面直上の堆積層は薄い。



SJ 29

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量 自然堆積
2 暗褐色土 ロームブロック少量
3 暗黄褐色土 壁跡腐土・ローム層主体+暗褐色土ブロック
4 黒色土 壁板の残骸か 炭化物粒子・ローム粒子微量

カマド

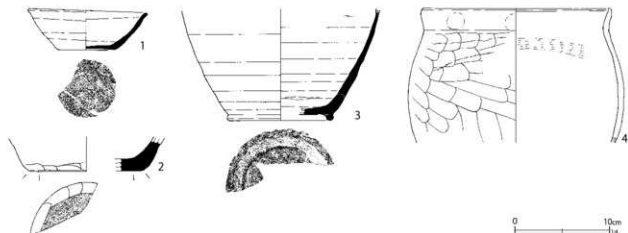
- 5 黒褐色土主体+灰褐色土粘質土 カマド天井部崩落土の残骸か
6 暗赤褐色土 焼土粒子・炭化物粒子やや多量 ローム粒子少量
7 暗黄褐色土+灰褐色土粘質土 焼土多量 炭化物粒子少量 掘方埋土

貯蔵穴

- 8 黒褐色土 ローム粒子多 埋戻しか
9 暗黄褐色土 ローム主体 埋戻しか

SK 1 (床下土層)

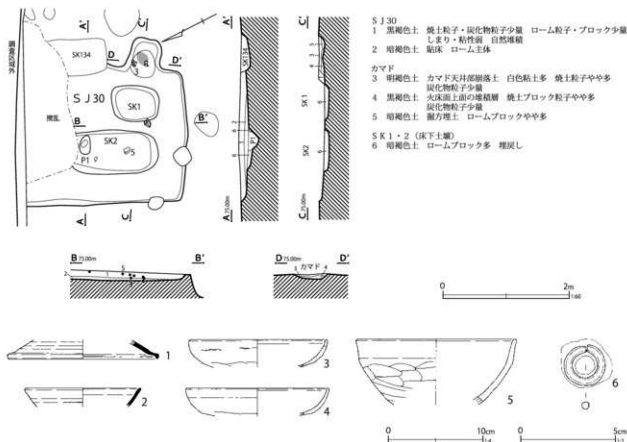
- 10 黒褐色土
11 暗褐色土 ローム粒子多 炭化物少量 底面側面に粘土貼付
12 暗灰褐色土 暗灰色粘土を敷き詰めた層



第57図 第29号住居跡・出土遺物

第27表 第29号住居跡出土遺物観察表 (第57図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	12.5	4.3	6.2	EIK	60	不良	灰	未野産 底部回転糸切り 二次的被熱・器面風化	No.4・6・B	24・9
2	須恵器	甕		[3.6]	(12.0)	EHIK	15	普通	灰白	未野産 平底 底部周辺ヘラケズリ	C	
3	須恵器	長頸瓶		[11.8]	(11.0)	DEHI	40	普通	灰	未野産 貼付高台	No.5・9・B・D	
4	土師器	甕	(19.8)	[14.3]		EHIK	25	普通	に記事項	No.7・8・カマド		



第58図 第30号住居跡・出土遺物

第28表 第30号住居跡出土遺物観察表 (第58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	蓋	(15.7)	[2.0]		EIK	10	良好	灰	木野座 D	
2	須恵器	環	(12.0)	[2.0]		EHJK	15	普通	灰	南北金産 カマド	
3	土師器	環	(14.5)	[2.9]		EIK	20	良好	橙	N ₆ 5	
4	土師器	環	(14.8)	[2.8]		EIK	15	普通	橙	カマド	
5	土師器	鉢	(17.0)	[6.9]		DHIK	20	普通	橙	N ₆ 7	

柱穴・貯蔵穴・壁溝は、確認されていない。

出土遺物は少ないが、8世紀第4四半期頃に推定される。

第58図6は古墳時代の装飾品の金環と酷似した製品であるが、金鍍金の痕跡はみられない。断面形は円形を呈している。外径2.2cm・厚さ0.4cm・重さ7.7gである (D/図版27)。

第31号住居跡 (第59～61図)

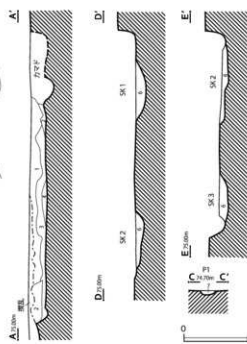
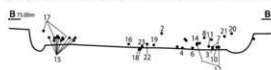
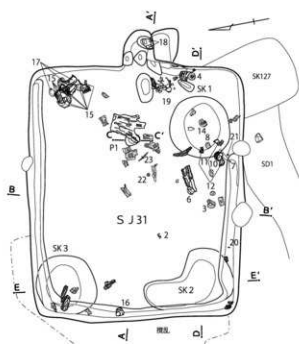
U・V-22グリッドに位置する。重複する第1号溝跡は、第31号住居跡よりも新しい。また新旧関係は明確ではないが、第127号土壌の方が新しいと推定される。

平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。

主軸長4.05m、南北幅3.42m、確認面からの深さ0.3mを測り、主軸方位はN-102°-Eを指す。床面には貼床が施されている。覆土には多量の炭化物や焼土が含まれている。また、壁際を中心とした床面直上付近から、多量の炭化材が発見されている。炭化材は径10cmに満たない丸太材が多く、火災によって焼け落ちた屋根材の垂木と推定される。炭化した柱材・桁梁材はみつかっておらず、焼失もしくは撤去されたものと推測される。

カマドは重複する2基が検出され、北側のカマドAが住居焼失段階まで使用されていたもの、南側のカマドBが住居構築当初のものである。

カマドAは住居壁外に張り出した燃焼部が検出

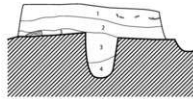
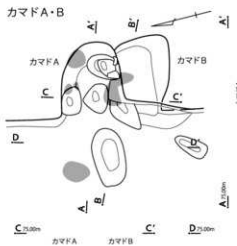


- S J 31
- 1 暗褐色土 炭化物多 焼土粒子・ローム粒子やや多
 - 2 暗褐色土 西畑付近のみブロック状に堆積 ローム粒子・ブロック多 炭化物・焼土少
 - 3 黒褐色土 2～3cm大の炭化物多量 焼土粒子・ブロック粒子やや多
 - 4 黒褐色土 床面直上の堆積 炭化材多 特に壁際から炭化材・焼土塊の検出多
 - 5 暗褐色土 2層構造 ロームブロック多

- SK 1～3 (床下土層)
- 6 暗褐色土 ロームブロック多量 黒色土ブロック少量 しまり・粘性弱 埋戻し

- F 1
- 7 黒色土 炭化物主体

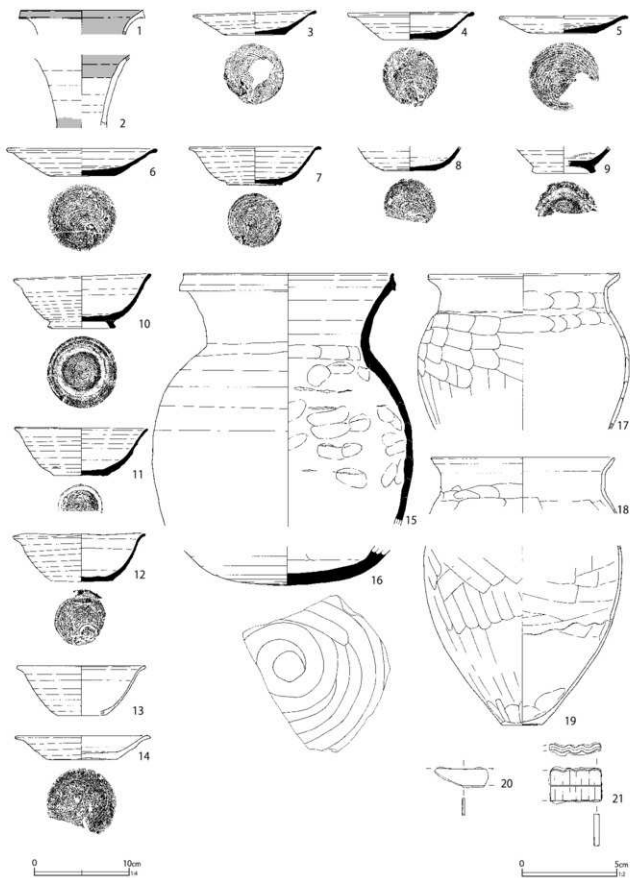
カマドA・B



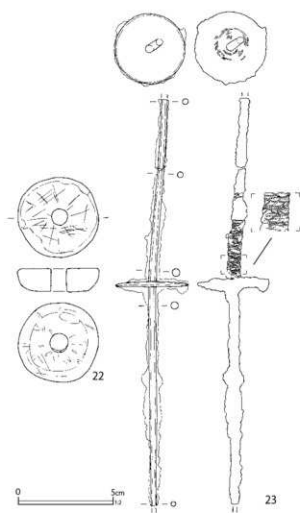
- カマドA
- 1 暗褐色土 少量の灰色粘土+ 焼土ブロック・ロームブロック 多量の炭化物・炭化物粒子 (火災の影響)
 - 2 暗褐色土 炭化物・ローム粒子多
 - 3 暗褐色土 炭化物多 ローム少量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子主体 しまり・粘性欠 埋戻し
 - 5 黒褐色土 炭化物多量 焼土粒子少量
 - 6 暗褐色土 カマド天井部崩落土 灰色粘土主体+ ロームブロック多
 - 7 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子少量 燃焼部堆積物 焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子 やや多
 - 8 暗褐色土 焼土ブロック炭化物粒子・ロームブロック少量
 - 9 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物粒子少量

- カマドB
- 10 暗褐色土 やや砂質 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
 - 11 暗褐色土 カマド天井部人為的破壊部 粘土粒子多 焼土粒子・炭化物粒子多
 - 12 暗褐色土 燃焼部堆積物 焼土粒子・炭化物粒子やや多
 - 13 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 14 暗褐色土 粘土質多 焼土粒子・ローム粒子・炭化物粒子少量 カマドB構築材崩落か カマドB面方埋土か ローム粒子少量

第59図 第31号住居跡



第60图 第31号住居跡出土遺物(1)



第61図 第31号住居跡出土遺物(2)

され、袖部・煙道部は不明である。天井部が原位置のまま留まり、壁線上付近にビット状の掘方が3基並ぶ。長さ0.7m、幅0.5mである。

カマドBも住居壁外に張り出した燃焼部が検出され、袖部・煙道部は不明である。北側がカマドAと重複し、覆土には壊された様子が観察できる。長さ0.62mで、カマドAとの差はみられない。

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝は南壁中央から西半部～西壁～北壁に沿って巡る。南東隅にSK1、南西隅にSK2、北西隅にSK3が位置する。いずれも床下から検出され、L字形のSK2は掘方、SK1・SK3は床下土壌もしくは掘方である。

出土遺物は、9世紀後葉頃に推定される。

第60図20は、板状鉄製品である。断面が長方形で、刀子状に刃をつけられた痕跡はない。残存する長さ2.8cm・幅0.9cm・厚さ0.1cm・重さ1.3gである(No3/図版27)。

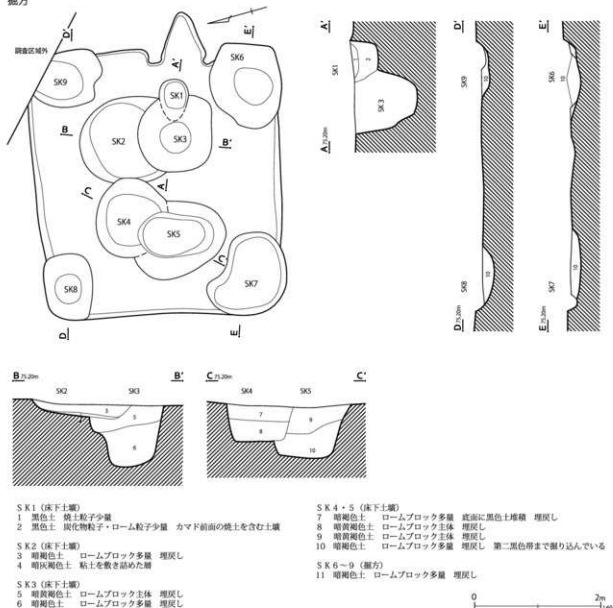
21は、波板状鉄製品である。残存する長さ1.7cm・幅2.6cm・厚さ0.3cm・重さ4.2gである。用途等は不明である(No2/図版27)。

第61図22は石製紡錘車である。上径4.2cm・下径3.0～3.2cm・高さ1.2cm・孔径0.9cm・重さ40.5g、

第29表 第31号住居跡出土遺物観察表(第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	灰桶陶器	長頸瓶	(12.9)	(2.7)		IK	10	良好	灰白	猿投産 B		
2	灰桶陶器	長頸瓶		(7.7)		IK	20	良好	灰白	猿投産 No34		
3	須恵器	皿	12.8	2.4	6.4	EHIK	70	普通	灰	木野産 底部回転糸切り 外面煤付着(二次的被熱)	No31・B	24-10
4	須恵器	皿	13.1	2.9	5.9	EHIK	100	良好	灰黄	木野産 底部回転糸切り 外面煤付着(二次的被熱)	No18	24-13
5	須恵器	皿	13.3	1.8	7.4	EHIK	70	良好	灰	木野産 底部回転糸切り カマド・B		24-11
6	須恵器	皿	(15.7)	2.9	7.0	EIK	60	良好	黄灰	木野産 底部回転糸切り 二次的被熱痕	No31・32	24-12
7	須恵器	杯	13.6	4.1	5.8	EHIK	100	良好	灰	木野産 底部回転糸切り	No27・29	24-15
8	須恵器	杯	(2.6)	(5.4)	(5.4)	EHIK	50	普通	明黄褐	木野産 底部回転糸切り 外面煤付着(二次的被熱)	No24	
9	須恵器	高台付埴	(2.8)	(6.8)	(6.8)	EHIK	30	良好	灰	木野産 貼付高台 底部回転糸切り 外面二次的被熱痕 粘土埋痕	No28	25-1
10	須恵器	高台付埴	14.3	5.5	7.2	HIKL	95	良好	灰	木野産 貼付高台(刺鉤) 底部回転糸切り	No23・30	
11	須恵器	高台付埴	14.2	(5.2)		DEHIK	50	普通	灰	木野産 貼付高台(刺鉤) 底部回転糸切り 底面二の字状の痕跡 No25・No26・A		25-2
12	須恵器	高台付埴	13.9	(5.4)		DHIK	90	普通	灰	木野産 貼付高台(刺鉤) 底部回転糸切り 底面二の字状の痕跡 No25・No26・A		
13	ワコ土師器	埴	(13.4)	5.3	(5.0)	EHIK	30	普通	明赤褐	木野産 貼付高台 底部回転糸切り 内外面にタール状の付着物	No21	25-3
14	ワコ土師器	埴	(13.8)	2.5	7.4	ACEHIK	60	普通	明赤褐	木野産 貼付高台 底部回転糸切り 内外面にタール状の付着物	No21	25-3
15	須恵器	甕	22.0	(26.7)		DEHI	70	普通	褐灰	木野産 No6・7・8・9・10・11・15・16・17・18・カマド		24-14
16	須恵器	甕		(4.2)		EHI	40	普通	灰	木野産 丸底(回転ヘラケズリ)	No35	
17	土師器	甕	(20.4)	(16.5)		DEHIK	60	普通	灰	No5・13・14・カマドB・D		
18	土師器	甕	(19.3)	(6.0)		DEIK	90	普通	明赤褐	No1・2・カマド・カマドB		
19	土師器	甕		(19.0)	4.2	EHIK	40	普通	灰	木野産 丸底(回転ヘラケズリ) 煤付着(二次的被熱)	カマドNo1	

掘方



第64図 第33号住居跡 (2)

ていた可能性がある。SK 1は床下土壇である。東西0.81m、南北0.78mの平面円形で、用途等は不明である。

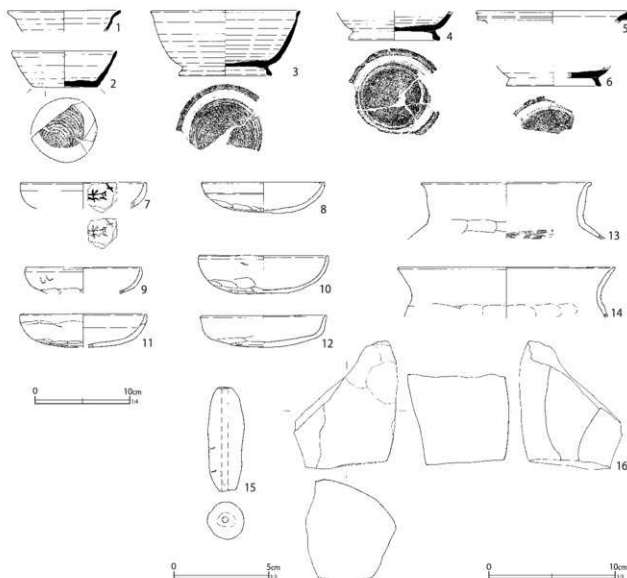
出土遺物は、9世紀第4前半期頃と推定される。
第33号住居跡 (第63~65図)

U-20・21グリッドに位置する。重複する第11号掘立柱建物跡、第1・8号溝跡は、第33号住居跡よりも新しい。北東隅は調査区域外にある。

平面形態は方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長4.14m、南北幅3.98m、確認面

からの深さ0.15mを測り、主軸方位はN-105° - Eを指す。床面には貼床が施され、その上面に黒褐色土が堆積する。

カマドは短い袖部と燃焼部が検出されている。燃焼部は深い掘り込みをもち、暗褐色土で0.2m前後埋め戻されている (カマド第7層)。カマドの構築材には暗灰褐色粘質土 (カマド第3・5層) が用いられ、この粘質土が途切れるカマド第2層の箇所が架け口にあたり、住居壁外に位置する。カマド前面部のカマド第4層が焚き口付近の堆



第65図 第33号住居跡出土遺物

第31表 第33号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	(12.0)	(2.3)		EIK	10	良好	灰	木野産 内面にタール状付着物 C		
2	須恵器	坏	(11.0)	3.9	7.0	EHIK	30	良好	に灰漬	木野産 底部周辺ヘラズリ A・床下土域1 SB1P1-2		
3	須恵器	高台付碗	(15.6)	6.9	(9.8)	EHIK	40	普通	灰白	木野産 貼付高台 底部回転糸切り カマド№2・カマド	25-5	
4	須恵器	高台付碗		(3.1)	(9.6)	EHIK	70	普通	灰白	木野産 貼付高台 底部回転糸切り №2・カマド	25-6	
5	須恵器	長頸瓶	(16.0)	(1.4)		EIK	10	良好	灰	木野産 A		
6	須恵器	高台付碗		(2.1)	(10.0)	EIK	10	普通	灰	木野産 貼付高台 底部回転糸切り D		
7	土師器	坏	(13.0)	(2.7)		HI	5	普通	橙	国書土器 A	25-7	
8	土師器	坏	(12.8)	3.3		EHIK	70	普通	橙	A	25-8	
9	土師器	坏	(12.0)	(2.8)		CIK	20	普通	橙	貯蔵穴		
10	土師器	坏	(13.6)	4.0		EHI	70	普通	に灰漬	国書土器 B	25-9	
11	土師器	坏	(13.1)	(3.5)		AHIK	40	普通	に灰漬	№1		
12	土師器	坏	(13.2)	(3.4)		EHIK	25	普通	に灰漬	貯蔵穴		
13	土師器	甕	(18.0)	(6.0)		CHIK	10	普通	橙	カマド・A		
14	土師器	甕	(22.7)	(5.4)		CHIK	15	普通	明赤褐	床下土域5		

積層と推定される。壁面の焼土化が顕著にみられる。長さ1.05m、最大幅0.73mである。

柱穴は確認されていない。検出されたPit 1～Pit 6には規則性がなく、グリッドピットであった可能性がある。貯蔵穴はカマド右側の南東隅に位置する。東西0.77m、南北0.78m、床面からの深さ0.20mの円形土壇である。壁溝は南壁の貯蔵穴西側～西壁～北壁～東壁北半部に沿って巡る。

貼床下から、SK 1～SK 9が検出されている。四隅のSK 6・SK 7・SK 8・SK 9は住居の掘方に相当する。カマド前面のSK 1には焼土が堆積し、SK 2の底面には粘土が敷き詰められている。深い掘方を持ち、埋め戻されたSK 3・SK 4・SK 5は掘立柱建物跡の柱穴を想起させるが、周囲に対応する遺構がなく、第33号住居跡の床下土壇と判断した。用途等は不明である。

遺物は、未野産須恵器の底部周辺ヘラケズリ杯と底径の広い高台付碗、土師器杯・甕が出土している。8世紀第4四半期頃に推定される。

第65図7の墨書土器は、土師器杯の口縁部内面に墨書きされているが、文字は判読できない。

15は土鍾である。長軸長5.5cm・最大径2.0cm・孔径0.3cm・重さ19.5g、色調はにぶい赤褐を呈している（No.4／図版29-2）。

16は砥石で、貯蔵穴から出土した。残存する長さ10.1cm・幅7.9cm・厚さ7.5cm・重さ718.1g、石材は砂岩である（図版29-3）。

第34号住居跡（第66図）

T-16グリッドに位置する。重複する第35号住居跡の方が新しく、第12号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長方形で、カマドを東壁に付設する。主軸長4.18m、南北幅3.45m、確認面からの深さ0.1mを測り、主軸方位はN-106°-Eを指す。床面には貼床が施されている。

カマドは短い袖部と住居壁外に大きく張り出した燃焼部が検出され、煙道部は不明である。燃焼

部中央に小ピットがあり、支脚の根元を埋めている痕跡と推定される。カマド前面には、浅い掘り込みがある。長さ1.30m、幅0.70mを測る。

柱穴は確認されていない。貯蔵穴はカマド右側の南東隅に位置する。東西0.4m、南北0.38m、床面からの深さ0.15mと小規模である。壁溝は西壁～北壁～東壁北半部に沿って巡る。

遺物は少ないが、石製白玉・鉄製刀子が出土している。9世紀第2四半期頃に推定される。

第66図6は石製白玉で、貼床下から出土している。径1.0cm・孔径0.3cm・厚さ0.6cm・重さ1.2g、石材は滑石である（図版29-2）。

7は鉄製の刀子である。刃部先端と茎部端部を欠損する。片刃の平刃で、刃毀れが顕著である。茎部の断面形は細長い台形を呈している。残存する長さ10.3cm・刃最大幅1.4cm・背幅0.3cm・残存重20.8gである（No.1／図版27）。

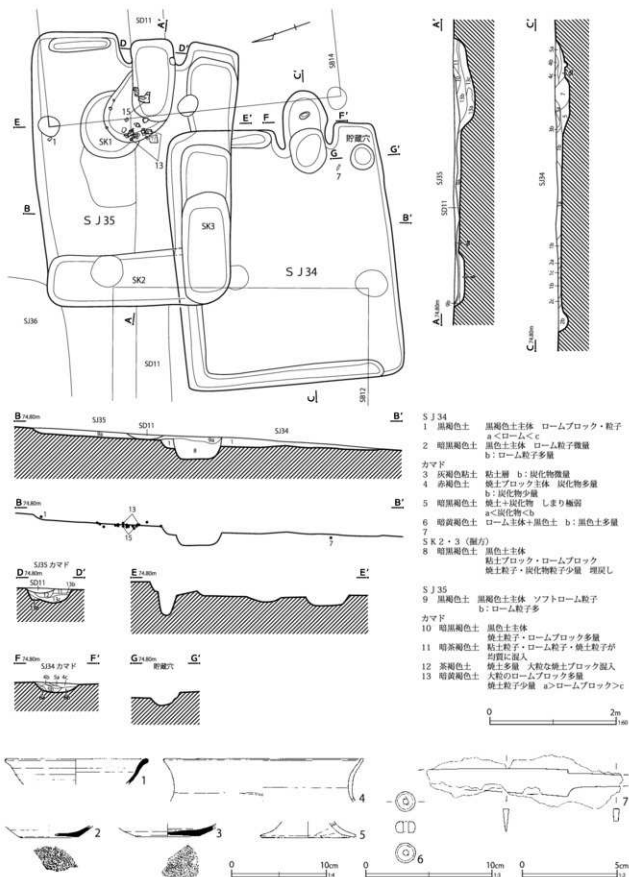
第35号住居跡（第66・67図）

T-16・17グリッドに位置する。重複する第34号住居跡よりも新しく、第11号溝跡よりも古い。また、第36号住居跡、第12・14号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

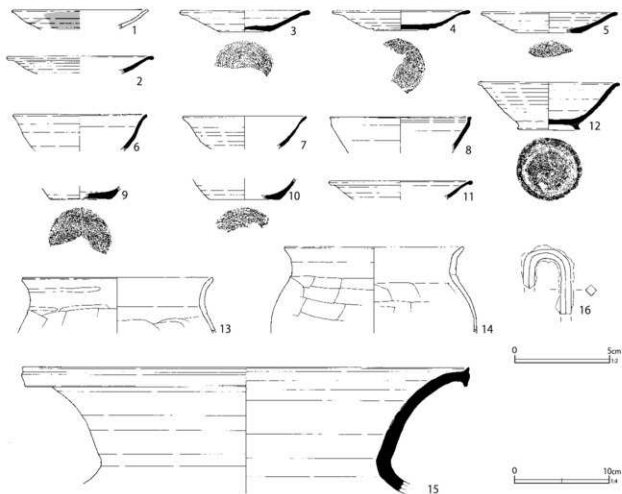
平面形態は長方形で、カマドを東壁の中央付近に付設する。主軸長4.36m、南北幅3.18m、確認面からの深さ0.1mを測り、主軸方位はN-107°-Eを指す。床面には貼床が施されている。

カマドは短い袖部と燃焼部が検出され、煙道部は不明である。燃焼部の奥壁は住居壁と一致する。住居の内側に長さ1.3m、幅0.7mと大きく掘削された掘方は、大半が埋め戻されている（第13層）。第10～12層の堆積範囲は袖部先端付近に留まっており、カマド自体は奥行の短いものであったと推測される。

柱穴・貯蔵穴は確認されていない。壁溝はカマド左側の東壁北半部にのみ検出されている。南壁・西壁に沿ったSK 3・SK 2は、壁に沿って幅の広い溝状に掘削された掘方である。SK 1は床下



第66図 第34・35号住居跡・第34号住居跡出土遺物



第67図 第35号住居跡出土遺物

第32表 第34号住居跡出土遺物観察表 (第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	高台付碗	(14.8)	[2.7]		EI	10	良好	黄灰	末野産 D	
2	須恵器	坏		[1.2]	(6.0)	HIK	15	普通	灰白	末野産 底部回転糸切り D	
3	須恵器	坏		[1.3]	(6.8)	HIK	10	普通	灰黄	末野産 底部回転糸切り	
4	土師器	甕	(21.0)	[4.6]		CHIK	20	普通	明赤褐	外面二次的被熱顯著 器面剥離 カマド	
5	土師器	台付甕		[1.7]	(10.0)	HIK	15	普通	橙	二次的被熱 器面剥離 附着物 D	

第33表 第35号住居跡出土遺物観察表 (第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰釉陶器	碗	(13.6)	[2.0]		EIK	20	良好	灰白	投げ捨て No.1	
2	須恵器	皿	(15.4)	[1.9]		HIK	15	良好	褐灰	末野産 転用碗か(磨痕) SJ34D・SJ35A	
3	須恵器	皿	(13.3)	2.2	(5.6)	AEHIK	30	不良	灰黄	末野産 酸化塩 底部回転糸切り D	
4	須恵器	皿	(14.4)	2.1	(5.8)	CIK	40	良好	灰黄	末野産 底部回転糸切り 転用碗か(内面磨痕) SK2	
5	須恵器	皿	(13.9)	2.2	(7.0)	HIK	20	良好	灰黄	末野産 底部回転糸切り D	
6	須恵器	高台付碗	(14.0)	[3.9]		EHIK	15	普通	灰	末野産 貼付高台 外面に火ダスキ痕 カマド	
7	須恵器	坏	(13.0)	[3.5]		CEHIK	20	普通	灰黄	末野産 A	
8	須恵器	碗	(14.8)	[4.9]		AEIK	10	良好	灰黄	末野産 SK 2	
9	須恵器	坏		[1.4]	(6.7)	ADEHIK	55	普通	灰黄褐	末野産 底部回転糸切り SK1・カマド	
10	須恵器	坏		[2.3]	(7.4)	HIK	20	不良	橙	末野産 酸化塩 底部回転糸切り A	
11	須恵器	皿	(15.0)	[2.0]		HIK	10	普通	褐灰	末野産 酸化塩 内外面黒色化 B	
12	須恵器	高台付碗	(14.5)	5.0	5.7	HIK	35	不良	灰黄	末野産 酸化塩 貼付高台 底部回転糸切り SK2	
13	土師器	甕	(20.0)	[5.9]		AHIK	40	普通	灰	No.5・13・A	
14	土師器	甕	(18.8)	[9.2]		AHIK	20	普通	灰	D	
15	須恵器	甕	(47.0)	[13.4]		EHIK	20	普通	灰	末野産 No.3・9	

土墳で、上面の貼床直上に遺物が集中している。9世紀第4四半期頃に推定される。

第67図16は「U」字形に湾曲する棒状鉄製品である。両端を欠損する。断面形が菱形を呈する。残存する長さ3.4cm・幅0.55cm・厚さ0.55cm・重さ5.9gである。用途は不明である（図版27）。

第36号住居跡（第68図）

T-16グリッドに位置する。重複する第35号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形態は長方形で、カマドを北壁に付設する。中平遺跡では数少ない北カマドの住居跡である。主軸長2.36m、東西幅3.90m、確認面からの深さ0.3mを測り、主軸方位はN-22°-Eを指す。覆土は黒褐色土（第1層）と暗灰褐色粘土（第2層）の入り乱れた堆積状況から、埋め戻された可能性が高い。床面には貼床が施されている。

カマドは短い袖部と住居壁外に張り出した燃焼部が検出され、煙道部は不明である。最下層に焼土と粘土を多く含む茶褐色土（第3層）が堆積し、その上面には入り乱れた住居の覆土がある。住居廃絶時に、カマドも含めて埋戻し行為が想定される。規模は長さ0.9m、幅0.76mである。

柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されていない。東壁際の浅い窪みから、土師器残片が集中して出土している。9世紀前葉頃と推定される。

第68図7は鉄製刀子である。刃先・茎の両端を欠損する。残存する長さ6.9cm・刃幅0.9cm・背幅0.3cm・残存重10.7gである。刃部は平刃で、茎の断面形は台形を呈する（No.2／図版27）。

8は砥石である。残存する長さ16.6cm・幅4.9cm・厚さ3.7cm・重さ436.33g、石材は片岩である（No.1／図版29-3）。

第37・38号住居跡（第69～71図）

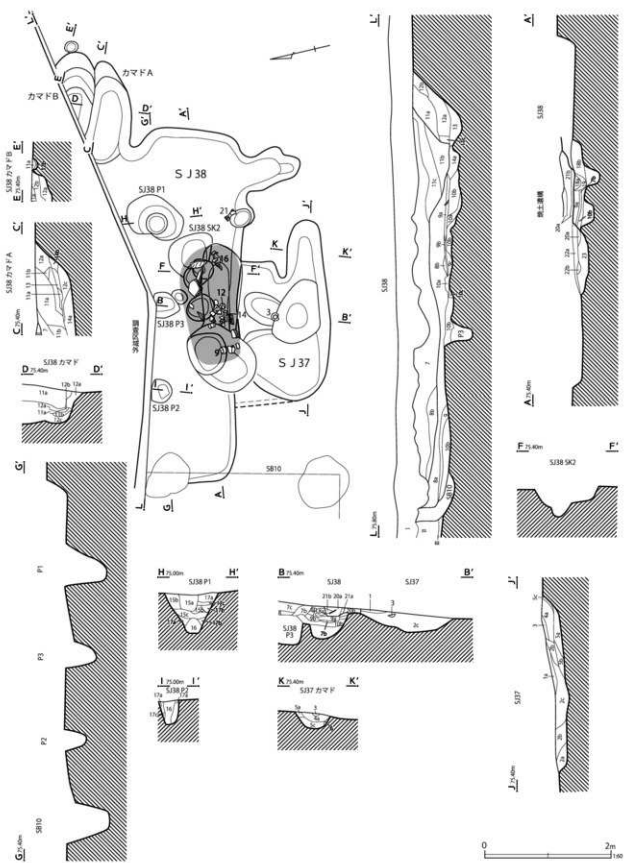
重複する2軒の住居跡で、S-16・17グリッドに位置する。第37号住居跡と重複する第38号住居跡南壁に沿って焼土が広範囲に広がる焼土遺構が所在し、2軒の住居跡の新旧関係は明確ではな

い。しかし、焼土遺構の西側に第37号住居跡の覆土が堆積していないことから、第38号住居跡の方が新しい可能性が高い。また、第38号住居跡は第10号掘立柱建物跡よりも新しい。

第38号住居跡は平面形態が方形で、北半部は調査区域外にある。カマドを東壁に2基付設する。主軸長5.58m、南北残存幅2.39mを測り、主軸方位はN-105°-Eを指す。ほかの住居跡に比べて、大型の住居跡である。覆土の堆積状況から、当初は第9層を貼床とした住居が構築され、カマドAが対応する。その後住居跡の建て替えが行われ、第8a層を埋め戻し、カマドBに造り直されている。ただし、建て替えられた住居跡の床面は明確には捉えられていない。調査区域壁面で確認された深さは、造り直された住居が0.37m、構築当初が0.72mである。南東隅の張り出しは、グリッドピットの痕跡である。

主柱穴はPit 1・Pit 2・Pit 3が相当し、南壁に平行して3本が並んでいる。中平遺跡では柱穴が確認された唯一の住居跡で、本来は8本柱穴の住居跡と推定される。新旧いずれの住居に伴う柱穴か確認はできなかったが、構築当初の住居に対応する可能性が高い。主柱穴の規模は、Pit 1が長さ0.9m×短径0.66m×床面からの深さ0.6m、Pit 2が東西0.36m×南北0.34m×床面からの深さ0.32m、Pit 3が東西0.41m×南北0.44m×床面からの深さ0.41mである。柱間距離は、Pit 1-Pit 3=1.29m・Pit 3-Pit 2=1.36mを測る。土層断面から、Pit 1では柱取扱痕（第15層）・柱痕（第16層）・柱掘方充填層（第17層）、Pit 2では柱痕（第16層）・柱掘方充填層（第17層）が確認されている。

造り直されたカマドBは大半が調査区域外にあり、燃焼部の一部が検出されている。燃焼部先端に接して、焼土と灰褐色粘土が堆積する浅いピットが位置している。煙出しのピットである可能性が高いが、カマドBとの構造的な関係性を明らかに



第69図 第37・38号住居跡

SJ37

- 1 暗茶褐色土 焼土粒子多量 粘土粒子少量
2 黒褐色土 大粒ロームブロック多量 焼土小ブロック少量
a>ロームブロック>c

カマド

- 3 粘土層 焼土粒子微量
4 赤褐色土 焼土粒子・小ブロック多量 a>焼土>b
5 暗茶褐色土 黒色土+ロームブロック多量 a>ロームブロック>b
6 暗茶褐色土 黒色土主体+ローム粒子少量

SJ38

- 7 黒褐色土 黒色土主体 ロームブロック・焼土粒子 a<b<c
8 暗茶褐色土 多量の炭化粘土粒子 少量の焼土粒子・炭化物 b: 粘土粒子少量
9 黒褐色土 腐食・ロームブロック+粘土主体 直上に炭化物層
b: 焼土粒子微量 c: 粘土と黒色土が縞状に堆積
10 暗茶褐色土 腐方埋土 ロームブロック主体 黒色土
a<ロームブロック<c b: 焼土粒子

カマド

- 11 灰褐色粘土 粘土主体 焼土小ブロック・炭化物粒子少量
焼土小ブロック・炭化物粒子 a<b<c
12 赤褐色土 焼土主体 a: 焼土層 b: 粘土・炭化物粒子混入
13 暗茶褐色土 炭化物主体 粘土・焼土
14 暗茶褐色土 腐方埋土 黒色土+ロームブロック・焼土ブロック
・炭化物ブロック多量 b: 焼土ブロック少量

SJ38 P1・2

- 15 黒褐色土 柱状腐食 黒色土+ロームブロック混在 a<ロームブロック<c
16 黒褐色土 柱腐 ローム粒子微量
17 暗茶褐色土 ロームブロック+黒色土 a: ロームブロック主体 a<黒色土<c

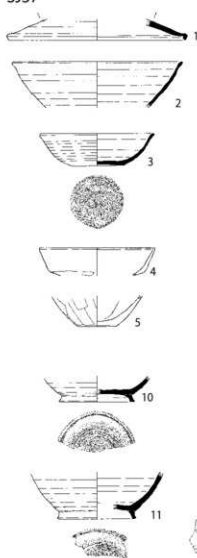
SJ38 SK2

- 18 灰褐色土 粘土を縞状に堆積 黒色土・ローム土を縞状に堆積
a: 粘土層主体
19 黒褐色土 ローム粒子多量

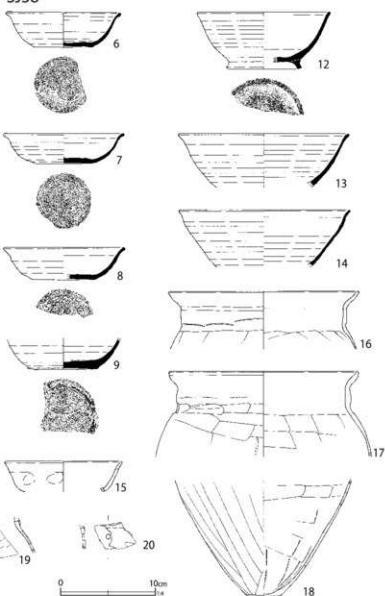
焼土遺構

- 20 灰褐色土 a: 粘土層 b: 粘土+黒色土+焼土粒子
21 赤褐色土 焼土粒子・ブロック主体 b: 焼土少量
22 黒褐色土 黒色土主体 炭化物多量 焼土粒子少量 a<炭化物<b
23 暗茶褐色土 粘土・焼土・炭化物・ローム小ブロック混在 埋戻し

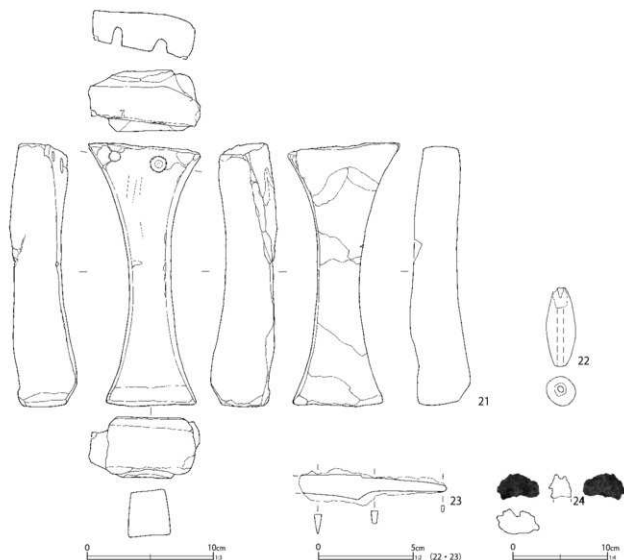
SJ37



SJ38



第70図 第37・38号住居跡出土遺物(1)



第71図 第37・38号住居跡出土遺物（2）

第35表 第37号住居跡出土遺物観察表（第70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	蓋	(19.6)	[2.2]		AIK	5	良好	灰白	本野産 A		
2	須恵器	碗	(18.0)	[4.9]		AEHIK	20	普通	灰黄	本野産 SK1・SJ38A		
3	須恵器	環	12.0	3.4	5.7	EHIK	95	良好	褐灰	本野産 底部回転糸切り №1		
4	土師器	環	(12.0)	[3.0]		HIK	15	普通	にがね色	B		
5	土師器	甕		[3.3]	(4.0)	CIK	25	普通	にがね色	底部ヘラケズリ SK1		

にすることはできなかった。恐らくは、煙出しピットの底部付近が検出されたものであろう。煙出し部まで含めた残存長1.47m、幅0.65m以上である。カマドAは、短い袖部と燃焼部が検出されている。奥壁は斜め上方に立ち上がり、壁に沿って焼土・炭化物を主体とする土層が堆積していることから、上端が煙道部もしくは煙出し部へと繋が

っていくようである。底面の中央付近に残るわずかな高まりは、支脚の土台の痕跡と推測される。長さ1.6m、幅0.7m、掘方面までの深さ0.75mを測る。貯蔵穴・壁溝は検出されていない。

遺物は、底部回転糸切り離しの須恵器環・土師器コノ字甕・鉄製刀子・土錘が出土し、用途不明の二次的に穿孔された土師器甕破片2点もある。

第36表 第38号住居跡出土遺物観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
6	須恵器	坏	(11.8)	3.7	(6.4)	HIK	35	良好	灰	未野産 底部回転系切り 焼土遺構	26-2
7	須恵器	坏	(12.6)	3.2	5.9	EIK	60	良好	灰白	未野産 底部回転系切り 底面の一部に擦れ痕	
8	須恵器	坏	12.7	3.4	6.4	EIK	20	普通	灰	未野産 底部回転系切り	
9	須恵器	高台付埴		[3.3]	(7.4)	BEIK	30	良好	灰黄	未野産 貼付高台剥離後研磨 内面磨痕(転用痕か) 焼土遺構№19	
10	須恵器	高台付埴		[2.7]	(8.0)	EIK	40	良好	灰	未野産 貼付高台 底部回転系切り	25-12
11	須恵器	高台付埴		[4.9]	(8.3)	HIK	15	不良	灰白	未野産 酸化塩 貼付高台 底部回転系切り	
12	須恵器	高台付埴	(14.0)	6.0	(8.1)	HIK	40	不良	橙	未野産 酸化塩 貼付高台 底部回転系切り 焼土遺構№4	
13	須恵器	埴	(18.0)	[5.8]		EHIK	10	普通	灰白	未野産(高台付)	
14	須恵器	埴	(18.0)	[6.1]		CDHIK	10	普通	灰黄	未野産 焼土遺構№7	
15	土師器	坏	(12.2)	[3.2]		CIK	20	普通	橙	平砥 焼土遺構	
16	土師器	甕	(20.0)	[6.1]		EHIK	30	普通	明赤褐	焼土遺構№1・2	
17	土師器	甕	(19.8)	[9.1]		CHIK	50	普通	明赤褐	焼土遺構	
18	土師器	甕		[12.3]	3.6	HIK	80	普通	橙	底部ヘラケズリ A	
19	土師器	(甕)				CHIK		普通	橙	破片転用品 焼成後穿孔 焼土遺構	
20	土師器	(甕)				CHIK		普通	明赤褐	破片転用品 焼成後穿孔 孔径0.4×0.5cm 復付着 D	

また大型砥石に試みられた穿孔は、2孔とも貫通していない。

第71図21は砥石である。上端に2箇所の穿孔が試みられているが、貫通していない。長さ20.85cm・幅8.7cm・厚さ4.8cm・重さ701.2g、石材は凝灰岩である(Na1/図版29-3)。

22は土錘である。上端を欠損し、長軸長4.2cm・最大径1.6cm・孔径3.0cm・重さ8.97g、色調はにぶい橙である(図版29-2)。

23は鉄製刀子である。刃部中位から基部が残存する。刃部は平刃、基部の断面形は台形を呈する。残存する長さ7.8cm・刃幅1.0cm・背幅0.35cm・重さ10.5gである(図版27)。

24は碗型甕で、カマドから出土している。下面が球面状に湾曲する。残存する長さ2.5cm・幅4.5cm・厚さ2.5cm・重さ24.5g、磁着する。

第37号住居跡は、平面形態が南北に長軸を向け

る長方形と推定され、カマドを東壁に付設する。主軸推定長2.24m、南北残存幅1.46mを測り、主軸方位はN-103°-Eを指す。カマドは南東隅に位置し、短い左袖部と燃焼部が検出されている。被熱によって赤化した粘土層がわずかに残存している。長さ0.95m、幅0.58mである。柱穴・貯蔵穴・壁溝は検出されていない。

焼土遺構は第38号住居跡の南壁に沿って、東西1.9m、南北0.9mの範囲に焼土が広がっている。掘り込みは第38号住居跡床面まで達しているが、明確な立ち上がりが見えられず、範囲は不明瞭である。被熱面はみられないが、炭化物層・焼土層・粘土層の堆積が確認されたため、遺構として認識した。用途等は不明である。

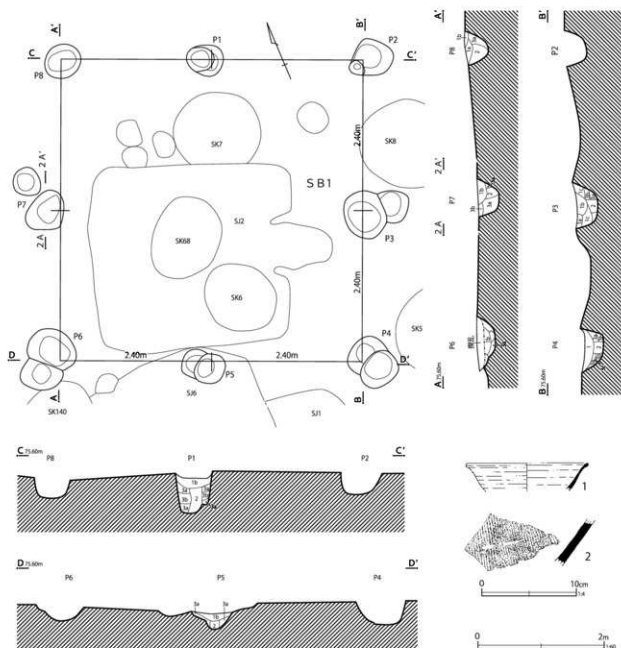
2軒の住居跡と焼土遺構の遺物は混入が激しく、9世紀第4四半期を中心とした頃と推定される。

2. 掘立柱建物跡

中平遺跡の発掘調査では、15棟の掘立柱建物跡が発見された。第8号掘立柱建物跡を除き、傾斜が緩くなる標高77m以南に分布している。2間×2間の側柱建物を中心で、第10号掘立柱建物跡が唯一の縦柱建物跡である。

第4号掘立柱建物跡は西面と南面・北面の三面

に廂をもつ大型建物跡で、重複する第5号掘立柱建物跡との先後関係が把握されている。第9号掘立柱建物跡は西面に廂が付設され、第7号掘立柱建物跡は桁行4間の建物跡である。いずれの掘立柱建物跡も長軸が南北方向を向き、等高線と直交する。廂をもつ第4・9号掘立柱建物跡は西側を



S B 1
 1 黒褐色土 柱穴痕跡 黒色土主体 ローム土・粒子 b: ローム土の混入が殆どない
 2 暗黒褐色土 柱痕 黒色土主体 僅かにローム粒子混入
 3 黒褐色土 柱側方充填 黒色土主体+ロームブロック a: ロームブロック少量 b: ロームブロック多量 c: ロームブロック主体

第72図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物

第37表 第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏	(12.8)	[3.0]		EIK	20	良好	灰	Pit5 未野産		
2	須恵器	甕				EHIK		普通	灰	Pit3 未野産		

正面とする建物跡であり、長軸方向を揃えたほかの掘立柱建物跡も同様の配置と推定される。

第1号掘立柱建物跡 (第72図)

S・T-17・18グリッドに位置し、第2・6号

住居跡と重複する。

2間×2間の側柱建物跡である。南北軸の方位はN-23°-Eを指す。規模は、南北4.80m×東西4.80m、面積23.04㎡である。柱間距離は、南

北方向・東西方向ともに2.40mに統一されている。柱穴の平面規模は、径0.5～0.8mと均一的である。底面標高は地面の傾斜に沿って、南側が低くなる。Pit3～Pit7に隣接して、柱穴よりも浅いピットが存在する。斜面地に位置し、斜面上辺のPit8・Pit1・Pit2には隣接ピットが無いことから、第1号掘立柱建物跡は床持ちの建物と推定され、隣接ピットが大引きなどの床に関連する部材を支えた束柱の機能も予想される。

柱穴覆土の堆積状況から、柱が腐朽しやすい地面付近で抜き取られたと推定され、第1層は柱拔取痕が埋没した土層である。第2層は柱痕、第3層は黒色土とロームブロックの混合度合いの異なる土壌が柱掘方に充填されている。

遺物は、図示したほかにPit3～Pit8から末野産の須恵器片（坏・高台付埴・蓋・甕）、土師器甕片が出土している。

第2号掘立柱建物跡（第73図）

U-19グリッドに位置する。第1・2号溝跡に削平され、重複する第7号住居跡との新旧関係は明確ではない。

2間×2間の側柱建物跡である。長軸を等高線と直交する南北方向に向け、長軸方位はN-7°-Eを指す。規模は、南北4.65m×東西3.60m、面積16.74㎡である。柱間距離は、南北方向が2.16m・2.46mと異なるが、東西方向は1.80mに統一されている。柱並びは、南辺・西辺の中間柱がやや外側に張り出す。

柱穴の規模は径0.5～0.6m、確認面からの深さは0.7～0.9mで、小径の柱穴に対し、しっかりと掘り込みをもつ。柱穴の底面標高は東西方向がほぼ水平であるのに対し、南北方向は地形の傾斜に沿って北から南に向かって下がる。

覆土は、概ね3層に分層される。上層の第1～3層は柱拔取痕の埋没層で、柱の抜取りにはある程度掘り返されている。第4層は柱痕である。下層の第5層は柱掘方充填土で、黒褐色土

とロームの混入量が異なる土壌が埋められている。

出土遺物は少なく、Pit1から出土した土師器台付甕の脚部を図示した（第73図1）。

第3号掘立柱建物跡（第74図）

R・S-18グリッドに位置する。

2間×2間の側柱建物跡である。南北軸方位はN-19°-Eを指す。規模は、東西4.50m×南北4.50m、面積20.25㎡である。柱間距離は、東西方向・南北方向ともに2.25mに統一され、柱並びは整然としている。

柱穴の規模は、径0.6m前後である。底面標高は東西方向がほぼ水平なのに対し、南北方向は地形の傾斜に沿って北から南に下がっている。

Pit1・Pit3・Pit4・Pit7・Pit8・Pit9に近接して、ほぼ同規模のピットが存在する。斜面地に立地する建物跡であることから床持ちの可能性が高く、束柱的な機能を想定することができる。一方、建て替えの可能性もあり、断定することは難しい。

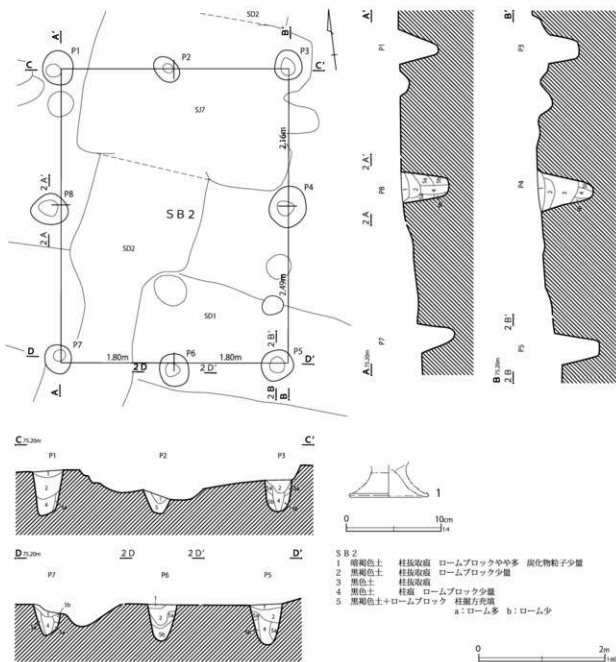
覆土は、概ね柱拔取痕の埋没層（第1層）・柱痕（第2層）・柱掘方充填土層（第3層）に分層される。柱痕はPit6で確認されているに過ぎない。また柱拔取痕が柱穴の下層まで及んでいることから、柱穴をほぼ掘り返して柱を抜き取ったことが予想される。

遺物は、Pit5・Pit7から末野産の須恵器坏・甕、土師器甕が出土しているが、いずれも細片で図示し得ない。

第4号掘立柱建物跡（第75～80図）

T・U-18・19グリッドに位置し、地形の傾斜が緩やかな箇所を占地している。重複する第3・5・8号住居跡との新旧関係は、第8号住居跡・第5号住居跡→第4号掘立柱建物跡→第3号住居跡の順に新しくなる。

第4号掘立柱建物跡は柱穴の規模が大きな建物跡で、同規模の柱穴を有する第5号掘立柱建物跡と重複する。柱穴同士の重複関係から、第4号掘立柱建物跡は第5号掘立柱建物跡よりも新



第73図 第2号掘立柱建物跡・出土遺物

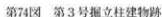
第38表 第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第73図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	土師器	台付甕		[3.3]	(8.5)	EHIK	30	普通	明赤褐	Pit1 二次的流熱・赤色化		

しい。長軸方位と南辺同士をほぼ合致させ、また第5号掘立柱建物跡の北西隅柱穴が、第4号掘立柱建物跡Pit22と同位置となることから、第4号掘立柱建物跡は第5号掘立柱建物跡の規模を拡大して建て直されることが予想される。

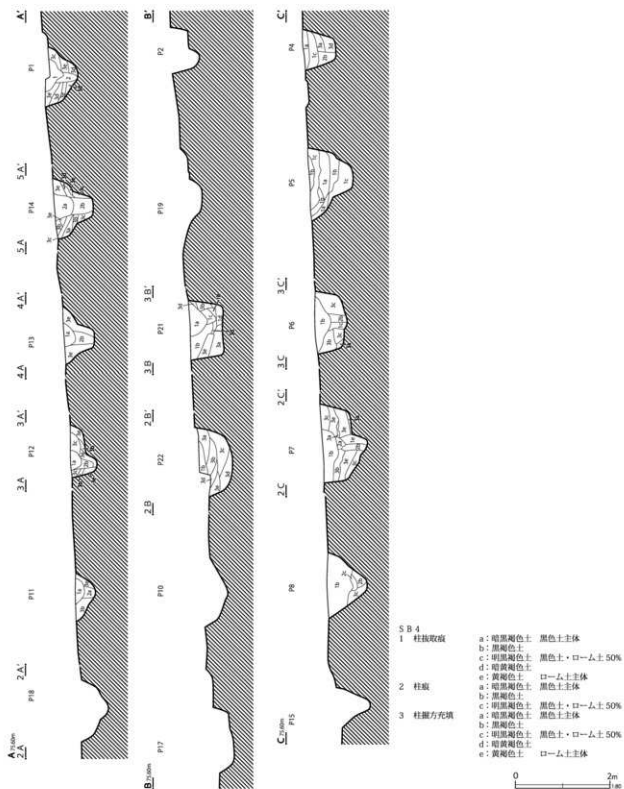
3間×2間の側柱の身舎に、北面・西面・南

面に廂が付設された5間×3間の建物跡である。長軸を南北方向に向け、長軸方位はN-13°-Eを指す。廂の付設位置から、正面を西に向ける建物跡である。総規模は、南北14.10m×東西7.95m、面積112.095㎡である。身舎の規模は、南北8.55m×東西5.40m、面積46.17㎡である。柱間距離は、

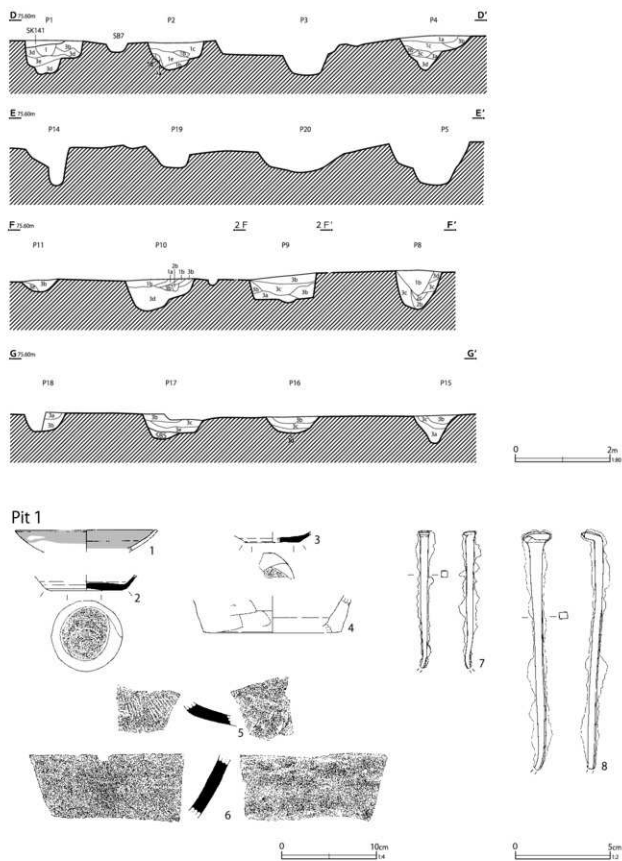


身舎の隅柱はL字形の平面形態で、柱穴は直線的な柱配置である。身舎の柱穴は、長軸長1.2～1.8m×短軸長0.7～1.0m、深さ0.6～0.9mを測る。柱の根部にはさらに0.2mほどの掘り込みが付随する。廊の柱穴は、長軸長0.9～1.2m×短軸長0.7

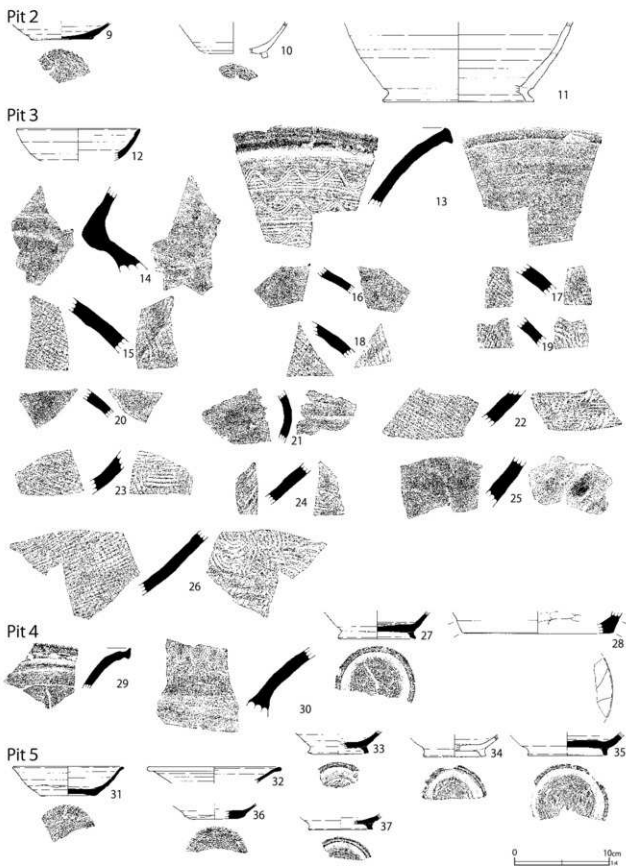
覆土は、柱拔取痕の埋没層・柱痕・柱掘方充填層に分層される。柱痕土層は、柱穴底面に掘り込まれたピット底面まで達している。柱掘方には、黒色土とロームの混合率を調整した土壌が互層に突き固められている。また、柱拔取痕が柱穴の中位から底面付近まで認められ、特に隅柱は深い。



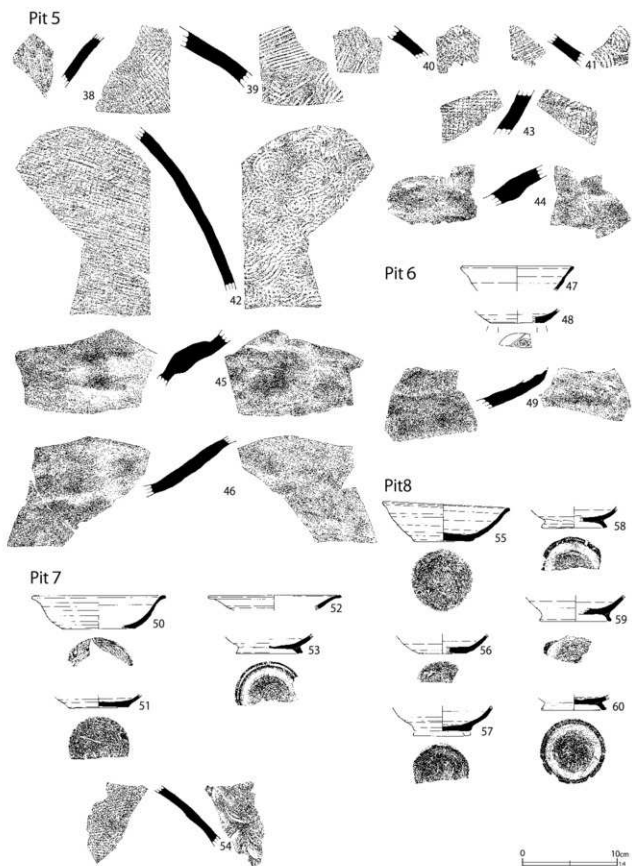
第76图 第4号掘立柱建物跡(2)



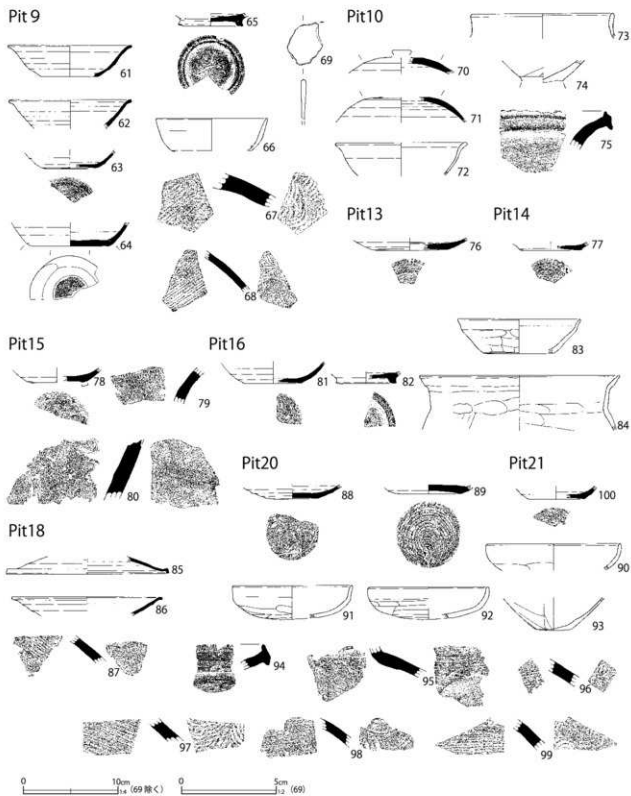
第77图 第4号掘立柱建物跡(3)・出土遺物(1)



第78图 第4号掘立柱建物跡出土遺物(2)



第79图 第4号掘立柱建物跡出土遺物(3)



第80图 第4号掘立柱建物跡出土遺物(4)

第39表 第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第77～80図)

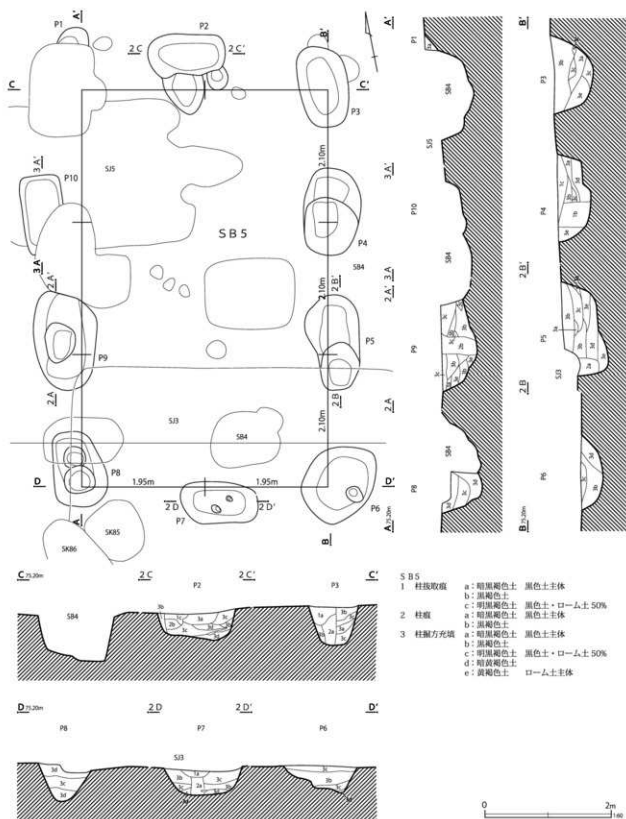
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	灰陶器	皿	(14.7)	[2.4]		IK	20	良好	灰黄	Pit1 遠江産	
2	須恵器	坏		[1.7]	7.5	EHIK	80	普通	灰	Pit1 木野産 底部周辺ヘラケズリ	
3	須恵器	坏		[1.1]	(6.0)	HIK	15	普通	灰黄	Pit1 木野産 底部周辺ヘラケズリ	
4	陶器	甕		[3.9]	(14.6)	EHIK	10	普通	灰白	Pit1 在地産 底面ヘラケズリ 二次的焼熱・赤色化・器面風化	
5	須恵器	甕				EHIK		良好	灰	Pit1 木野産	
6	須恵器	甕				EHIK		良好	灰黄	Pit1 木野産	
9	須恵器	坏		[1.8]	(6.4)	HIK	25	良好	褐灰	Pit2 木野産 底部回転糸切り 底面一部に擦痕	
10	須恵器	高台付埴		[3.3]		ADEHIK	20	普通	橙	Pit2 貼付高台 底面回転糸切り	
11	陶器	高台付鉢		[8.4]	(16.0)	AEHIK	30	普通	褐灰	Pit2・Pit22 貼付高台 二次的焼熱・器面風化顕著	
12	須恵器	坏	(13.0)	[3.4]		IK	15	普通	に灰黄	Pit3 木野産	
13	須恵器	甕				EIK		良好	黄灰	Pit3 木野産	
14	須恵器	甕				IK		良好	灰	Pit3 木野産	
15	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit3 木野産	
16	須恵器	甕				IK		良好	灰	Pit3 木野産	
17	須恵器	甕				IK		良好	灰	Pit3 木野産	
18	須恵器	甕				CEIK		良好	灰	Pit3 木野産	
19	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit3 木野産	
20	須恵器	甕				EHIK		良好	灰	Pit3 木野産	
21	須恵器	甕				HIK		良好	灰	Pit3 木野産	
22	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit3 木野産	
23	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit3 木野産	
24	須恵器	甕				EHIK		良好	灰	Pit3 木野産	
25	須恵器	甕				IK		良好	灰	Pit3 木野産	
26	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit3・Pit5 木野産	
27	須恵器	高台付埴		[3.0]	8.2	EIK	5	良好	灰	Pit4 木野産 貼付高台 底面回転糸切り	
28	須恵器	甕		[2.3]	(16.0)	EHIK	10	良好	黄灰	Pit4 木野産 平底底部ヘラケズリ 外面二次的焼熱による赤色化風化	
29	須恵器	甕				CEIK		普通	灰黄	Pit4 木野産	
30	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit4 木野産	
31	須恵器	坏	11.6	3.1	6.0	EIK	30	普通	灰	Pit5 木野産 底部回転糸切り	
32	須恵器	皿	(14.0)	[1.8]		HIK	10	普通	灰黄	Pit5 木野産	
33	須恵器	高台付埴		[2.5]	(6.4)	EHIK	25	良好	灰	Pit5 木野産 貼付高台 底部回転糸切り	
34	須恵器	高台付埴		[2.3]	(6.6)	EHIK	40	普通	明黄褐	Pit5 木野産 貼付高台 底部回転糸切り	
35	須恵器	高台付埴		[2.5]	(8.4)	EHIK	55	普通	灰黄	Pit5 木野産 貼付高台 底部回転糸切り	
36	須恵器	坏		[1.6]	(4.9)	EIK	30	良好	灰	Pit5 木野産 底部回転糸切り	
37	須恵器	高台付埴		[1.7]	(6.6)	HIK	10	良好	灰	Pit5 木野産 貼付高台 底部回転糸切り	
38	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit5 木野産	
39	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit5 木野産	
40	須恵器	甕				IK		良好	灰	Pit5 木野産	
41	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit5 木野産	
42	須恵器	甕				EHIK		良好	灰	Pit5 木野産 T19Gr	
43	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit5 木野産	
44	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit5 木野産	
45	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit5 木野産	
46	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit5 木野産	
47	須恵器	坏	(11.6)	[2.7]		IK	10	良好	灰	Pit6 木野産	
48	須恵器	坏		[1.5]	(6.0)	EHIK	15	普通	灰	Pit6 木野産 底部周辺ヘラケズリ	
49	須恵器	甕				EIK		普通	灰	Pit6 木野産	
50	須恵器	坏	(13.7)	3.5	(7.4)	EIK	30	良好	灰	Pit7 木野産 底部回転糸切り	
51	須恵器	坏		[1.4]	6.4	ADEHIK	70	良好	灰黄	Pit7 木野産 底部回転糸切り	
52	須恵器	皿	(14.0)	[1.6]		EHIK	15	普通	に灰黄	Pit7 木野産 酸化塩	
53	須恵器	高台付埴		[2.1]	(7.0)	EHIK	35	普通	に灰黄	Pit7 木野産 貼付高台 底部回転糸切り	
54	須恵器	甕				EIK		良好	黄灰	Pit7 木野産	
55	須恵器	坏	(13.3)	4.2	6.4	CEIK	40	普通	灰白	Pit8 木野産 底部回転糸切り	
56	須恵器	坏		[1.9]	5.0	IK	15	普通	灰黄褐	Pit8 木野産 底部回転糸切り	
57	須恵器	高台付埴		[2.7]	6.0	EHIK	55	不良	に灰黄	Pit8 木野産 酸化塩 貼付高台(側面) 底部回転糸切り	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
58	須恵器	高台付埴		[2.3]	(7.0)	HLJK	30	普通	灰黄褐	Pit8 末野産 貼付高台 底部回転糸切り	
59	須恵器	高台付埴		[2.8]	(7.6)	HIK	20	不良	にぶ・黄褐	Pit8 末野産 酸化焰 貼付高台 底部回転糸切り	
60	須恵器	高台付埴		[1.6]	6.8	EIK	85	良好	黄灰	Pit8 末野産 貼付高台 底部回転糸切り	
61	須恵器	環	(13.0)	3.3	(6.0)	EHIK	15	普通	黄灰	Pit9 末野産 Pit9No4	
62	須恵器	環	(12.8)	[3.1]		IK	10	良好	灰	Pit9 末野産 Pit9No5	
63	須恵器	環		[1.9]	(6.0)	AEHIK	25	普通	灰黄	Pit9 末野産 酸化焰 底部回転糸切り	
64	須恵器	埴		[2.5]	(8.4)	EHLJK	40	普通	灰	Pit9 南北企産 底部周辺ヘラケズリ	
65	須恵器	高台付埴		[1.4]	(6.8)	DIK	75	良好	灰	Pit9 末野産 貼付高台 底部回転糸切り Pit9No3-Pit8	
66	土師器	環	(11.4)	[3.4]		AHIK	15	普通	にぶ・黄褐	Pit9 (平底) 内面剥離面多	
67	須恵器	甕				EHIK		良好	灰	Pit9 末野産	
68	須恵器	甕				EIK		良好	灰黄	Pit9 末野産	
70	須恵器	蓋		[1.8]		ABEHIK	15	普通	にぶ・黄褐	Pit10 末野産 二次的被熱により器面風化・赤色化	
71	須恵器	甕		[2.7]		EHIK	10	普通	灰	Pit10 末野産	
72	土師器	環	(13.8)	[3.5]		EHIK	10	普通	にぶ・黄褐	Pit10 (平底)	
73	土師器	小型甕	14.8	[2.7]		EHIK	10	普通	にぶ・黄褐	Pit10	
74	土師器	台付甕		[2.3]		DHIK	70	普通	にぶ・黄褐	Pit10 台部剥離	
75	須恵器	甕				EIK		良好	黄灰	Pit10 末野産	
76	須恵器	皿		[1.3]	(8.0)	EHIK	15	良好	灰黄	Pit13 末野産 底部回転糸切り	
77	須恵器	環		[0.9]	6.4	HIK	20	良好	灰黄	Pit14 末野産 底部回転糸切り	
78	須恵器	高台付埴		[1.6]		EIK	40	良好	黄灰	Pit5 末野産 貼付高台(剥離) 底部剥離糸切り 内面磨削面	
79	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit15 末野産	
80	須恵器	甕				EHIK		普通	灰黄	Pit15 末野産	
81	須恵器	環		[2.3]	(6.0)	HIK	15	普通	にぶ・黄褐	Pit16 末野産 酸化焰 底部回転糸切り	
82	須恵器	高台付埴		[1.3]	(6.4)	IK	20	良好	黄灰	Pit16 末野産 貼付高台 底部回転糸切り	
83	土師器	埴	(13.0)	[3.6]		ACIK	15	普通	赤褐	Pit16 平底	
84	土師器	埴	(21.0)	[5.9]		HIK	15	普通	にぶ・黄褐	Pit16	
85	須恵器	蓋	(17.0)	[1.8]		HIK	10	不良	にぶ・黄褐	Pit18 末野産 酸化焰	
86	須恵器	皿	(15.5)	[2.0]		EI	5	良好	灰	Pit18 末野産	
87	須恵器	環				IK		良好	灰黄	Pit18 末野産	
88	須恵器	甕		[1.5]	5.4	HIK	55	良好	灰	SB4Pit20(SK22) 末野産 底部回転糸切り	
89	須恵器	環		[1.0]	6.8	EHIK	90	普通	にぶ・黄褐	SB4Pit20(SK22) 末野産 底部回転糸切り 内面磨削面	
90	土師器	環	(14.0)	[2.8]		AEHI	25	普通	橙	SB4Pit20(SK22)	
91	土師器	環	12.4	[3.5]		AHIK	55	普通	赤褐	SB4Pit20(SK22) SJ8 SJ8A	
92	土師器	環	(12.5)	[3.4]		ACEIK	50	普通	橙	SB4Pit20(SK22)	
93	土師器	環		[3.5]	(3.6)	AHIK	25	普通	橙	SB4Pit20(SK22) 底部ヘラケズリ	
94	須恵器	甕				EIK		良好	灰	SB4Pit20(SK22) 末野産	
95	須恵器	甕				EIK		良好	灰	SB4Pit20(SK22) 末野産	
96	須恵器	甕				EIK		良好	灰	SB4Pit20(SK22) 末野産	
97	須恵器	甕				EIK		良好	灰	SB4Pit20(SK22) 末野産	
98	須恵器	甕				EIK		良好	灰	SB4Pit20(SK22) 末野産	
99	須恵器	甕				EIK		良好	灰	SB4Pit20(SK22) 末野産	
100	須恵器	環		[1.4]	(6.0)	IK	15	良好	褐灰	Pit21 末野産 底部回転糸切り	

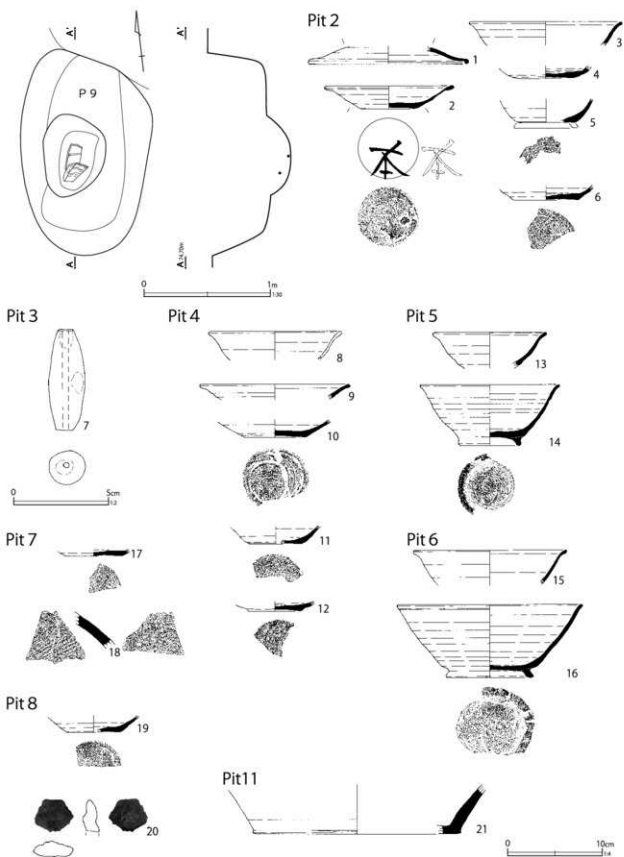
大型建物跡であり、柱の根元が柱穴底面を掘り込んで設置されていることから、建物の廃絶時に地中深くまで掘り返して柱を抜き取ったことが想定される。

遺物は、身舎柱のPit5・Pit6・Pit7・Pit8・Pit9・Pit10・Pit20・Pit21と、廂柱のPit1・Pit2・Pit3・Pit4・Pit13・Pit14・Pit15・Pit16・Pit18から出土している。遺物には須恵器の蓋・環・高台付埴・甕、ロクロ土師器、土師器環・甕などが出土している。

Pit1の灰釉陶器皿・釘、Pit9の板状鉄製品などは特筆される。概ね9世紀後半代が中心である。先行する遺構と重複・近接するPit1・Pit6・Pit9から底部外面の周辺に回転ケズリが施された須恵器環、Pit3・Pit7から底径の大きな須恵器環など古いタイプの遺物がみつまっている。柱穴を掘り起こし、柱を据えて埋め戻す掘立柱建物跡の構築工程から、先行遺構から古いタイプの遺物が混入したことが想定される。



第81图 第5号掘立柱建物跡(1)



第82图 第5号掘立柱建物跡(2)・出土遺物

第40表 第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	蓋	(16.6)	[1.8]		HIK	10	不良	橙	Pit2(SK4) 末野産 酸化塩 二次的被熱 器面風化・赤色化	26-5
2	須恵器	皿	(13.4)	2.4	6.0	EHIK	55	普通	灰	Pit2・3 末野産 底部回転糸切り 墨書「本」か	
3	須恵器	高台付埴	(16.0)	[2.5]		EHIK	10	普通	灰	Pit2 末野産	
4	須恵器	杯		[1.3]	(7.0)	HIK	15	普通	灰黄	Pit2(SK4) 末野産 底部擦痕顕著・調整不明瞭	
5	須恵器	高台付埴		[2.5]	(6.4)	HIK	30	普通	灰	Pit2(SK4) 末野産 貼付高台(割離) 底部回転糸切り	
6	須恵器	杯		[1.6]	(7.0)	DIK	25	良好	灰	Pit2 末野産 底部回転糸切り	
8	須恵器	杯	(13.8)	[3.1]		EIK	15	良好	灰黄	Pit4	
9	須恵器	高台付埴	(15.6)	[1.6]		IK	10	良好	灰	Pit4 末野産	
10	須恵器	杯		[1.8]	6.5	HIK	70	普通	灰黄	Pit4 末野産 底部回転糸切り 輪状圧痕	
11	須恵器	杯		[1.9]	(5.6)	HIK	30	良好	灰	Pit4 末野産 底部回転糸切り	
12	須恵器	杯		[1.0]	(5.6)	EHI	20	普通	灰	Pit4 末野産 底部回転糸切り 内面磨痕顕著	
13	須恵器	杯	(11.7)	[3.8]		IK	10	良好	灰	Pit5 末野産	
14	須恵器	高台付埴	(14.4)	6.5	(6.6)	AHIK	45	不良	褐灰	Pit5・6 末野産 酸化塩 貼付高台 底部回転糸切り	
15	須恵器	高台付埴	(16.0)	[3.7]		HIK	10	普通	灰	Pit6 末野産	
16	須恵器	高台付埴	(19.6)	7.7	(9.2)	EHIK	40	普通	黄灰	Pit5・6 末野産 貼付高台(墓持王産) 底部回転糸切り	
17	須恵器	杯		[0.8]	(6.0)	EHIK	20	普通	灰	Pit7 末野産 底部回転糸切り	
18	須恵器	甕				EIK		良好	黄灰	Pit7 末野産	
19	須恵器	杯		[1.8]	(5.8)	EHIK	20	普通	灰	Pit8 末野産 酸化塩 底部回転糸切り	
21	須恵器	甕		[5.2]	(22.0)	EHIK	10	普通	灰	Pit11 末野産 平底 底部ケズリ	

第77図7・8はPit1から出土した鉄製の釘で、いずれも断面は方形を呈している。7は頭部が工具の打撃により変形し、湾曲した先端を欠損する。残存長7.25cm・幅0.35cm・厚さ0.35cm・残存重5.9gである。8は頭部が屈曲し、湾曲した先端を欠損する。残存長12.1cm・幅4.5cm・厚さ3.5cm・残存重15.5gの大型品である(図版27)。

第80図69はPit9から出土した板状製品であるが、本来の形状を復元することはできず、用途は不明である。残存する長さ2.1cm・幅1.8cm・厚さ0.3cm・重さ2.5gである(図版27)。

図示したほかに、末野産の須恵器蓋・杯(底部周辺ヘラケズリ・回転糸切り離し)・高台付埴・長頸瓶・甕、土師器杯・甕の細片も出土している。

第5号掘立柱建物跡 (第81・82図)

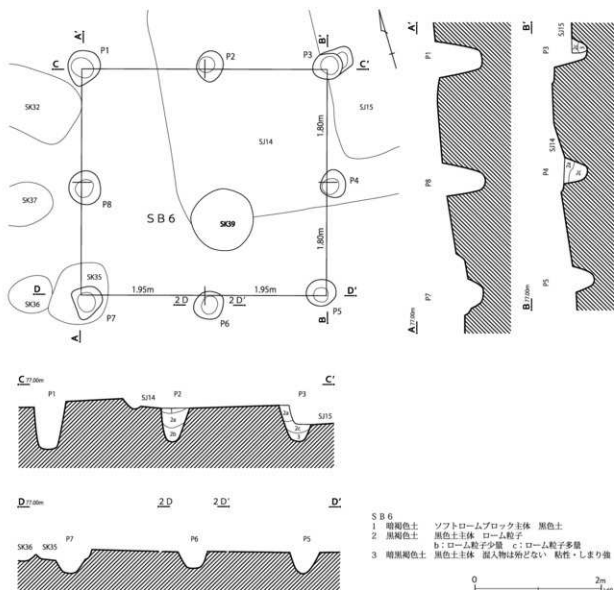
T・U-18・19グリッドに位置し、地形の傾斜が緩やかな箇所を占地している。重複する第3・5号住居跡との新旧関係は、第5号住居跡→第5号掘立柱建物跡→第3号住居跡の順に新しくなる。

第4号掘立柱建物跡と同様に、柱穴の規模が大きな建物跡である。柱穴同士の重複関係から、

第5号掘立柱建物跡が第4号掘立柱建物跡よりも先行する。長軸方位と南辺をほぼ合致させ、また北西隅の柱穴が第4号掘立柱建物跡身舎の柱穴と同位置となることから、第4号掘立柱建物跡は第5号掘立柱建物跡の規模を拡大して建て直されたことが予想される。

3間×2間の側柱建物跡である。長軸方位はN-11°-Eを指し、長辺が東西に面する。規模は、南北6.30m×東西3.90m、面積24.57㎡である。柱間距離は南北方向2.10m、東西方向1.95mに統一され、規則性が高い柱配置を示している。一方、四隅の柱に対して、中間に配置された柱穴は外側に張り出す傾向が認められる。

柱穴は隅丸長方形で、規模は長軸長1.2~1.5m×短軸長0.6~0.9m、確認面からの深さは隅柱が0.6~0.7m、中間柱が0.5~0.6mほどである。ほかの掘立柱建物跡と比較して柱穴規模が大きく、隅柱が深く掘り込まれていることから、集落の中心となる頑強な掘立柱建物と推定される。覆土は最上層の柱抜取痕の埋没層と多くの柱穴で柱痕が認められることから、建物の廃絶時に地表付近を浅く掘り返して柱が抜き取られたことが想定され



第83図 第6号掘立柱建物跡

る。柱掘方には、黒色土とロームの混合量を変えた土壌が互層に突き固められている。

遺物は9世紀後半が中心で、Pit 2から底面に「本」と墨書された須恵器皿（第82図2・末野産）、北東隅（鬼門）のPit 3から土鍾、南西隅（裏鬼門）のPit 8から碗形滓（20）が出土している。

第82図7は土鍾である。長軸長5.3cm・最大径1.9cm・孔径0.3cm・重さ17.0gである。残存率は100%、色調は橙である（図版29-2）。

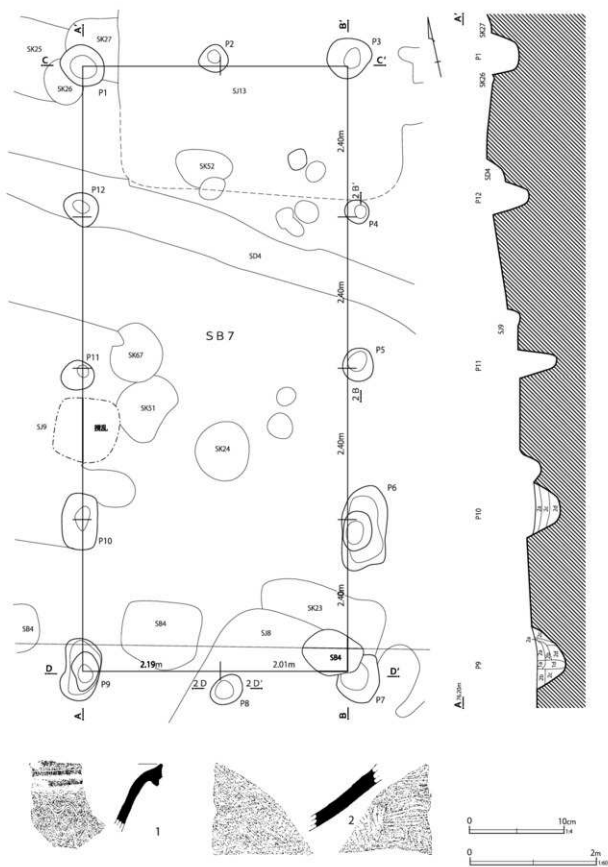
20はPit 8から出土した碗形滓である。大きさは、残存長3.5cm・幅4.2cm・厚さ1.6cm・残存重

25.2gである。磁着する（Pit 8）。

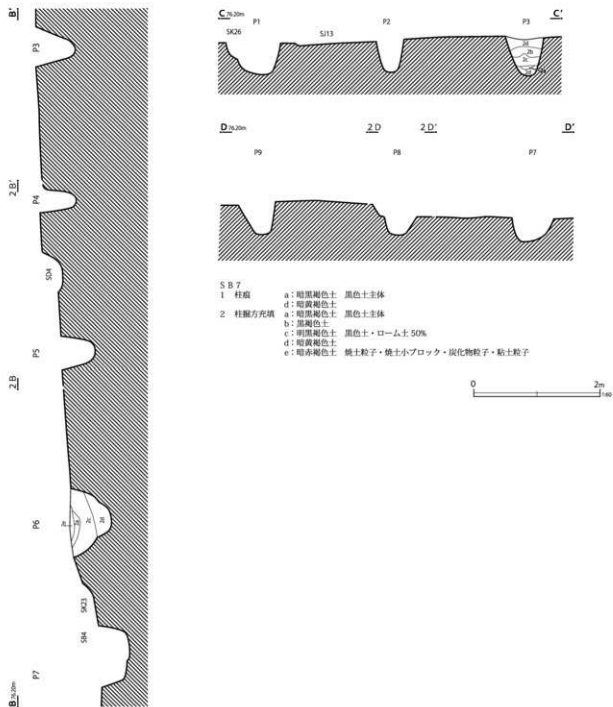
図示したほかに、第4号掘立柱建物跡に大部分が掘り返された北西隅のPit 1を除き、末野産の須恵器杯・高台付碗・長頸瓶・甕片や土師器杯・甕片が出土している。いずれも細片で、重複する住居跡から流入した可能性もある。また、Pit 8・Pit 9から木炭片が検出されているが、柱材の残骸とは断定できない。

第6号掘立柱建物跡（第83図）

R-19グリッドに位置する。第14・15号住居跡、第35号土壌と重複するが、新旧関係は不明である。



第84图 第7号掘立柱建物跡(1)・出土遺物



第85図 第7号掘立柱建物跡（2）

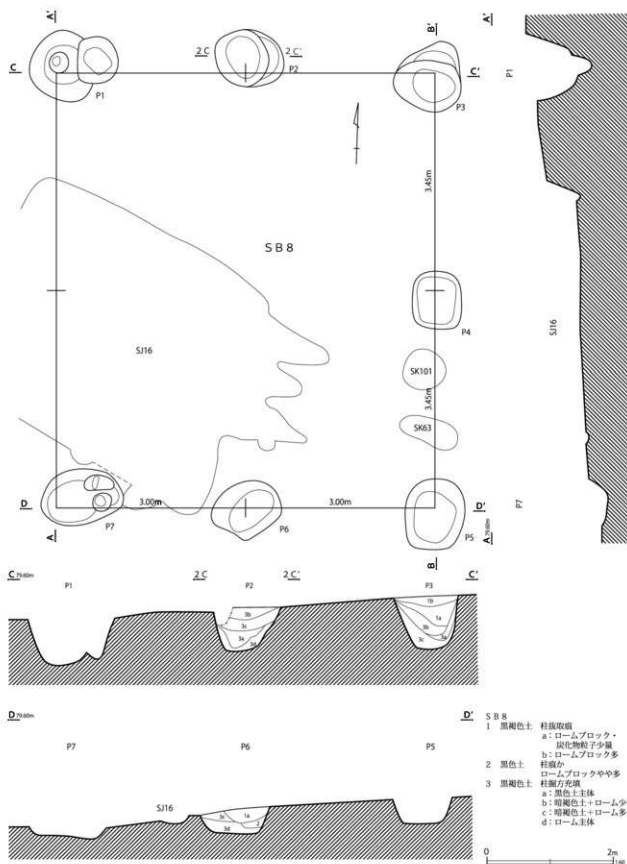
第41表 第7号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit9 未野産	
2	須恵器	甕				EIK		良好	灰	Pit9 未野産	

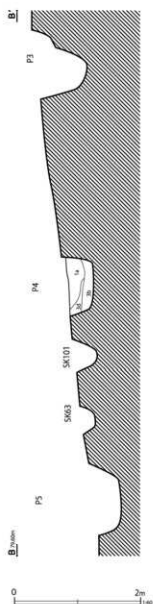
2間×2間の総柱建物跡である。南北軸方位はN-12°-Eを指す。規模は、南北3.60m×東西3.90m、面積14.04㎡である。中平遺跡の中では、長軸を東西方向にもつ数少ない建物跡である。柱

間距離は、南北方向1.80m、東西方向1.95mに統一された規則性が高い柱配置である。

柱穴は径0.5mの小さな平面規模に対し、確認面からの深さは0.8mと深いものである。底面標



第86図 第8号掘立柱建物跡(1)



第87図 第8号掘立柱建物跡(2)

高は、長軸の東西方向がほぼ水平、南北方向は地形の傾斜に沿って北から南に下がる。覆土は、柱痕や柱抜取痕、柱掘方充填土に分層することができなかった。

出土した遺物はない。

第7号掘立柱建物跡(第84・85図)

S・T-18・19グリッドに位置する。第8・9・13号住居跡、第4号掘立柱建物跡、第23・25・26・27号土壌、第4号溝跡と重複するが、いずれも新旧関係は明確ではない。ただし、第12号住居跡よりも新しい第4号溝跡よりも古く、奈良時

代の第8号住居跡よりも新しいことが推定される。

4間×2間の側柱建物跡である。長軸方位はN-12°-Eを指し、長辺が東西に面する。規模は、南北9.60m×東西4.20m、面積40.32㎡である。中平遺跡では、短辺に対し長辺が2倍以上ある特異な建物跡である。柱間距離は南北方向が2.40mと統一されているのに対し、東西方向は2.19m・2.01mと違える。柱配置は長辺に高い規則性を示し、長辺側を正面と意識した建物と推定される。

柱穴の平面規模は、斜面下方の南側が大きく、上方の北側が小さい傾向が認められる。また相対する短辺の棟持柱も小さい。覆土は、Pit9では底面から確認面まで繋がる柱痕が確認され、Pit3・Pit6・Pit10では柱掘方の充填土層のみがみられる。よって、柱穴を掘り込んで柱を抜き取った痕跡は認められない。柱穴の底面標高は、ほかの掘立柱建物跡と同様に、東西方向がほぼ水平、南北方向が地形の傾斜に沿って北から南に向かって下がっている。

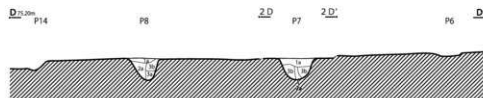
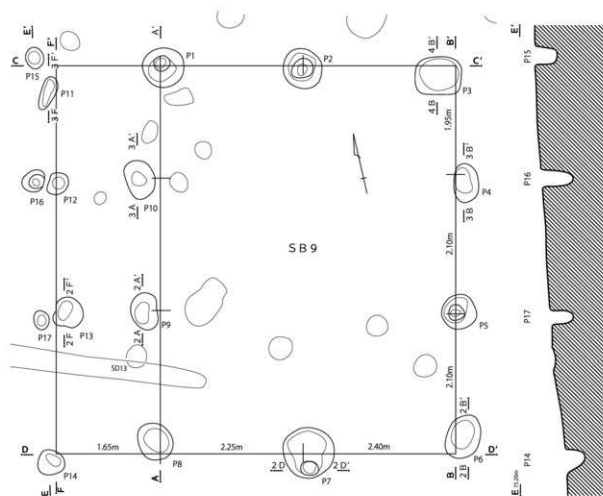
遺物は少なく、図示した末野産の須恵器破片が出土しているのみである。

第8号掘立柱建物跡(第86・87図)

P・Q-19グリッドに位置する。第16号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。第16号住居跡内に位置する西辺の中間柱は、検出されていない。

2間×2間の側柱建物跡である。長軸を南北にもち、長軸方位はN-2°-Wを指す。規模は、南北6.90m×東西6.00m、面積41.40㎡である。柱間距離は、南北方向3.45m、東西方向3.00mとそれぞれ統一されているが、ほかの掘立柱建物跡と比べるとずば抜けて長い。これに比例して柱穴の規模は大きく、概ね径1.0mほどもある。覆土は、最上層に柱抜取痕の埋没土層がみられ、地表付近を掘り返して柱を抜き取ったようである。

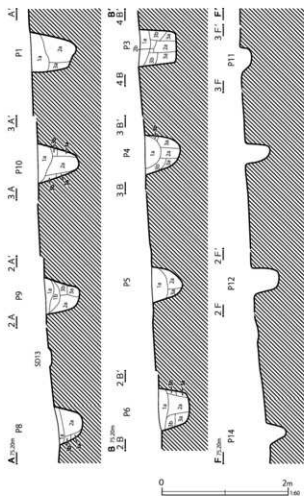
遺物は、末野産の須恵器片(底部回転糸切り離



- SB 9
- 1 暗黄褐色土 黒色土+ロームブロック多量
b: ロームブロック少量
 - 2 黒色土 黒色土主体 炭入粉砂少 ローム粒子微量
 - 3 暗黒褐色土 黒色土主体 ロームブロック微量
a は 2a と識別がむずかしい
b: ロームブロック多量



第88図 第9号掘立柱建物跡(1)・出土遺物



第89図 第9号掘立柱建物跡(2)

し)・甕片、土師器環・甕片が出土しているが、細片のため図示し得ない。

第9号掘立柱建物跡(第88・89図)

S-14・15グリッドに位置する。第15号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴同士の切り合いは無く、新旧関係は不明である。

3間×2間の側柱建物の身舎の西面に廂が付設されている。長軸を南北方向に向け、長軸方位はN-12°-Eを指す。身舎の規模は、南北6.15m×東西4.65m、面積28.5975㎡である。柱間距離は、南北方向が北から1.95m・2.10m・2.10m、東西方

向が西から2.25m・2.40mで、統一感がない。柱配置は、西辺・東辺の中間柱が外側に張り出す。柱穴は、長軸長0.6~0.8m×短軸長0.4~0.8m、深さ0.5~0.7mで、2間×2間側柱建物跡に比べてしっかりとした柱穴である。覆土は柱採取痕の埋没層・柱痕・柱掘方充填層が明瞭に分層される。柱痕が太く、採取痕は柱穴の中程まで達していることから、柱は根元まで緩めてから抜き取られたことが推定される。柱掘方には黒色土とロームの混合率を変えた土壌が互層に突き固められている。

西面に付設された廂は、2列が平行する。身舎には建て替えの痕跡が認められていないことから、建物の建て替えを行わず、廂だけが付け替えられた可能性が高い。廂と身舎の柱間距離は、1.65mである。身舎に対し、廂の柱穴は小規模である。

遺物は、図示したほかに末野産須恵器環(底部回転糸切り離し・周辺ヘラケズリ)、土師器甕片が出土し、9世紀後半と推定される。

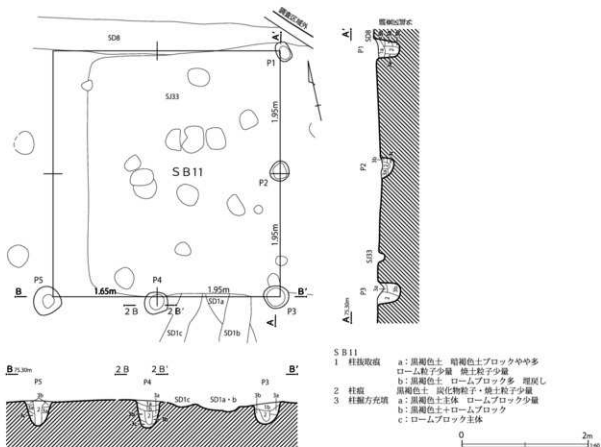
第10号掘立柱建物跡(第90図)

S-15・16グリッドに位置し、北半部は調査区域外にある。重複する第38号住居跡の方が新しい。また南側には、平安時代の第1号井戸跡が位置する。

2間×2間の建物跡と推定され、中平遺跡では唯一の総柱建物跡である。南北軸方位はN-14°-Eを指す。柱間距離は、南北方向・東西方向ともに2.70mに統一されている。よって、建物の規模は東西が5.40m、南北は5.40mと推定される。面積は29.16㎡となる見込みである。柱穴は平面径0.6~0.8m、確認面からの深さ0.6~0.8mほどである。Pit 4を除く隣接ピットは、東柱の可能性がある。

第42表 第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第88図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	環	(12.2)	3.3	(6.0)	HK	20	良好	灰		Pit 2 末野産 底部回転糸切り	



第91図 第11号掘立柱建物跡

号住居跡との新旧関係は不明である。

南辺2間、東辺2間の柱穴が並ぶ。北辺及び西辺の柱穴は確認されていない。2間以上×2間以上の側柱建物跡と推定される。南北軸の方位はN-13°-Eを指す。柱間距離は1.95mを基準とし、東西方向の西間が1.65mと狭い。規模は、南北3.90m以上×東西3.60m以上となる。

柱穴は平面径0.3～0.5m、確認面からの深さは0.4～0.5mと規模が小さい。覆土は最上層に柱抜取痕の埋没層、下層は柱痕と柱掘方充填層が認められる。柱材が、根本付近を残して抜き取られている。

遺物は土師器甕・坏が出土しているが、図示し得ない。

第12号掘立柱建物跡 (第92図)

T-16グリッドに位置する。第34・35号住居跡

と重複するが、新旧関係は不明である。

2間×2間の側柱建物跡である。南北軸方位はN-20°-Eを指す。規模は、南北4.05m×東西4.05m、面積16.4025㎡である。柱間距離は2.025mと統一され、規格性の高い柱配置である。その一方で、いずれの中間柱も外側へ張り出す。

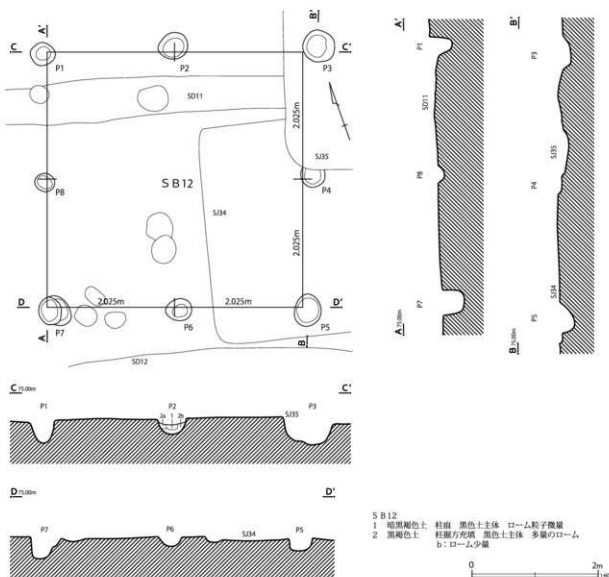
柱穴は、平面径が0.4～0.5mと小規模である。深さは隅柱が0.3～0.5m、中間柱が0.2～0.3mで、明瞭に異なる。覆土はPit 2のみで観察された。柱痕と柱掘方充填層が確認されたが、柱の抜取状況は不明である。

遺物は土師器坏1片が出土したが、細片のため図示し得ない。

第13号掘立柱建物跡 (第93図)

T-15・16グリッドに位置する。

2間×2間の側柱建物跡である。長軸を南北



第92図 第12号掘立柱建物跡

方向に向け、長軸方位は $N-22^{\circ}-E$ を指す。規模は、南北 $4.50m \times$ 東西 $3.45m$ 、面積 $15.525m^2$ である。柱間距離は不統一で、南北方向が北から $2.10m \cdot 2.40m$ 、東西方向が西から $1.65m \cdot 1.80m$ である。柱並びは、北辺・南辺の中間柱が内側に入り込む傾向がみられる。また、北辺中間柱と第1号井戸跡との重複関係は、重複を避けるように位置すると認識した場合は第13号掘立柱建物跡が新しくなる。一方、第13号掘立柱建物跡の柱穴は第1号井戸跡と重複し、別のピットを誤認している場合は第13号掘立柱建物跡が古くなる。

柱穴は平面径 $0.4 \sim 0.5m$ 、確認面からの深さ

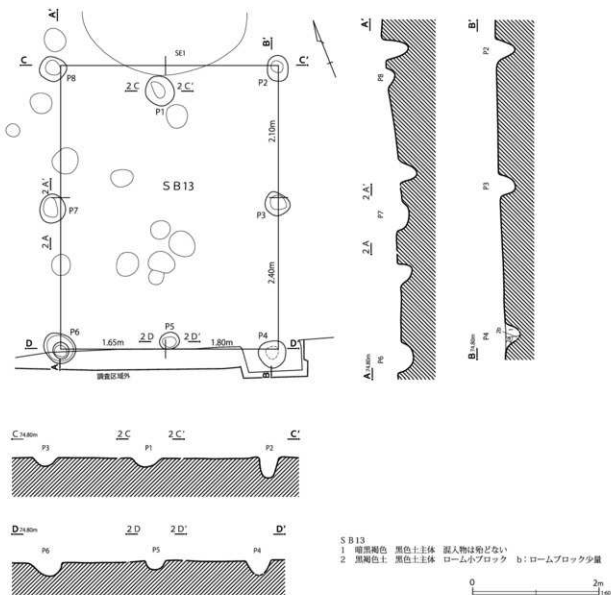
$0.4m$ 未満と小規模である。覆土はPit 4のみに観察され、柱痕と柱掘方充填層と推定される。

遺物は出土していない。

第14号掘立柱建物跡（第94図）

T-16・17グリッドに位置する。第35号住居跡・第11号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

2間 $\times$ 2間の側柱建物跡で、南東隅の柱穴は見つかっていない。南北軸方位は $N-13^{\circ}-E$ を指す。規模は、南北 $4.65m \times$ 東西 $4.65m$ 、面積 $21.6225m^2$ である。柱間距離は、南北方向が北から $2.25m \cdot 2.40m$ 、東西方向も西から $2.25m \cdot 2.40m$ で意図的に違えているようである。



第93図 第13号掘立柱建物跡

柱穴の規模は平面径0.3～0.5m、確認面からの深さは間柱が深い傾向があるが、0.3～0.6mである。覆土は観察されていない。

第94図1は、南辺中央柱のPit 5から出土した楕型滓である。残存する大きさは長さ5.8cm・幅4.7cm・厚さ1.6cm・重さ49.4gで、磁着する。

図示したほかに、須恵器等は出土していない。

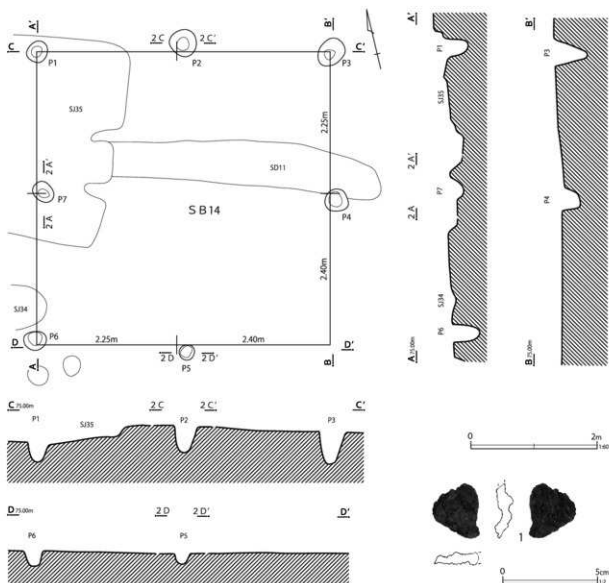
第15号掘立柱建物跡（第95図）

S・T-14・15グリッドに位置する。第9号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴同士の切り合いは無く、新旧関係は不明である。

2間×2間の側柱建物跡である。長軸を南北方向に向け、長軸方位はN-12°-Eを指す。

規模は、南北5.40m×東西4.20m、面積22.68㎡である。柱間距離は南北方向が2.70m、東西方向が2.10mである。西辺中間柱は見つかっていないが、隣接するピット2基が該当する可能性もあり、この場合には建て替えを想定する必要がある。

柱並びは、中間柱が外側に張り出す傾向がある。柱穴は平面径0.3～0.6m、確認面からの深さ0.3m前後と小規模である。覆土はPit 7のみに観察され、柱拔取痕・柱痕・柱掘方充填層を区別するこ



第94図 第14号掘立柱建物跡・出土遺物

とは難しい。

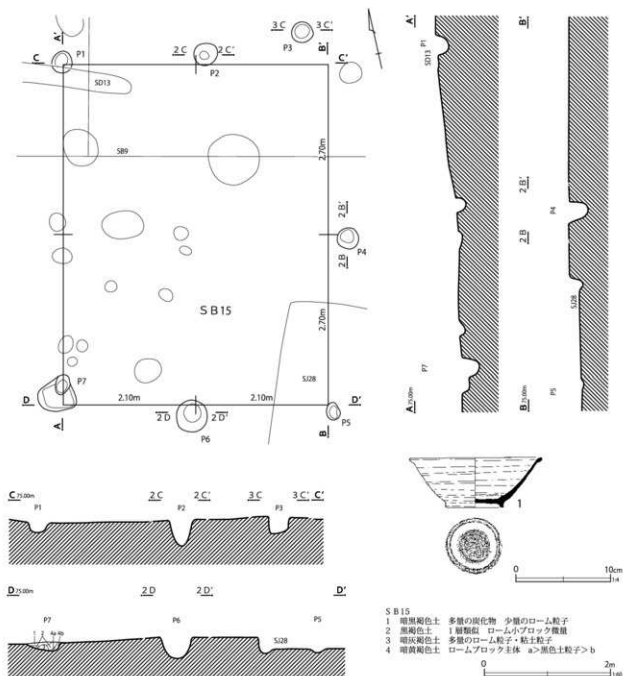
産須恵器の高台付壺が出土している（第109号土

遺物は、南西隅のPit 7から9世紀後半の末野

城No.1）。内面には重ね焼きの痕跡がみられる。

第44表 第15号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第95図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	高台付壺	13.9	5.2	6.1	EI	95	普通	灰黄褐	Pit7 末野産 貼付高台 底部回転糸切り 内面に重ね焼きの痕跡	SK109・No.1	26-6



第95図 第15号掘立柱建物跡・出土遺物

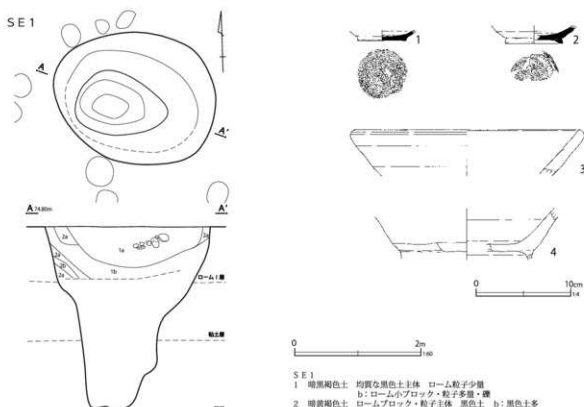
3. 井戸跡

中平遺跡の発掘調査では、井戸跡1基が発見された。唯一の総柱建物跡の第10号掘立柱建物跡の南側に位置する。廂が付設された第4・9号掘立柱建物跡の正面観から、第10号掘立柱建物跡は西側を正面と想定することができる。よって、第10号掘立柱建物跡と第1号井戸跡の配置は、倉

庫と南脇の井戸という景観が復元できる。

第1号井戸跡（第96図）

T-15・16グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、長軸方向はN-62°-Wを指す。規模は長軸長2.60m×短軸長2.10m、確認面からの深さ2.90mを測る。断面は漏斗状で、礫層まで掘り込



第96図 第1号井戸跡・出土遺物

第45表 第1号井戸跡出土遺物観察表 (第96図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	出土位置	図版
1	須恵器	坏		[1.2]	5.2	EIK	90	良好	灰	SE 木野産 底部回転糸切り		
2	須恵器	高台付埴		[1.9]	(6.1)	HIK	40	良好	灰	SE1 木野産 貼付高台 底部回転糸切り	0~1m	
3	瓦質陶器	鉢	(23.8)	[4.9]		AHIK	10	普通	黄灰	SE1 在地産 14~15c? 上層出土		
4	山茶碗系	こね鉢		[5.5]		EHIK	20	良好	褐灰	SE1 12世紀代か? 降灰釉付着 底部ヘラケズリ	0~1m	

まれている。

遺物は、上層から1m未満と、2~3mから末野産須恵器坏・高台付埴・甕と中世の瓦質陶器や山茶碗系の鉢が出土している。1mよりも深い

覆土からは、9世紀後半の末野産須恵器坏・甕と土師器甕に限定される。そのため、第1号井戸跡は竪穴住居跡・掘立柱建物跡と同時期に機能していたことが推定される。

4. 溝跡

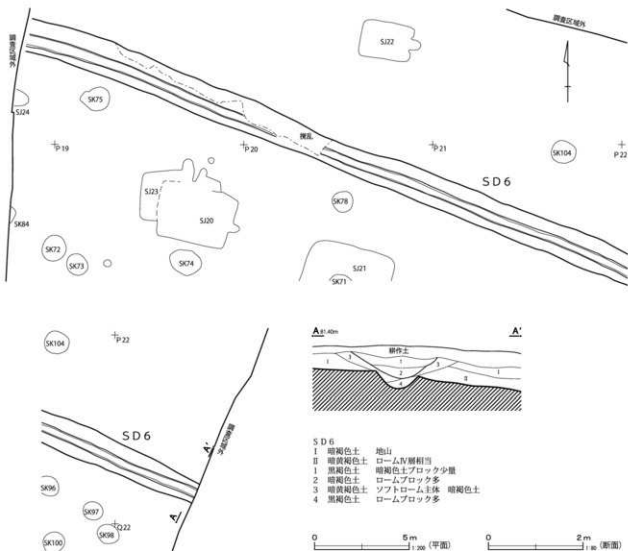
中平遺跡の発掘調査では、溝跡13条が発見された。第6号溝跡を除き、傾斜が緩くなる標高77m以南に分布している。多くは等高線に沿った東西方向に走行する。

第6号溝跡は、平安時代の竪穴住居跡群・掘立柱建物跡群の北限に位置する配置から、集落の北限を区切る区画溝と捉えられる。

第7・3・8号溝跡と第9・13・11・1号溝

跡は、結節せずに断絶した溝跡であるが、それぞれは同一の溝跡と推定される。また、第7・3号溝跡では覆土上層部に硬化面が検出され、道路跡の可能性もある。台地の裾部に沿った道路の存在が想定される。

第1号溝跡は掘り直し等で関連する4条の溝跡が併行し、U・V-21グリッド付近で、3条が北側に屈曲し、1条は東側に直進する。



第97図 第6号溝跡

第6号溝跡 (第97図)

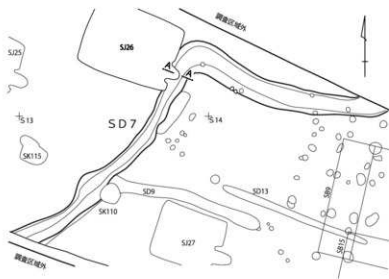
O・P-18~22グリッドに位置し、重複する遺構はない。地形の変換点に掘削された溝跡で、北側が平地、南側が斜面地となっている。走行方位はN-111°-Eを指し、等高線とほぼ一致する。調査区域を東西に横断し、東西ともに調査区域外に至る。

検出長38.8m、上幅1.30~1.75m、下幅0.40~0.62mを測る。耕作土直下のローム層から掘り込まれた溝跡で、堆積状況から埋没過程で一度補修されたことが推定される (第1・2層)。

覆土は黒褐色土・暗褐色土を主体とし、平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡の覆土と近似する。

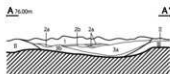
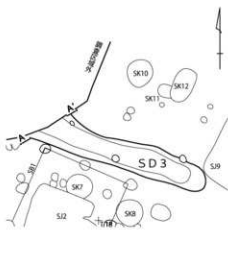
また、浅間山の噴火による浅間A (1783 (天明3) 年) 及び浅間B (1108 (天仁元) 年) は含まれていない。遺物は、木野産の須恵器坏 (底部回転系切り)・高台付埴、甕もしくは羽釜の小破片、平底甕、南比企産の須恵器坏 (底部回転系切り離し) などが出土している。いずれも9世紀代と推定され、浅間A・Bの噴火時期のものはない。

これらのことから、平安時代の溝跡と推定される。また、地形の傾斜が変化する台地の肩部の等高線に沿って位置し、第6号溝跡の北側には竪穴住居跡・掘立柱建物跡が分布しない状況から、集落の北側を区画していた溝跡と性格づけられる。さらに、第6号溝跡の北側に所在する極めて小規



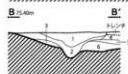
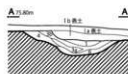
SD7

- 1 黒褐色土 粘性欠・堅緻 褐色土主体 焼土粒子・炭化物粒子均質
2 暗黒褐色土 1層断絶 黒色土ブロック (上面硬化)



SD3 (北壁)

- 1 明黒褐色土 黒色土主体 風化ロームブロック
2 暗黒褐色土 道路跡路盤 灰に黒色化 極細緻
b: 黒色化せず暗褐色土
3 黒褐色土 黄色土・ローム細粒子
b: ローム粒子やや多



SD2

- 1 暗黄灰褐色土 黒色土・焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
2 暗黄灰褐色土 1層と近似するが黒色土を含まない
3 暗黄灰褐色土 浅間A多量
4 暗黄灰褐色土 ローム粒子・ブロック多 (浅間Aは含まない)
5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量
6 暗黄褐色土 暗褐色土+地山ローム多量

0 5m 1:200 (平面)

0 2m 1:50 (断面)

第98図 第7・3・2号溝跡

模な第22号住居跡には、通常の居住とは異なる用途・性格が想起される。

第99図12は、椀型滓である。大きさは、長さ7.2cm・幅8.8cm・厚さ3.5cm・重さ231.8gである。磁着する（SD6）。

第7・3号溝跡（第98図）

第7・3・8号溝跡は結節せずに断絶した溝跡であるが、同一の溝跡と推定される。西から第7号溝跡はR-S-13・14グリッド、第3号溝跡はS-17・18グリッド、第8号溝跡はT-19グリッドに位置する。

第7号溝跡は鈍角に屈曲し、走行方位が東西N-108°-E、南北N-220°-Eを指す。検出長24.0m、上幅は東西溝0.48m・南北溝0.22m、確認面からの深さ0.22mの浅い溝跡である。屈曲部の周囲では、覆土の上面に硬化部が検出された。

第3号溝跡は長さ8.8mが検出され、上幅0.66m、走行方位はN-110°-Eを指す。覆土上層に硬化層（第2層）が確認された。

配置的にみると第7号溝跡と第3号溝跡は同一の溝跡と捉えることが可能である。走行方位、溝幅、硬化面・硬化部等の共通項もこれを傍証している。硬化面は道路跡の可能性が高く、地形的な要件も加えると、台地の裾部に沿った道路の存在が想定される。

出土した遺物は少ない。

第99図19は末野産の須恵器甕の底部片である。単孔式で、裾部が外方へ屈曲する。現存高2.2cm、推定底径19.0cmである。胎土には赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通、色調は灰黄褐である。

20はR-13グリッドから出土した、在地産の瓦質陶器鉢である。推定口径28.0cm、現存高6.5cmの口縁部片である。胎土には石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含み、焼成は普通、色調はにぶい黄である。器面は風化している。

21は不明鉄製品で、「コ」の字形を呈している。

断面は扁平である。残存する長さ3.1cm・幅0.7cm・厚さ0.2cm・重さ2.5gである（R-13Gr／図版27）。

22は棒状品であるが、本来の形状や部位等は不明である。断面形は方形を呈している。残存する長さ3.4cm・幅0.6cm・厚さ0.55cm・重さ5.1gである（R-13Gr／図版27）。

図示したほかに、第7号溝跡から末野産の須恵器環（底部回転糸切り離し）・高台付埴・甕、土師器甕の細片が出土している。

第2号溝跡（第98図）

第2号溝跡は、T・U・V-19・20・21グリッドに位置する。ほぼ直角に屈曲する区画溝で、現在の地割と方向を一致させる。走行方位は東西溝N-110°-E、南北溝N-206°-Eを指す。検出長は27.0m、上幅は東西溝0.62m、南北溝1.0mである。

溝跡の底面直上には浅間Aが多量に堆積していることから、浅間山が噴火した1783（天明3）年には溝として機能していたことがわかる。

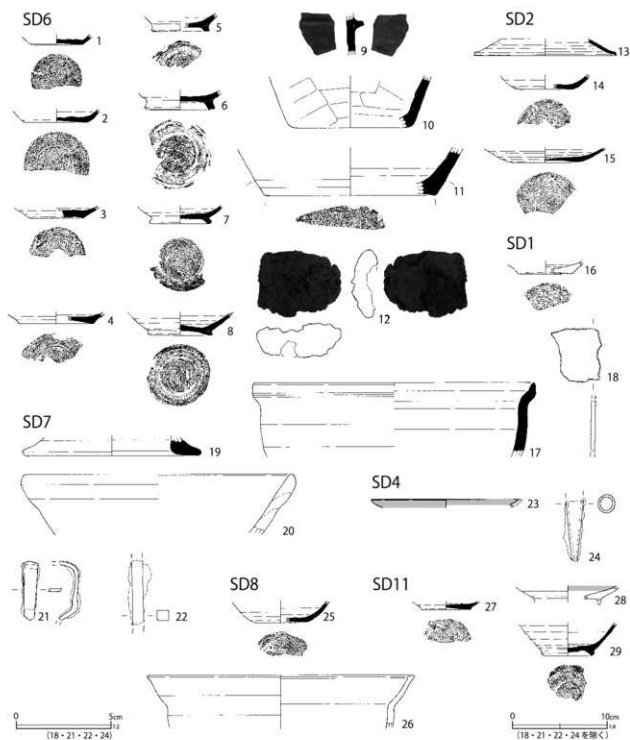
江戸時代の遺物として陶器2片・磁器2片が出土しているが、細片である。図示した遺物は平安時代の末野産須恵器である。このほかに、末野産の須恵器環（底部回転糸切り離し）・高台付埴・甕、土師器甕、縄文土器の細片が出土している。平安時代の須恵器・土師器は、重複する第7・10・11号住居跡から混入したことが推定される。

溝跡出土遺物（第99図）

溝跡の出土遺物は少ない。また出土遺物も溝跡に伴うものと断定することが難しく、重複する遺構から混入した可能性も高い。

第1号溝跡は末野産の須恵器鉢（17）・クロコ土師器環（16）、鉄製品を図示した。18は板状鉄製品で、残存する長さ2.8cm・幅2.5cm・厚さ0.2cm・重さ4.7gである。扁平な板状で、用途等は不明である（図版27）。

図示したほかに、末野産の須恵器環（底部回転糸切り離し）・高台付埴・甕、土師器環・甕、近



第99図 溝跡出土遺物

世以降陶磁器の細片が出土している。

第4号溝跡は、灰釉陶器皿(23)と鉄製品を图示した。24は不明鉄製品で、長い円錐形の筒状製品である。残存する長さ3.25cm・幅0.95cm・厚さ0.1cm・重さ2.9gである(図版27)。图示したほかに、

末野産の須恵器坏(底部回転糸切り離し)・甕、土師器甕、磁器、縄文土器の細片が出土している。

第8号溝跡は、末野産の須恵器坏(25)と在地産の瓦質陶器鍋(26)を图示した。このほかに、末野産の須恵器高台付埴・甕と土師器甕の細片が

第46表 溝跡出土遺物観察表 (第99図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	坏		[1.2]	(5.5)	EJK	45	良好	灰	SD6 南北企産 底部回転糸切り Pit21	26-7
2	須恵器	坏		[1.5]	6.8	EK	50	普通	灰	SD6 末野産 底部回転糸切り 底面周辺のスレ顯著	
3	須恵器	坏		[1.3]	(5.8)	CIK	40	良好	黒	SD6 末野産 底部回転糸切り 二次的焼熱内外面黒化 Pit21	
4	須恵器	坏		[1.2]	(8.0)	IK	25	良好	灰	SD6 末野産 底部回転糸切り	
5	須恵器	高台付埴		[2.0]	(6.2)	EHK	30	普通	黄灰	SD6 末野産 酸化埴 貼付高台 底部回転糸切り	
6	須恵器	高台付埴		[2.1]	7.5	HK	80	良好	黄灰	SD6 末野産 貼付高台 底部回転糸切り	
7	須恵器	高台付埴		[2.0]	(6.6)	EIK	65	良好	灰	SD6 末野産 貼付高台 底部回転糸切り	
8	須恵器	高台付埴		[2.5]	6.9	HK	65	普通	赤褐	SD6 末野産 酸化埴 貼付高台 底部回転糸切り	
9	須恵器	瓶				EIK		良好	灰	SD6019Gr 末野産	
10	須恵器	甕		[5.5]	(12.2)	DEIK	15	良好	灰	SD6 末野産 平底 底部ヘラケズリ	
11	須恵器	甕		[5.1]	(18.0)	HK	10	良好	褐灰	SD6 末野産 平底 底部ヘラケズリ	
13	須恵器	蓋	(15.0)	[1.8]		EIK	15	普通	灰	SD2 末野産	
14	須恵器	埴 ?		[1.6]	(6.0)	EHK	25	普通	灰黄	SD2U19Gr 末野産 底部回転糸切り	
15	須恵器	皿 ?		[1.6]	(7.0)	EHK	30	普通	灰	SD2 末野産 底部回転糸切り	
16	須恵器	鉢?		[1.4]	(6.0)	EHK	25	普通	黄灰	SD1 底部回転糸切り	
17	須恵器	鉢?	(29.6)	[7.9]		IK	5	良好	灰	SD1 末野産	
19	須恵器	瓶		[2.2]	(19.0)	HK	10	普通	灰黄褐	SD7 末野産 単孔式 底部が袖がかりに屈曲する	
20	瓦質陶器	鉢	(28.0)	[6.5]		EHK	10	普通	黄灰	SD7R13Gr 在地産 器面風化	
23	灰釉陶器	皿	(15.8)	[0.9]		HK	5	良好	浅黄	SD4 遠江産	
25	須恵器	坏		[2.3]	(6.0)	EI	20	良好	灰	SD8 末野産 底部回転糸切り	
26	瓦質陶器	鍋	(28.0)	[5.7]		AEHK	10	普通	灰黄褐	SD8 在地産	
27	須恵器	坏		[0.9]	(5.2)	DEIK	40	普通	灰	SD11 末野産 底部回転糸切り	
28	灰釉陶器	皿		[1.8]		IK	20	良好	灰黄	SD11 遠江産	
29	須恵器	高台付埴		[3.5]	(5.6)	EIK	25	普通	灰	SD11 末野産 貼付高台 底部回転糸切り	

出土している。

第9号溝跡から土師器甕、第12号溝跡から末野

産の須恵器坏・土師器甕が出土しているが、細片のため図示し得ない。

5. 土壌

中平遺跡の発掘調査では、土壌122基が発見された。竪穴住居跡・掘立柱建跡の隙間に分布する傾向が強い。なかでも、P・Q-21・22グリッド、Q・R-18・19グリッド、U・V-20・21・22グリッド、R-12グリッドに集中する。また、V-22グリッドでは長軸長1.3～2.6m・短軸長1mの平面形態が隅丸長方形の土壌が集中し、特筆される。

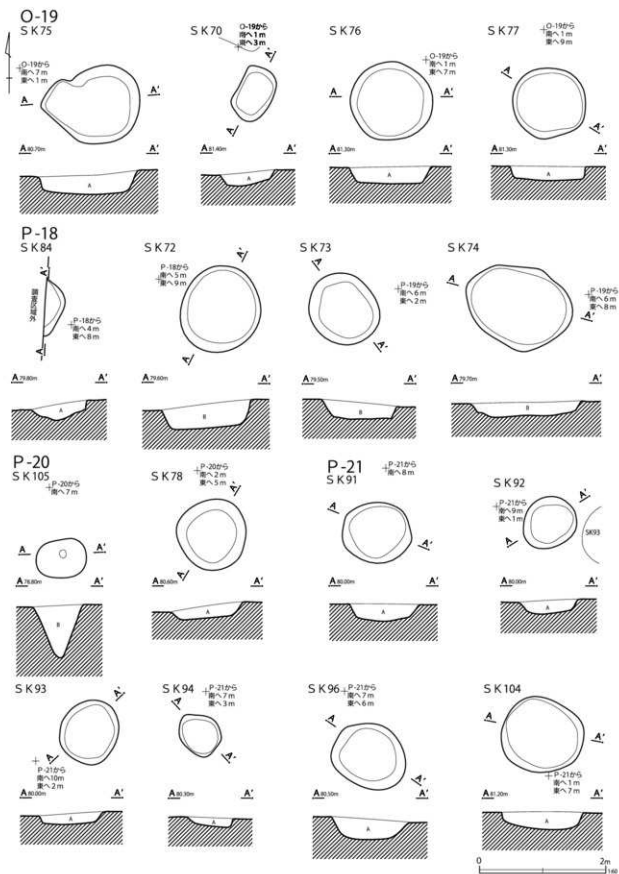
少ない出土遺物から、土壌の時期を特定することは困難である。しかし、竪穴住居跡・掘立柱建跡の隙間に分布する傾向から、同時期の土壌であれば、これらの建物跡に関連する用途・性格を想定する必要がある。なお、遺構図は各土壌の配置位置を重視し、グリッドごとに方位を統一して図示した(第100～107図)。規模や出土遺物等については、第47表に記載した。

発掘調査では、土壌の覆土を二分類した。必要に応じて土層断面図を作成し、図示した。Aは、暗褐色土・黒褐色土。黒色土を主体とし、ローム粒子・ブロックを含む。なお、ローム粒子・ブロックは各土壌によって相違する。Bは、暗黄褐色土。風化したローム土を主体とし、混入物はほとんどみられない。しまりは弱い。

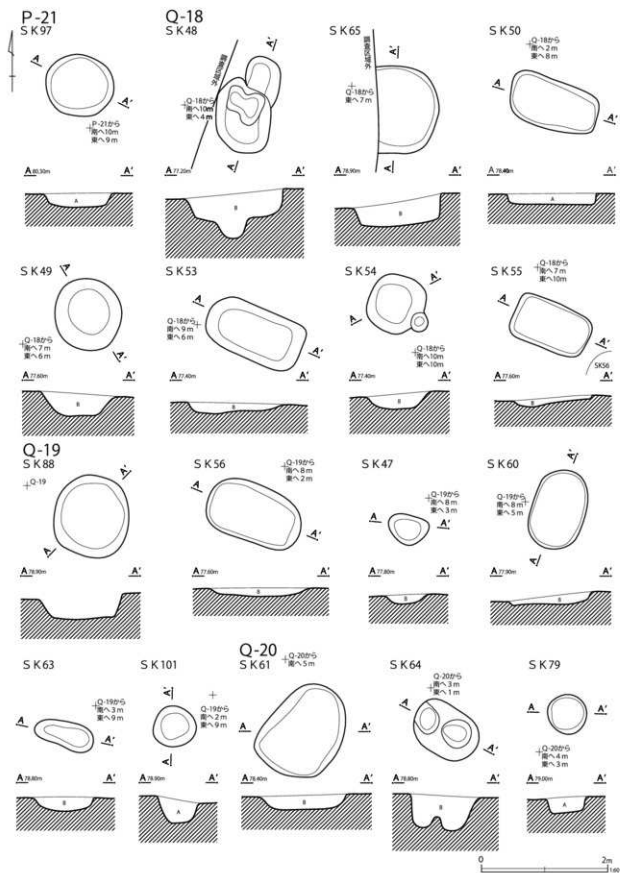
出土遺物 (第108図)

10は、第10号土壌から出土した椀型滓である。残存する長さ6.5cm・幅6.6cm・厚さ2.2cm・重さ85.5g、非磁着である。

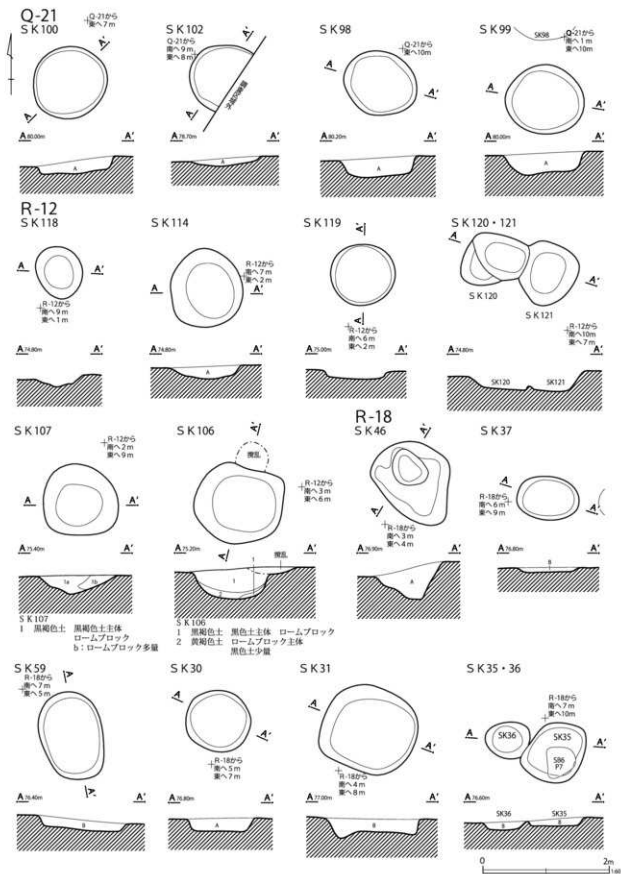
11は、第51号土壌から出土した砥石である。残存する長さ7.55cm・幅4.5cm・厚さ3.3cm・重さ133.2g、石材は凝灰岩である(図版29-3)。



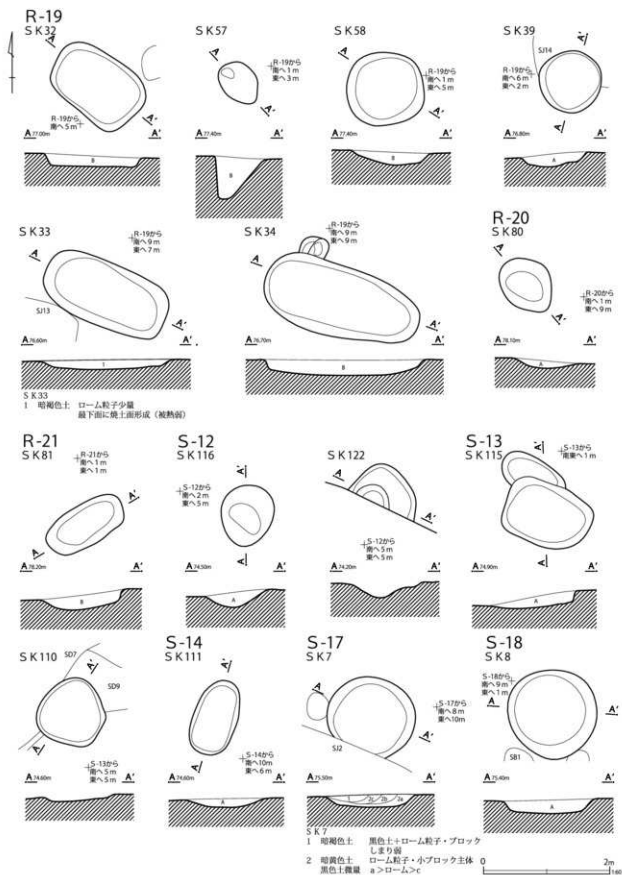
第100図 土壌 (1)



第101図 土坑 (2)

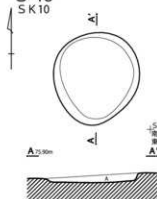


第102図 土坑 (3)

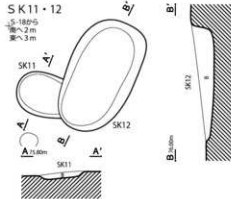


第103図 土坑 (4)

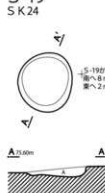
S-18
SK10



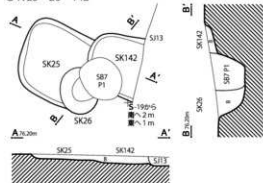
SK11・12



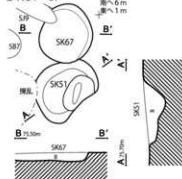
S-19
SK24



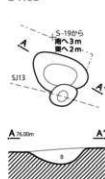
SK25・26・142



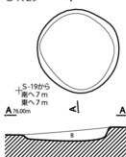
SK51・67



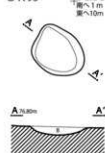
SK52



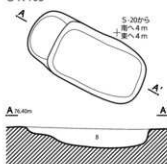
SK29



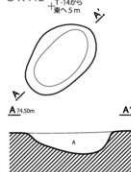
S-20
SK95



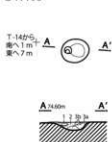
SK103



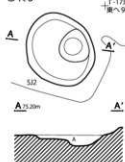
T-14
SK112



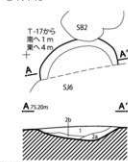
SK108



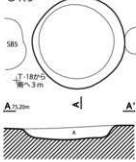
T-17
SK6



SK140



T-18
SK5



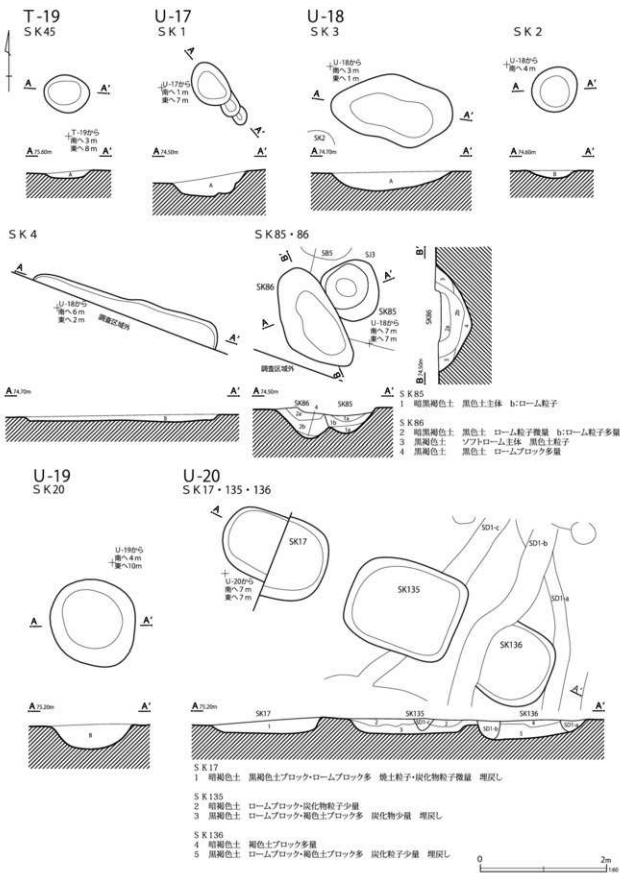
SK108

- 1 赤褐色土 焼土・炭化物主体
- 2 暗黒褐色土 多量のローム粒子
- 3 黒褐色土 微量の焼土粒子・黒色土粒子

SK140

- 1 暗黒褐色土 ローム粒子と5mm以下のロームブロック粒子を混入する
- 2 黄褐色土 ソフトローム土主体 黒色土
- 3 黒色土多

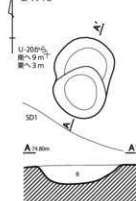




第105図 土墳 (6)

U-20

SK18



SK19

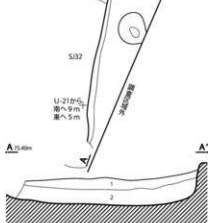


U-21

SK139



SK137

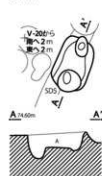


SK137

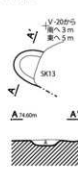
- 1 暗褐色土 褐色土ブロック多量 焼土粒子・ローム粒子少量
2 暗褐色土 褐色土ブロックやや多 ロームブロック少量

V-20

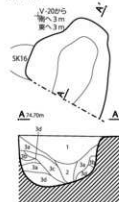
SK14



SK16



SK13

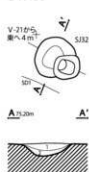


SK13

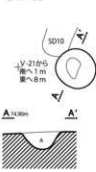
- 1 暗褐色土 柱状収容の再埋設 焼土粒子・炭化物粒子微量
2 暗褐色土 柱状 褐色土ブロック・ロームブロック やや多 炭化物微量
3a 暗褐色土 柱状方充填土 炭化物粒子少量
3b 暗褐色土 ロームブロック多 炭化物少量
3c 暗褐色土 ロームブロック微量 炭化物粒子少量
3d 黒色土 ロームブロック多量

V-21

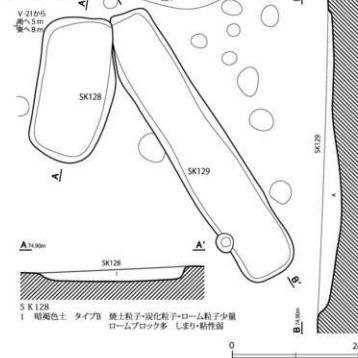
SK138



SK132



SK128・129



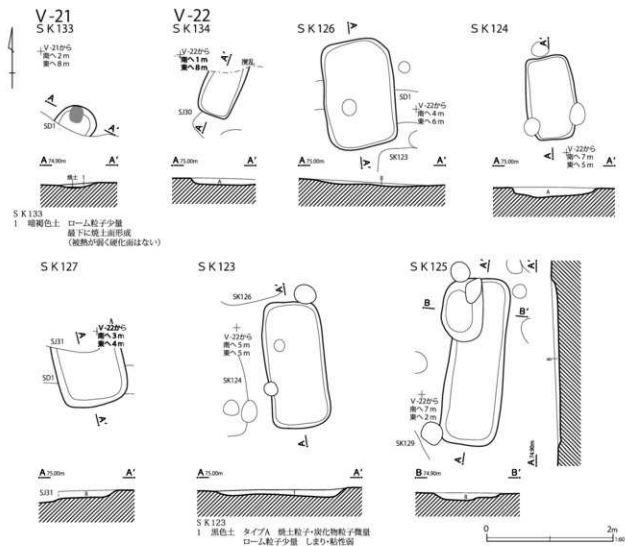
SK138

- 1 暗褐色土 ローム粒子
焼土粒子・
炭化物粒子若干
ロームブロック多
2 暗褐色土

SK128

- 1 暗褐色土 タイプB 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量
ロームブロック多 しまり・粘性面

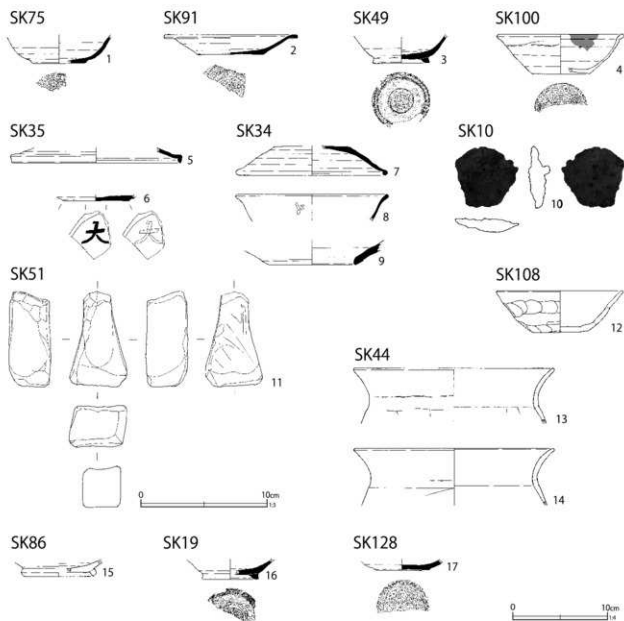
第106図 土壌 (7)



第107図 土壌 (8)

第47表 土壌一覧表 (第100～107図)

番号	Grid	平面形態	長軸方位	長軸m	短軸m	深さm	覆土	重複遺構	出土遺物
1	U17	不整形	N-39° -W	1.16	0.53	0.30	A		
2	U18	円形	N-1° -W	0.70	0.70	0.11	B		
3	U18	不整形	N-82° -W	1.90	1.10	0.30	A		
4	U18	長方形	N-72° -W	[3.04]	[0.36]	0.10	B		
5	T18	円形	N-1° -E	1.46	1.42	0.20	A		須恵器環・甕/土師器甕
6	T17	楕円形	N-24° -W	1.20	1.04	0.15	A	SJ2	
7	S17	円形	N-65° -W	1.38	[1.14]	0.20	A	SJ6⇒○/SJ2	須恵器環・甕(木野)/土師器甕
8	S18	円形	N-86° -W	1.40	1.40	0.20	A		須恵器環
9	S18	欠番							
10	S18	円形	N-1° -E	1.45	1.36	0.12	A		須恵器環/土師器甕
11	S18	隅丸長方形	N-66° -W	0.70	[0.7]	0.01	B	SK12	須恵器環・甕/土師器甕
12	S18	隅丸長方形	N-27° -E	1.85	1.10	0.30	B	SK11	須恵器台碗/土師器甕
13	V20	不整形	N-22° -E	1.35	[1.3]	0.80	B	SK16	
14	V20	隅丸長方形	N-21° -E	0.93	0.85	0.30	A	SD5	
15	S19	SB7Pit6							
16	V20	楕円形	N-74° -W	0.52	[0.4]	0.10	A	SK13	
17	U20	隅丸長方形	N-80° -W	1.72	1.35	0.20	A		須恵器環・台碗・甕(木野)/土師器甕
18	U20	不整形	N-17° -E	1.25	0.85	0.30	B		土師器甕



第108図 土曜出土遺物

番号	Grid	平面形態	長軸方位	長軸m	短軸m	深さm	覆土	重複遺構	出土遺物
19	U20	長方形	N-14° -E	1.28	0.90	0.22	B		須恵器・甕(木野)/土師器甕
20	U19	円形	N-38° -W	1.50	1.35	0.38	B		
21	T17	長方形	N-61° -W	1.63	0.86	0.15	A	SJ1⇒○	
22	T19	SB4Pit20							
23	T19	長方形	N-50° -W	2.05	0.70	0.24	A	SJ8⇒SB4⇒○	須恵器甕/土師器甕
24	S19	円形	N-22° -E	0.95	0.85	0.13	A		須恵器甕/土師器甕/陶器
25	S18	長方形	N-68° -W	1.20	[1.0]	0.01	B	SK26/SK142	
26	S19	円形	N-10° -W	0.74	0.38	0.48	B	SK25/SK142/SB7	
27	S19	SJ13SK1							
28	T19	楕円形	N-49° -E	0.96	0.77	0.40	A	SJ8⇒○	
29	S19	円形	N-8° -W	1.34	1.26	0.22	B		
30	R18	円形	N-65° -W	1.02	0.96	0.22	A		須恵器台・甕(木野)/土師器甕
31	R18	隅丸方形	N-69° -W	1.47	1.30	0.32	B		土師器甕・甕

番号	Grid	平面形態	長軸方位	長軸m	短軸m	深さm	覆土	重複遺構	出土遺物
32	R19	隅丸長方形	N-55° -W	1.53	1.00	0.20	B		
33	R19	隅丸長方形	N-65° -W	2.03	1.00	0.15	B	SJ13	
34	R19	楕円形	N-69° -W	2.50	1.14	0.23	B		須恵器環・甕(未野)/土師器甕
35	R19	楕円形	N-87° -W	0.70	0.58	0.12	B	SB6/SK36	須恵器環・甕(未野)/土師器甕
36	R18	隅丸方形	N-28° -E	1.00	0.85	0.12	B	SK35	
37	R18	楕円形	N-85° -W	1.00	0.70	0.08	B		土師器甕
38	T20	長方形	N-3° -E	1.55	1.15	0.62	B	SJ10⇒○	
39	R19	円形	N-63° -E	1.00	0.95	0.20	A	SJ14⇒○	須恵器環・台碗(未野)/土師器甕
40	T18	SB4Pit19							
41	T18	SB4Pit19							
42	T18	SB4Pit19							
43	T19	楕円形	N-66° -W	0.94	0.82	0.82	A	SJ8⇒SB4⇒○	
44	T19	隅丸方形	N-62° -W	1.30	1.02	0.90	A	SJ8⇒SB4⇒○	須恵器環/土師器環・甕
45	T19	不整形	N-87° -W	0.72	0.60	0.10	A		
46	R18	不整形	N-33° -W	1.45	1.12	0.55	A		須恵器環(未野)/土師器甕
47	Q19	不整形	N-87° -W	0.65	0.45	0.12	B		
48	Q18	不整形	N-15° -E	1.55	0.80	0.70	B		
49	Q18	円形	N-32° -W	1.18	1.08	0.35	B		須恵器環・甕(未野)/ロクロ土師器
50	Q18	長方形	N-73° -W	1.40	0.76	0.18	A		
51	S19	長方形	N-55° -E	1.04	0.80	0.32	B	SK67	須恵器環/土師器環・甕
52	S19	不整形	N-59° -W	0.90	0.60	0.22	B		
53	Q18	長方形	N-67° -W	1.56	0.82	0.17	B		
54	Q18	方形	N-73° -E	0.90	0.85	0.25	B		土師器甕
55	Q19	長方形	N-67° -W	1.24	0.74	0.12	B		
56	Q19	長方形	N-69° -W	1.56	0.80	0.12	B		須恵器台碗・甕(未野)/土師器甕
57	R19	不整形	N-43° -W	0.74	0.54	0.66	B		
58	R19	円形	N-90° -E	1.22	1.15	0.20	B		須恵器環(未野)
59	R18	楕円形	N-11° -W	1.40	1.00	0.15	B		
60	Q19	楕円形	N-20° -E	1.28	0.83	0.14	B		土師器甕
61	Q19	隅丸長方形	N-38° -E	1.55	1.15	0.20	B		土師器甕
62	Q19	SB8Pit5							
63	Q19	不整形	N-74° -W	0.95	0.42	0.22	B		
64	Q20	楕円形	N-63° -W	1.08	0.75	0.53	B		須恵器環・甕・長頸(未野)/土師器甕
65	Q18	隅丸方形	N-3° -E	1.36	[0.96]	0.40	B		須恵器環・甕(未野)/土師器甕
66	P18	欠番							
67	S19	円形	N-2° -E	0.94	0.82	0.14	B	SJ9/SK51	
68	S17	SJ2床下土壌							
69	R19	円形	N-86° -W	0.70	0.64	0.62	B	SJ15⇒SJ14⇒○	須恵器環・甕(未野)/土師器甕
70	O19	長方形	N-27° -W	0.87	0.54	0.18	A		
71	P20	隅丸方形	N-42° -W	1.54	1.20	0.60	A	SJ21⇒○	
72	P18	円形	N-26° -E	1.40	1.24	0.40	B		須恵器環・長頸(未野)/土師器甕台甕
73	P19	円形	N-42° -W	11.70	1.02	0.26	B		須恵器台碗・甕(未野)/土師器甕
74	P19	楕円形	N-75° -W	1.73	1.34	0.26	B		須恵器甕(未野)/土師器甕
75	O19	不整形	N-85° -E	1.54	1.22	0.36	A		須恵器環(未野)/土師器甕
76	O19	円形	N-90° -E	1.29	1.22	0.26	A		
77	O19	円形	N-76° -E	1.18	1.14	0.20	A		
78	P20	円形	N-30° -E	1.12	0.11	0.20	A		
79	Q20	円形	N-87° -W	0.63	0.62	0.25	A		須恵器環・甕(未野)/土師器甕
80	R20	不整形	N-40° -W	0.97	0.80	0.12	A		
81	R21	楕円形	N-60° -E	1.35	0.65	0.22	B		縄文
82	P19	SB8Pit1							
83	P19	欠番							
84	P18	長方形	N-9° -E	0.88	[0.32]	0.24	A		

番号	Grid	平面形態	長軸方位	長軸m	短軸m	深さm	覆土	重複遺構	出土遺物
85	U18	隅丸方形	N-36° -W	0.96	0.94	0.28		SJ3/SK86	土師器甕
86	U18	楕円形	N-65° -W	1.74	0.90	0.44		SJ3/SK85	須恵器・台・蓋・甕(木野)/土師器 甕
87	S20	長方形	N-75° -W	2.42	1.42	0.30		SJ18⇒○	
88	Q19	隅丸方形	N-2° -E	1.30	1.15	0.40			須恵器・甕(木野)/土師器甕
89	U19	欠番							
90	U18	欠番							
91	P20	円形	N-68° -W	1.10	0.96	0.26	A		須恵器(木野)/土師器甕
92	P21	円形	N-60° -E	0.90	0.76	0.20	A		
93	P21	円形	N-43° -E	1.00	0.90	0.18	A		土師器甕
94	P21	不整形	N-43° -W	0.71	0.60	0.15	A		土師器甕
95	S21	不整形	N-53° -W	0.86	0.70	0.12	B		
96	P21	楕円形	N-55° -W	1.20	1.00	0.36	A		須恵器・甕(木野)/土師器甕
97	P21	円形	N-65° -W	1.08	0.98	0.22	A		須恵器/土師器・甕
98	Q21	楕円形	N-74° -W	1.19	1.02	0.30	A		土師器甕
99	Q21	楕円形	N-80° -E	1.25	1.10	0.34	A		土師器甕
100	Q21	円形	N-50° -E	1.18	1.10	0.20	A		須恵器(木野)/土師器・甕
101	Q19	円形	N-80° -W	0.66	0.63	0.38	A		
102	Q21	円形	N-35° -E	1.10	[0.50]	0.12	A		須恵器長頸/石器剥片
103	S20	長方形	N-60° -W	1.97	0.95	0.25	B		須恵器・甕(木野)/土師器甕
104	P21	楕円形	N-80° -W	1.28	1.18	0.25	A		須恵器・甕/土師器甕
105	P20	隅丸方形	N-87° -E	0.78	0.60	0.80	B		
106	R12	隅丸方形	N-89° -W	1.40	1.27	0.50			須恵器(木野)/土師器甕
107	R12	隅丸方形	N-90° -E	1.14	1.20	0.28			土師器甕
108	T14	円形	N-77° -E	0.45	0.38	0.13			
109	T14	SB15Pit7							土師器甕
110	S13	不整形	N-78° -W	1.10	1.06	0.08	B	SD7/SD9	須恵器(木野)/土師器甕
111	S14	楕円形	N-17° -E	1.22	0.70	0.11	A		須恵器・台・甕(木野)/土師器甕
112	T14	楕円形	N-47° -E	1.30	0.86	0.32	A		須恵器(木野)/土師器甕
113	S15	SB10Pit1							
114	R12	円形	N-0° -E	1.26	1.14	0.18	A		
115	S13	長方形	N-76° -W	1.40	0.98	0.18	A		須恵器(木野)/土師器甕
116	S12	円形	N-31° -E	0.94	0.82	0.24	A		土師器甕
117	S15	SB10Pit6							
118	R12	楕円形	N-15° -W	0.85	0.72	0.16			
119	R12	円形	N-88° -W	1.02	0.98	0.10			
120	R12	不整形	N-77° -W	0.94	0.68	0.26		SK121	
121	R12	不整形	N-14° -E	0.98	[0.80]	0.30		SK120	
122	S12	円形	N-65° -W	1.10	[0.62]	0.25			
123	V22	長方形	N-5° -W	2.00	0.95	0.12	A		須恵器・長頸甕(木野)/土師器甕
124	V22	長方形	N-7° -W	1.30	0.82	0.15	A		
125	V22	長方形	N-8° -E	2.64	0.96	0.06	B		土師器甕/片岩
126	V22	長方形	N-80° -W	1.70	1.10	0.10	B	SD1	須恵器・台・甕/土師器甕/片岩
127	V22	長方形	N-77° -E	1.05	[0.9]	0.15	B	SJ31⇒○⇒SD1	土師器・甕
128	V21	長方形	N-19° -E	2.30	1.22	0.18	B	SK129	須恵器・甕(木野)/土師器・甕
129	V22	長方形	N-37° -W	4.80	1.00	0.30	A	SK128	須恵器・甕/土師器甕/縄文
130	U22	欠番							
131	V21	欠番							
132	V21	円形	N-67° -W	0.65	0.60	0.26	A	SD10	須恵器・甕/土師器甕/縄文
133	V21	円形	N-25° -E	0.62	[0.42]	0.06		SD1	
134	V22	長方形	N-23° -W	0.60	[0.72]	0.10	A	SJ30⇒○	
135	U20	長方形	N-86° -W	1.80	1.40	0.15		○⇒SD1	
136	U21	長方形	N-60° -W	1.27	[1.08]	0.20		○⇒SD1	須恵器/土師器・甕
137	U21	長方形	N-12° -E	[2.68]	[0.8]	0.42		SJ32⇒○	土師器甕

番号	Grid	平面形態	長軸方位	長軸m	短軸m	深さm	覆土	重宝遺構	出土遺物
138	U21	円形	N-19° -E	0.65	0.58	0.18		SJ32⇒○	須恵器環/土師器甕
139	U21	円形	N-71° -W	0.78	[0.4]	0.10	B	SJ32⇒○	
140	T17	間丸方形	N-80° -E	[1.22]	[0.56]	0.22	A	SJ6⇒○/SB1	
141	S18	不整形	N-13° -W	[1.12]	0.70	0.10		SB4⇒○	
142	S19	長方形	N-75° -W	0.96	[0.78]	0.16	B	○⇒SJ13/SB7/SK25	

第48表 土壌出土遺物観察表 (第108図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	環		[3.0]	(5.8)	EIK	25	良好	灰	SK75 末野産 底部回転糸切り	26-9
2	須恵器	皿	(13.8)	2.1	(6.8)	DH1K	15	不良	にいがし焼	SK91 末野産 酸化塩 底部回転糸切り	
3	須恵器	高台付埴		[3.0]	(6.0)	EIK	80	良好	にいがし焼	SK49 末野産 貼付高台 底部回転糸切り 二次的焼成・赤色化	
4	須恵器	環	13.0	4.2	(6.0)	EHIK	40	良好	にいがし焼	SK100 内面1面に油煙状の付着物(油忌不明)(明台に転用か)	
5	須恵器	蓋	(17.8)	[1.7]		EIK	25	良好	灰	SK35 末野産	
6	須恵器	環		[0.7]	(6.8)	EHIK	25	普通	黄灰	SK35 末野産 底部周辺へラ 墨書「大」	26-8
7	須恵器	蓋	(15.4)	[3.1]		EHIK	20	普通	灰黄	SK34 末野産	
8	須恵器	環	(16.0)	[2.9]		IK	5	普通	にいがし焼	SK34 末野産 墨書(文字不明)	
9	須恵器	瓶		[2.6]	(9.2)	IK	10	良好	灰	SK34 末野産 単孔式(孔径8.8cm)	26-10
12	土師器	環	13.1	4.4	5.8	CHIK	75	普通	にいがし焼	SK108 平底 二次的焼成による内面風化顯著 №1	
13	土師器	甕	(21.0)	[5.8]		CHIK	20	普通	赤褐	SK44	
14	土師器	甕	(20.6)	[6.1]		CIK	10	普通	明赤褐	SK44	
15	灰輪陶器	皿		[1.8]	(7.2)	HIK	30	良好	にいがし焼	SK86 遠江産 貼付高台 底部回転糸切り	
16	須恵器	高台付埴		[2.1]	(6.0)	EIK	30	良好	黄灰	SK19 末野産 貼付高台 底部回転糸切り 外面草木土痕	
17	須恵器	環		[1.2]	(5.6)	EIK	50	良好	黄灰	SK128 末野産 底部回転糸切り	

6. 石器集中

旧石器時代の遺構・遺物は、調査区域北端のN-19、O-19・20・21グリッドから石器集中2箇所が検出された。この地点は、丘陵上の平坦部から南側の斜面部に移行する肩部にあたる。北坂遺跡第2次調査において、後期旧石器時代前半期の石器集中が検出された地点の南側に近接する。今回検出された石器群の出土層位は、第V層の

浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group) を含むハードローム層中で、後期旧石器時代後半期に相当する。

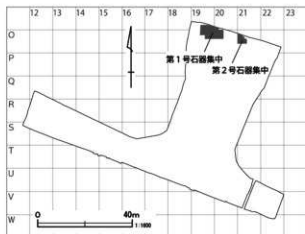
第1号石器集中 (第109～111図)

N・O-19・20グリッドに位置する。石器は南北約3.5m、東西約7mの範囲に8点が疎く分布する。

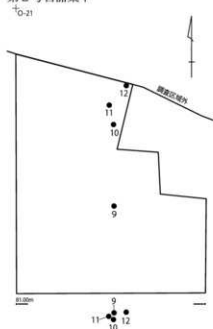
第49表 旧石器観察表 (第109・110図)

No.	石器集中遺物No.	層位	X (m)	-Y (m)	Z (m)	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	図版	
1	1	7	V	19399.313	-57292.974	80.649	ナイフ形石器	チャート	2.90	1.70	0.50	1.58	30-1
2	1	4	V	19399.234	-57290.38	80.489	剥片	黒色頁岩	4.00	2.50	1.50	9.57	30-1
3	1	1	V	19400.120	-57289.982	80.700	剥片	黒色頁岩	6.10	3.70	1.00	15.24	30-1
4	1	6	V	19398.665	-57288.834	80.443	剥片	ガラス質黒色火山岩	5.20	3.80	1.20	17.42	30-1
5	1	5	V	19398.761	-57290.198	80.332	剥片	黒色頁岩	5.20	4.40	1.60	36.95	30-1
6	1	9	V	19401.947	-57295.54	80.594	剥片	ガラス質黒色火山岩	2.20	4.20	0.90	4.58	30-1
7	1	3	V	19399.488	-57290.123	80.471	剥片	黒色頁岩	5.40	7.60	2.30	94.70	30-1
8	1	8	V	19400.708	-57293.418	80.551	剥片	ガラス質黒色火山岩	7.00	6.20	2.40	79.35	30-1
9	2	1	V	19395.838	-57277.954	80.833	剥片	黒色頁岩	5.70	2.80	1.30	20.17	30-1
10	2	2	V	19397.555	-57277.964	80.694	剥片	砂岩	7.00	4.60	2.10	68.55	30-1
11	2	3	V	19397.964	-57278.054	80.738	剥片	黒色頁岩	5.90	3.90	1.50	21.65	30-1
12	2	4	V	19398.469	-57277.695	80.845	剥片	黒色頁岩	5.50	3.30	3.00	29.15	30-1

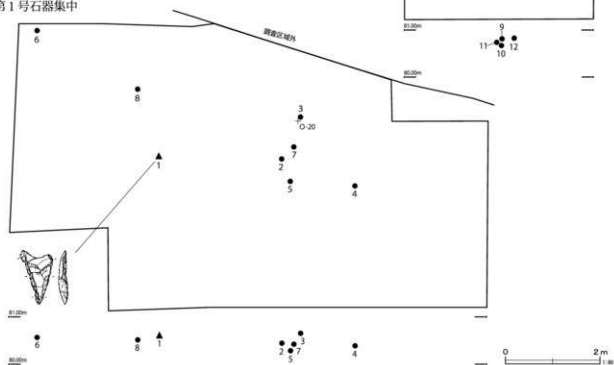
旧石器調査位置



第2号石器集中



第1号石器集中



第109図 第1・2号石器集中

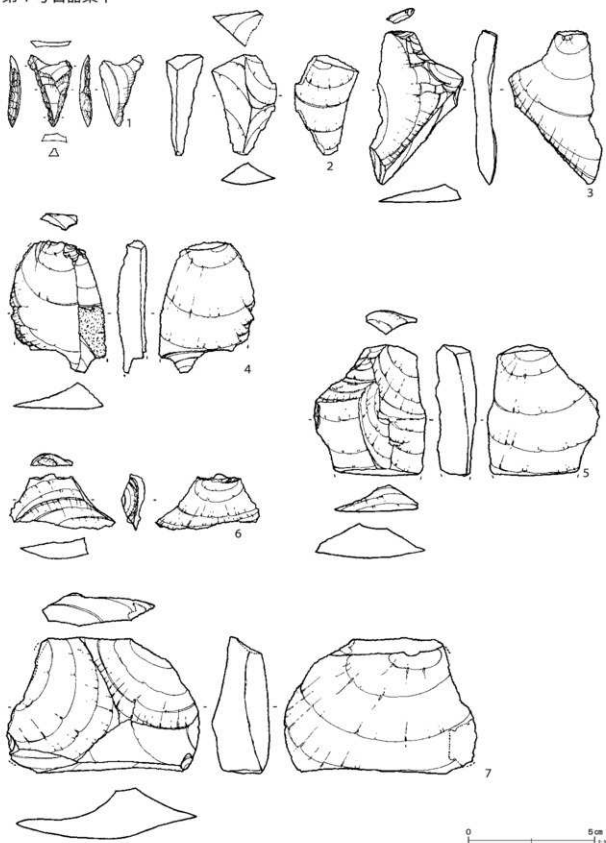
1は、チャート製の切出形石器である。外形は逆三角形を呈している。幅広の剥片を横位に用いており、調整加工が両側縁に施されている。2・3・5・7は、頁岩製の剥片である。表面の風化が進んでおり、一部縁辺が剥落している。全体に厚手の幅広剥片である。4・6・8は、ガラス質黒色安山岩製の剥片である（図版30-1）。

第2号石器集中（第109・111図）

O-21グリッドに位置する。4点の石器が、南北方向約3mの範囲に直線的に並んで出土した。

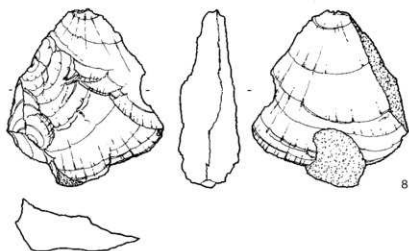
9・11・12は頁岩製、10は砂岩製の剥片である。第1号石器集中の頁岩製剥片と同様に表面の風化が進んでいる。11・12は、正面に自然面を大きく残している（図版30-1）。

第1号石器集中

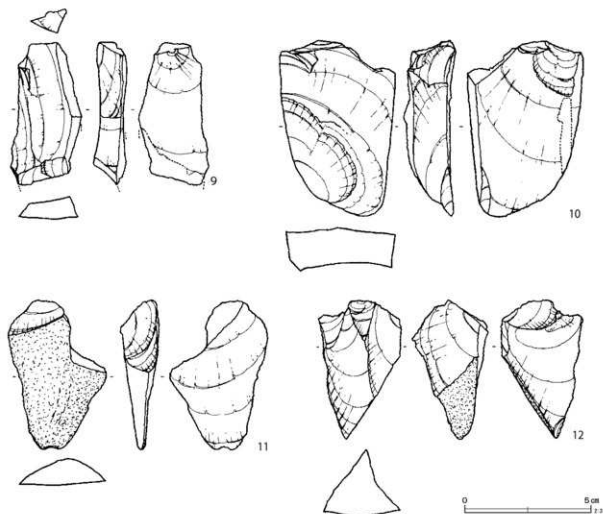


第110图 石器集中出土遺物 (1)

第1号石器集中



第2号石器集中



第111图 石器集中出土遺物（2）

7. その他の遺構と遺物

(1) グリッドピット (第112図)

グリッドピットは、土壌と同様に竪穴住居跡・掘立柱建物跡の隙間に分布する傾向が強い。一部に柱痕が認められたピットも存在したが、組み合わせや配列を捉えることはできなかった。

グリッドピットの覆土は、A・Bに二分された。

Aは、暗褐色土・黒褐色土。黒色土を主体とし、ロームブロック・粒子を含む。ロームブロック・粒子は、各ピットによって相違する。掘立柱建物跡の柱穴に類似したものが多く、深く、しっかりとしたピットが多い。

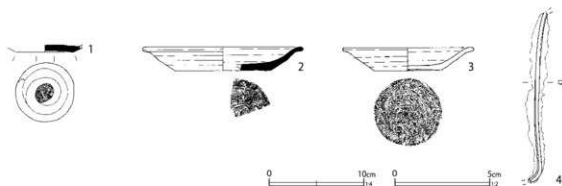
Bは暗黄褐色土。黒色土と風化したローム粒子が均質に混在している。比較的浅く、形態や壁は不確定である。

出土遺物は少なく、4点が図示し得た。

3は、U-18グリッドPit7から出土したロクロ土師器環の完形品である。二次的な被熱を受け、タール状の付着物がみられる。目的・性格は不明であるが、埋納されていた。

4は、V-22グリッドPit4から出土した棒状鉄製品である。先端部は欠損しているが、上下両端が逆方向に屈曲する。残存する長さ9.3cm・幅0.2cm・厚さ0.2cm・重さ4.8gである (図版27)。

ほかに、T-18グリッドPit23から須恵器環・土師器環、T-18グリッドPit28から須恵器環、T-19グリッドPit2から土師器台付甕台部、T-19グリッドPit3から土師器甕が出土しているが、細片のため図示し得ない。



第112図 グリッドピット出土遺物

第50表 グリッドピット出土遺物観察表 (第112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	環		[0.8]	6.2	IK	95	良好	灰	S14GrPit36 末野産 底部周辺ヘラケズリ	
2	須恵器	皿	(16.6)	2.5	(10.0)	EHK	10	普通	灰	S19GrPit10 末野産 底部回転糸切り 内面磨痕	
3	土師器	環	13.6	2.4	7.2	EHK	100	普通	橙	U18GrPit7a1 底部回転糸切り 二次的被熱 タール状付着物	26-11

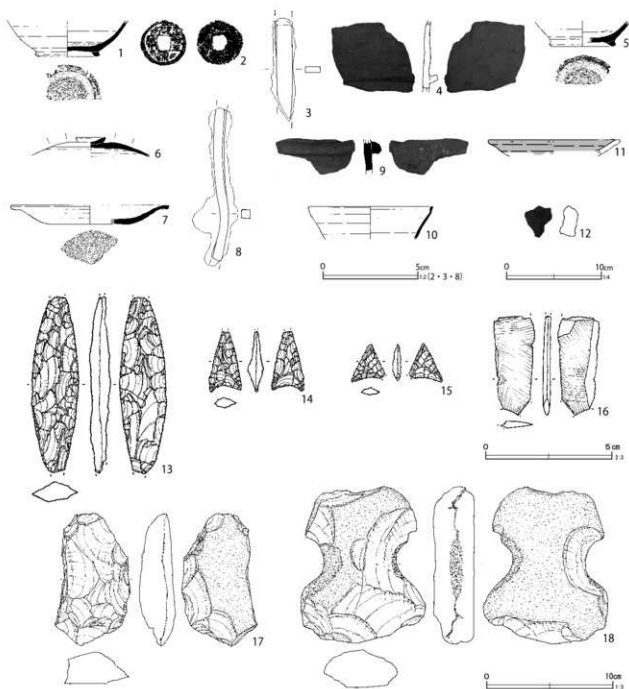
(2) グリッド遺物 (第113図)

発見されたグリッドが明確ではあるが、帰属する遺構が不明な遺物を、グリッド遺物として第113図に掲載した。出土した遺物の多くは、住居跡や掘立柱建物跡から出土した遺物と同時期・同種のものである (1~12)。また、縄文時代・弥生時代の石器も図示した (13~18)。

2は、P-19グリッドから出土した元豊通寶である。1078年始鑄の北宋銭である (図版27)。

3は、S-17グリッドから出土した棒状鉄製品である。両端は欠損し、断面は扁平な長方形である。残存する長さ5.1cm・幅0.8cm・厚さ0.15cm・重さ8.4gである (図版27)。

4は、S-19グリッドから出土した土師器甕片



第113図 グリッド遺物

第51表 グリッド遺物観察表 (第113図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考 出土位置	図版
1	須恵器	高台付埴		[3.8]	(6.8)	EHK	30	普通	にぶ・青	Q19Gr 末野産 貼付高台 底縁部糸切り 内面に重ね焼きの痕跡	26-12
4	土師器	甕				EHK		普通	にぶ・黄	S19Gr 貼付突帯	
5	須恵器	高台付埴		[2.7]	(7.0)	EHK	30	普通	にぶ・黄	S8Gr 末野産 貼付高台 底縁部糸切り 内面に重ね焼きの痕跡(粘土付帯)	
6	須恵器	蓋		[2.1]		EHK	40	普通	にぶ・黄	T18Gr 末野産 酸化焰	
7	須恵器	坏	(16.2)	2.0	(8.0)	EK	15	不良	にぶ・黄	U17Gr 末野産 底部回転糸切り	26-13
9	須恵器	甕				EHK		普通	にぶ・黄	U19Gr 末野産 貼付突帯 U19Grトレンチ	
10	須恵器	小型密か	(13.0)	[3.5]		EHK	10	普通	灰白	U19Gr 末野産 U19Grトレンチ	
11	陶器	皿	(13.9)	[1.8]		HK	5	良好	灰黄	U20Gr 内外面施釉	

で、頸部に鐙が巡る（図版26-12）。9は、U-19グリッドから出土した末野産須恵器の甕もしくは羽釜の破片である。4と同様に鐙が巡る（図版26-13）。11は陶器皿の細片である。

8は、U-17グリッドから出土した棒状鉄製品である。両端を欠損し、わずかに蛇行する。断面は正方形である。残存する長さ8.1cm・幅0.45cm・厚さ0.45cm・重さ12.4gである（図版27）。

12は、U-22グリッドから出土した鉄塊系遺物である。残存する長さ3.1cm・幅2.8cm・厚さ1.7cm・重さ20.7gである。磁着する（SK130）。

13-18は、平安時代の住居跡に混入していた石器をグリッド遺物と一括して報告する。

13は、柳葉形の槍先形尖頭器である。上下両端を欠損する。調整加工は両面に施され、横断面はレンズ状を呈する。石材はチャート、重さは11.0gである。第12号住居跡から出土した（図版30-

2）。

14・15は、石鏃である。14はガラス質黒色安山岩製で、重さは11.1gである。15は黒曜石製で、重さは0.4gである。14は第28号住居跡、15は第15号住居跡から出土した（図版30-2）。

16は磨製石鏃である。上半部及び左半分を欠損する。基部に径3mm程度の窪みがみられるが、貫通していない。弥生時代の所産と考えられる。石材は粘板岩、重さは2.6gである。第16号住居跡から出土した（図版30-2）。

17・18は打製石斧である。17は裏面に自然面を残し、横断面径は蒲鉾状を呈する。石材は黒色頁岩、重さは189.9gである。18は分銅形を呈する。石材は砂岩、重さは478.8gである。17は第33号住居跡、18は第25号住居跡から出土した（図版30-2）。

V 自然科学分析

中平遺跡の発掘調査では、2軒の竪穴住居跡から炭化した建築部材が検出された。これらの建築用材の樹種選定の状況を明らかにするとともに、

1. 樹種同定

はじめに

中平遺跡（埼玉県寄居町大字用土字中平地内）は、埼玉県北西部、荒川扇状地の北側に分布する松久丘陵（堀口1986）の南縁部に立地する。発掘調査の結果、平安時代を中心とする竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土壇・溝跡などが確認されている。

本報告では、竪穴住居跡の建築部材の木材利用の検討を目的として、竪穴住居跡から出土した炭化材を対象として樹種同定を実施した。

試料

試料は、第12号住居跡から出土した炭化材6点（炭化材⑨～⑭；試料No.1～6）と、第31号住居跡から出土した炭化材4点（No.38・40・41・37；試料No.7～10）の計10点である。なお、試料の詳細（遺構名・遺物No.・形状など）は、結果とともに第52表に記した。

分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の剖断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標準および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定した。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考とした。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995-1999）を参考とした。

遺跡周辺の植生や自然環境を復元するため、樹種同定を実施した。

結果

同定結果を第52表に示した。分析に供された炭化材は、全て広葉樹のクリに同定された。なお、第12号住居跡の炭化材⑪（試料No.3）には、直径2cmの芯持丸木と、それよりも明らかに大きい径をもつ破片が認められたが、いずれもクリであった。以下に、クリの解剖学的特徴等を記す。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）
ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

考察

今回の分析対象とされた第12号住居跡と第31号住居跡は、いずれも平面が東西方向を長軸とする長方形を呈し、東側にカマドが設置される。第12号住居跡から出土した炭化材は壁際を中心として確認されており、分析に供された炭化材6点は北壁に直交する、垂木と推定される資料である。一方、第31号住居跡の炭化材は、住居跡の中央付近や北西隅付近から出土しており、分析には住居跡の中央付近の床面より出土した資料3点と北西隅より出土した1点が選択されている。

これらの炭化材試料は、いずれも破片の状態であった。第12号住居跡の炭化材⑪（試料No.3）は、前述したように直径2cmの芯持丸木と、それよりも大きい径と考えられる破片試料が認められたことから、複数の部材が混じっている可能性がある。また、第31号住居跡の炭化材のうち、No.37（試

料№10)は、半径2cmのミカン割状を呈することから、本来は直径4cm程度の半裁木あるいは芯持丸木であった可能性がある。さらに、第12号住居跡の炭化材⑭(試料№6)は板目板状を呈する破片であったが、炭化材は年輪界で割れやすいことから本来の形状を反映していない可能性が高い。

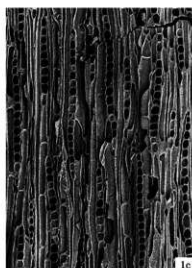
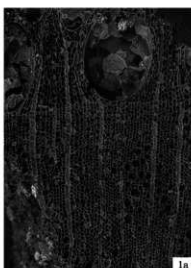
これらの炭化材の樹種同定の結果、全て広葉樹のクリに同定された。クリは、二次林などに生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。今回の結果や木材の材質を考慮すると、硬く強度の高い樹木の選択が推定され、2軒の住居跡では同様の木材利用であったことも考えられる。

本遺跡の近隣地域における住居跡より出土した炭化材の調査事例についてみると、台耕地遺跡(旧花園町)の古代の住居跡2軒から出土した炭化材3点にクヌギ節とサクラ属が確認されているほか、大久保山遺跡(本庄市)では、古代の住居跡5軒から出土した炭化材60点の樹種同定の結果、大部分がクヌギ節であり、クリ、ケヤキ、ヤマグワが若干混じる組成が明らかとされている。

また、埼玉県内における古代の住居跡から出土する建築部材の調査事例では、二次林の主要構成種となるクヌギ節やコナラ節が主体を占め、クリは少量が混じる程度である。現段階では、今回の結果のようにクリのみで構成される木材利用が確認されておらず、特異な傾向と言える。なお、クリ材が多用された背景としては、クリ材の入手が容易であったことなどが想定されるが、クリは建築部材としては適材であることや、果実が食用できる有用植物であることからクリ栽培などの関連も想定され、本遺跡周辺における木材利用に関わる調査事例の蓄積が期待される。

第52表 樹種同定結果

試料№	遺構	遺物№	形状	種別 (分類群)
1	第12号住居跡	炭化材⑨	破片	クリ
2	第12号住居跡	炭化材⑩	破片	クリ
3	第12号住居跡	炭化材⑪	芯持丸木(直径2cm) 破片	クリ
4	第12号住居跡	炭化材⑫	破片	クリ
5	第12号住居跡	炭化材⑬	破片	クリ
6	第12号住居跡	炭化材⑭	破片(板目板状)	クリ
7	第31号住居跡	№38	破片	クリ
8	第31号住居跡	№40	破片	クリ
9	第31号住居跡	№41	破片	クリ
10	第31号住居跡	№37	ミカン割状(半径2cm)	クリ



1. クリ (第31号住居跡: №37)

a: 木口, b: 柃目, c: 板目

100 μ m: a

100 μ m: b, c

第114図 樹種同定炭化材

引用文献

- 林昭三 1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 堀口萬吉 1986「埼玉県の地形と地質」『新編 埼玉県史 別編3 自然』,埼玉県 7-74.
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31」京都大学木質科学研究所 81-181.
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32」京都大学木質科学研究所 66-176.
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33」京都大学木質科学研究所 83-201.
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料34」京都大学木質科学研究所 30-166.
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料35」京都大学木質科学研究所 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012「木の考古学 出土木製品用材データベース」海青社 449p.
- 島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.編 1998「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 海青社 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E., 1989, IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

VI 調査のまとめ

中平遺跡は、松久丘陵から分離した派瀬山先端の南面する緩斜面地に形成された集落跡である。竪穴住居跡38軒、掘立柱建物跡15棟、井戸跡1基、溝跡13条、土城122基、旧石器時代の石器集中2箇所、ピット多数が検出された（第4・5図）。一方、市町境界によって区切られる深谷市北坂遺跡第2・3次調査区域では、住居跡がほとんど存在していない（西井2016a・2016b）。

中平遺跡の集落は、丘陵肩部に沿って東西に延びる第6号溝跡によって北側を画され、この以南の緩斜面に住居跡・掘立柱建物跡等が分布する。唯一、区画溝の北側に所在する第22号住居跡は規模が極めて小さく、須恵器環類が整然と重ね置かれたような状態で出土していることから、通常の居住施設とは異なる機能が想定される。

中平遺跡の集落は、8世紀前半代から形成が開始されている。該当する第8・18号住居跡は、主軸方向をほかの住居跡と違えている。8世紀後半から本格的に集落が展開し、10世紀初頭頃まで続いている。竪穴住居跡36軒と掘立柱建物跡15棟が、斜面地の等高線に沿った方向に整然と建物軸を揃えている。

住居跡は、東壁に設置された東カマド、長軸を主軸方向に向ける長方形プランを基本とし、南向き斜面地に適した様相と捉えられる。カマドの芯材には、幅10cm前後、長さ20cm前後の片岩が多用されている。袖部から架け口前面にアーチ状に差し渡され、これを骨組みとしてドーム状の燃焼部が形成されている。9世紀後半の第15号住居跡では、破損した土師器甕3個体が天井部の芯材に転用されていた。また片岩は、支脚にも用いられている。さらに、大型住居の第38号住居跡を除いて、柱穴は確認されていない。

複数のカマドをもつ住居跡は9例あり、第16号住居跡では3基のカマドが検出された。複数の

カマドが、同時に使用されていた痕跡はみつからない。住居の建て替えや拡張に伴って造り直されたと考えられるが、この状況を捉えることは困難であった。また、複数カマドの住居は住居同士の重複が比較的少なく、長期間の居住が推定される。

第21号住居跡では、中央に設置された炉跡から金属分の付着した羽口・埴塼・鍛造剥片や金床石と思われる礫、壁際から未使用の鋳型が出土した。また斜面直下の第19号住居跡からは、酷似した使用済みの鋳型片が出土している。炉は小規模なものであるが、出土遺物等から金属製品の鋳造と鍛造が行われていた工房遺構と推定される。中平遺跡では鉄製品の出土例が多く、集落内で生産されていたことが要因の一つにあげられる。

第12・31号住居跡は焼失家屋で、壁際から炭化した垂木材等が並んで発見されている。分析の結果、これらの炭化材はすべてクリに同定された。埼玉県内の古代住居跡の建築部材はクスギやコナラが主体を占め、クリは少量が混じる程度とされている。そのため、クリのみで構成される木材利用は特異な傾向と捉えられ、建築部材として適したクリ材の入手が容易な環境が整えられていたことが予想される。またクリの薪炭は燃料効率が高いとされ、第21号住居跡の鍛造・鋳造の燃料として栽培・薪炭生産されていたという想定も可能である。また、第12号住居跡から出土した著しく歪んだ土師器甕は消費製品としてみられず、生産地ゆえに使用されたものと考えられる。また同時期の土師器甕も多く、土師器生産との関連が注目される。土師器焼成坑は確認されていないが、集落内での土師器焼成を裏づけるものである。ここにも薪炭の活用が想像される。

掘立柱建物跡は、傾斜が緩くなる斜面地裾部を中心に分布する。2間×2間の側柱建物が多く、

長軸を南北に向ける。

第4号掘立柱建物跡は、3間×2間の身舎に北・西・南側の三面に廂が付く大型建物である。身舎と廂の柱掘方の差異は明瞭である。重複する建物遺構との新旧関係は、第5号掘立柱建物跡(同規模柱穴・3間×2間)→第4号掘立柱建物跡→第3号住居跡(灰釉陶器皿出土)の順序が捉えられている。

第9号掘立柱建物跡は、3間×2間の身舎の西側に廂が付設される。また、第10号掘立柱建物跡は唯一の総柱建物跡で、南側に同時期の井戸跡が隣接する。

8世紀から10世紀初頭に展開した中平集落の特徴の一つに、竪穴住居・掘立柱建物が斜面の等高線に沿った方向に軸を揃えて構築されていることがあげられる。立地地形が大きく作用していると思われるが、丘陵上面の平坦地ではなく、斜面地が占められている。また、竪穴住居は東カマドを基本とし、多数の住居による複雑な重複関係がない。また掘立柱建物と住居の重複の場合も概ね同様である。このように、建物が整然と配置された印象が強く感じられる。

次に、廂が付設された第4・9号掘立柱建物跡は、西側に正面を意識した建物である。これと関連して、長軸が南北方向を指す2間×2間の側柱建物も、西側に正面を意識した可能性がある。

さらに、東カマドの竪穴住居は、出入り口をカマド対面の西側に想定できる。このように、建物遺構には共通した正面観が推定される。

このような整然とした建物配置と正面観の同一性から、企画性の高い集落と位置づけることができる。遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・紡錘車・土錘・鉄製品・砥石等が出土し、灰釉陶器と鉄製紡錘車は同時期の集落遺跡と比べて多い。

中平遺跡の建物施設が意識する西側には、北坂遺跡の平安時代集落が隣接している。第5号住居跡から円面硯、第8号住居跡から銅鈴、第13号住居跡から鉄製の「中」字の焼印・鉤と灰釉陶器も多く出土し(中島ほか1981)、一般集落と異なる古代の役所的な性格が想起させられる。中平遺跡・北坂遺跡は古代の榛沢郡と那珂郡の境界付近に位置し、この地域で古代の役所との関連を予想させる集落跡が発見された意義は大きい。そして、中平遺跡の企画性の高い集落展開は、このような遺跡の性格と無縁ではないであろう。

第21号住居跡では、鍛造・鋳造による金属製品の生産が行われていた。周囲には製鉄跡や灰滓場等の製鉄関連の遺構・遺物が発見された寄居町中山遺跡(小林1999・赤熊2005)、炭焼き窯が検出された美里町如来堂D遺跡(横川ほか1980)などが所在し、この地域の金属製産に関わった遺跡として加わることとなった。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1988 『竪穴塚・古井戸 歴史時代編Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
赤熊浩一 2005 『中山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第313集
朝岡康二・田辺律子 1982 『暮らしの中の鉄と銅のもの』 日本人の生活と文化7 ぎょうせい
井上尚明 1986 『竪穴塚・古井戸 古墳・歴史時代編Ⅰ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
小林 高 1999 『中山遺跡(第1次・第2次)』 寄居町遺跡調査会報告第20集
小林 高 2006 『赤浜牛貝利遺跡』 寄居町遺跡調査会報告第29集
中島宏ほか 1981 『清水谷・安光寺・北坂』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集
西井幸雄 1999 『城見上/木野Ⅲ/花園城跡/箱石』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集
西井幸雄 2016a 『北坂遺跡Ⅱ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第425集
西井幸雄 2016b 『北坂遺跡Ⅲ』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第426集
横川好富ほか 1980 『甘藷山』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会